

庄内

第4号

特集 あの日、あの時

庄内の昔を語る会

巻頭言

「庄内の昔を語る会」会長 野海 正治

会誌「庄内」も、四号を刊行するはこびとなりました。ご支援の皆様方に対し、深く感謝申しあげます。

庄内小学校西側の城山公園一帯は、今から五三〇年程前に築かれた安永城（別名鶴翼城^{つるばね}）の跡です。この安永城を構成する四つの砦の中の一つ、城山の西方にある金石城跡の発掘調査が、都城市文化課の手によって、平成三年八月から十二月にかけて行われました。そして、往時のかまど跡などの遺構、陶磁器などの遺物、多数が検出されて、金石城が本丸を守るための砦で、家臣たちの居住跡であることが証明されました。同時に城郭の「縄張り」も実施されましたので、近く安永城の全容が解明され、城山を中心とする公園化は、更に進展することと思えます。

なお、金石城にまつわる話の悲運の武将、北郷相久自刃の跡と伝わる石囲いの遺跡は、そのまま島津墓地である釣璜院跡の地に移し安置されました。

昭和二十年、終戦間近の八月六日、都城大空襲の日、私たち庄内の街も大きな被害を受けました。以来、已に四十数年、当時のくわしい状況を知る人も少なくなり、その風化が心配されます。それで四号は、当時の生々しい経験の記録と、更に八月十五日終戦の折のそれぞれの貴重な体験を収録、特集号と致しました。ご協力いただいた方々に厚く御礼申しあげます。

目次

巻頭言

平成三年度の歩み 昔を語る会書記局 1

特別寄稿

庄内開田の父 坂元源兵衛翁(その一) 瀬戸山 計佐儀 2

研究

庄内史跡探訪(その四) 坂元徳郎 8

石碑・石仏その他(その四) 山元昭平 26

金石城発掘調査 横山哲英 30

講演のあらまし

人形浄瑠璃の公演 山之口麓文弥節人形浄瑠璃保存会 33

祖先のくらし 瀬戸山 計佐儀 34

町文化・体育情報

庄内地区公民館活動の現状 日高覚助 35

全国高校総体自転車ロード・レース 浦田兼義 37

遊・YOU・庄内川 蒲生宏孝 38

大いなる庄内川 大川原 紀美男 40

庄内川に魅せられて 小野基宏 41

二十一世紀への学校づくりを目指して 中原照美 43

文芸欄

旅の思い出(奈良、京都)

南崎喜美

44

青春の回想(その一)

黒木聖

44

庄内俳句会

45

子や孫に語り伝える話

太平洋戦争の教訓

黒木聖

48

残念至極な思い出(その二)

徳永幸男

50

終戦の日前後

黒木ツミ

52

「かんだれ」より怖い爆弾

蒲生トミ

53

あの頃の記事から

片ノ坂登

54

賑やかだった庄内の街

水谷文江

57

最後の訣れ

平田光盛

58

私の歩んだ道(その二)

和田盛行

60

尊敬する亡父の話

本野アキ

61

私が子供の頃聞いた話(その二)

宮崎長友壮二

62

招魂碑並記念碑移転のこと

西区池田正己

64

塚野孝之丞の墓碑に詣でて

西区塚野米

65

ひくさの奴踊

千草長友久二

67

特集 あの日、あの時

昭和二十年八月六日 庄内空襲

72

昭和二十年八月十五日 終戦

105

宮崎「庄内会」紹介	125
読者よりの便り	127
編集後記	129

表紙題字	大河内 浩爾
表紙写真	平田念仏堂付近から見た高千穂の峯
イラスト	片ノ坂 登

平成三年度の歩み

庄内の昔を語る会書記局

この会発足五年を記念して、総会時に山之口麓の人形浄瑠璃公演を計画したところ、庄内地区公民館連協、荘内商工会等の協力もあって、会場にはあふれる程の一般観衆の参加もあり、大好評を博しました。

本年度、特記すべき事項としては、教育委員会による金石城発掘調査とそれに伴う相久自刃の跡石囲いの釣黄院移転があります。

これに関連して当局との接渉、町民への働きかけもあって、小中学生や年若い年齢層の郷土の史跡に対する関心が高まりつつあることは、喜びに堪えません。

発掘調査については、市埋蔵文化財調査員、横山哲英氏（東区出身）の貴重な資料を本誌に掲載しました。

なお、本会の会誌「庄内」も会員からの積極的な投稿だけでなく、遠く町外からも御支援、御激励頂いたことに対し、心から感謝、お礼申し上げます。

年	月	日	曜日	諸行事	内容
3	5	18	土曜	総会・行事 公演	司会 木幡敏正氏 山之口麓人形浄瑠璃
	6	11	火	市文化課へ陳情	相久自刃の跡移転の件
	26	11	水	ふる里祭実行委	展示協力の件
	15	7	日	理事会	史跡探訪計画
	28	7	日	史跡探訪	川崎、財部町方面
	30	8	火	市文化課へ陳情	相久自刃の跡移転の件
	9	9	金	市文化課に協力	相久自刃の跡城山へ移転終る
	19	9	月	理事会	庄内活性化の構想について
	2	9	月	後懇親会	市文化課参加
	17	9	火	編集委	「庄内」編集方針、計画
	21	9	土	市文化課と協議	原稿集約
	24	9	火	編集委	庄内活性化の構想
	28	10	土	後理事会	原稿読み合せ
	30	10	月	講演会	九月例会の件
	30	10	月	編集委	私たちの祖先のくらし 瀬戸山 計佐儀氏
	22	10	火	編集委	編集事務終了
	2	11	土	ふる里祭実行委	ゲラ刷り校正
	2	11	土	理事作業	展示コーナーの件
	2	11	土	理事作業	町ふる里祭展示
	2	11	土	理事作業	会誌「庄内」販売
	2	11	土	理事作業	各地区の歩み作成の件
	2	11	土	理事作業	金石城発掘現場にて
	2	11	土	理事作業	於観光ホテル
	25	11	月	理事反省会	金石城縄張り図作成の件
	30	11	土	市文化課へ協力	西岳、夏尾地区
	19	12	木	史跡探訪	前田正名翁碑文
	6	12	月	碑文案案委	〃
	17	12	金	碑文案案委	史跡案内板設立予定地
	2	12	土	現地視察	前田翁碑文
	14	12	木	碑文案案委	総会準備
	15	12	金	後理事会	
	15	12	金	会計監査	

特別寄稿

庄内開田の父

坂元源兵衛翁（その一）

瀬戸山 計佐儀

一、坂元家の遠祖

古事記の最初に誌された神に天之御中主神あめのみなかぬしのかみがいて、高御産巢日神たかみむすひ及び神産巢日神かみむすひを合せて造化三神として天地の初めの時に高天原たかまはらに生成した。その天之御中主神の子・津遠魂命の三世の孫に天兒屋根命あめのこやねという人がいて日本神話の神の一人であるが、彼は天照大神が岩戸隠れした時、天岩窟あめのいわやから出すために祝詞のりとを申し、神楽で神慮を慰めたという。「こやね」とは言綾根ことあやねの意味で、言葉のあやの巧みな神であったようである。

天兒屋根命は天孫・瓊々杵尊にぎのひこが高天原から南九州に降臨の時に輔翼・随従し、専ら神祇の奉斎に勤仕したが、この神の二十三世の孫が中臣連鎌子なかとみむらじで舒明・皇極・孝徳・斎明及び天智の五

帝に仕え、大化の改新の功績により逝去の前年、天智八年（六六九）に大織冠を授けられて内大臣となり、藤原姓を賜わって名を鎌足といった。

その後藤原家は繁栄を極めて高位高官に列し、全国土にその子孫は蔓延するに至ったが、南九州では万寿三年（一〇二六）に太宰大監だざいのたいげん・平季基が都城に下向して大開墾を行い、墾田の悉くを藤原閑白家に寄進したが、それは島津荘園として後には八千町歩に及ぶ大荘園に発展して、藤原家の一大財源として一族大隆盛の財政的な基盤をなした。

藤原家では島津荘園の管理のため、地頭や押領使或いは弁済使として支族の者を次々に南九州に派遣したので、彼等は土着して土豪となり、都城地方には藤原家の末裔と称する者は甚だ多い。

二、近世の祖先たち

その末裔の一人に中近世の頃下向して来た者に刑部大夫ぎょうぶだいふなる人がいて、姓を坂本と名乗って安永村に住むようになった。（※昔、山久院墓地に、寛政四年没、坂元休右エ門（法名は常覚真我信士）という墓があったが、坂元家の祖先であるか否かは判然としない。）その末孫に坂元（本）休八という人がいて

天神馬場に居住していたが、彼は狭隘な安永であくせくするを好まず、広大な天地を求めて西岳のオゴツ（小川内）に移住して専ら農耕と牧畜に従事し、附近の荒蕪地を開墾して田畑とし、後には小川内の外に吉之元や不動堂及び狭野久保に数十町を所有するに至った。

そして又、小川内の南西の岡約百町歩を牧場として、草刈り場は小川内の前の岡約五十町歩であったが、牝馬を約五十頭も所有して附近の農民にも飼育させた。自家でも常に十数頭を飼養していて、繁殖のため最良の種馬を導入していた。

二歳の野卸し駒（放牧して訓練していない駒）は、毎年四頭ほどを都城島津家の厩舎に買上げられ、残りは日向行きと称して宮崎地方に販売していたという。休八の着眼と努力、視野の大ききには驚くべきものがあつた。

彼の家格は大番格で都城領主に随行して江戸に参勤したこともあつた。彼は天明元年（西暦一七八一）一月十日に生れ、文政七年（一八二四）七月十一日に死去した。享年六十三。

初代の休八には嫡子がいなかったため、西岳村の千足（千多羅寺があつた土地）の名家吉原家から源右エ門を養子に迎えて坂元家を継がせた。彼は寛政六年（一七九四）に生れ嘉永元年（一八四八）十一月四日に死去した。五十四歳、法名は安楽円

心居士といったが、養子の身分であつたので万事表面には出ず、思い切つた事業も出来ず、専ら休八の事業を学び、継承したようである。

三代休右エ門は享和元年（一八〇一）七月十一日生れである。彼は父祖の業をよく継承して家計の殷賑を計り、金一万貫を都城島津家に献上したので家格は一等あがつて大番から小番となつた。小番の方が大番より上であるが、大番は領主館の警固や市内の巡回役で一定の石高が給されている。

休右エ門は又行司役を仰せつかったが、これは霧島山麓の猪猟の総取締役であり、死ぬまでこの役を勤めた。

狩猟は都城支藩の通例行事として毎年冬に行われ、領主もこれに参加した大狩猟であつた。小川内居住時代の坂元家は家運隆盛を極め、家屋も又豪壮であつたので領主もここを宿舎に當てて毎年幾夜かを宿泊していた。それで坂元家はオゴツのカイヤ（小川内の仮屋）と呼ばれていた。仮屋には他の役人たちも宿泊していたようである。

西岳小学校の西の上を水路が通っている所の坂は「ミケシの坂」という。殿様が狩りを終えて帰られる時、この坂に留つて後ろの霧島山を見返りされていたので、見返しの坂の名がついた。又ある年、この坂の上に腰を下ろして休憩し、霧島山を眺

めておられた時のこと。附近の農家の女房がサキサキしてうまい小練り柿を差し上げたところ、余りにうまかったので「まだあいかよ」と所望された。それから小練り柿のことを西岳では、アイカヨ柿とゆうようになったというエピソードが残っている。

三代休右エ門は明治十一年（一八七八）六月二十三日、七十歳で死去したが、彼は生前、孫の源兵衛に行司役の仕事を見習わせて、この役目は直接孫に譲ったという。

四代の源右エ門は文政五年（一八二二）十二月十二日生れ、幼名を正之助といい、長じて藩庁から都城島津家の開田掛りを仰せつけられて、田野や吉之元地方の田地を開墾した。しかし、明治維新の版籍奉還に当って三島通庸が都城地頭として赴任し、検地と大御支配（農地改革）を行ったので、西岳にある坂元家の田畑は殆ど没収されて、吉之元に田五反歩、小川内に田二町歩を残すのみとなって、他は全部、附近の士族や小作人たちに分配された。

彼は明治五年（一八七二）八月一日に死去し、行年五十一歳。跡は長男の源兵衛が相続し、次男の米助は地頭の命により分家して宮地の坂元家を立てた。

三、源兵衛の鴻業

(1) 安永移住

近世坂元家の第五代目に当る源兵衛は、源右エ門の長男として天保十一年（一八四〇）六月十六日に西岳の小川内に生まれ、幼名を正助といった。幼にして穎悟、大志あり。若くして祖父休右エ門の行司役（都城支藩の猪獵取締役）を見習い、その後を継いだ。彼は亦、その後、開田掛りに任ぜられて、鋭意職務遂行に努力した。



明治二年の三島地頭の大御支配（農地改革）の制によって西岳の耕地は殆ど他人の手に渡り、同年九月に安永の住宅地及び商工市街地の造成と士民の麓部落糾合に際して源兵衛もまた呼

び集められ、他の士族の次・三男たちと同様に田畑を夫ぞれ五反歩づつの他、宅地一反二畝と住宅及び厩舎・湯殿などをあてがわれ、ここに移住した。彼は田畑の外に草高二十石を特に給せられたのは、西岳の土地の多くを没収されたことの外に、今後に課せられる治政協力を三島地頭が期待したからであろう。

(2) 三島地頭への協力

三島地頭は、都城地方の三郷分割と大御支配の二大方策を標榜して治政に当り、各方面に画期的な事業を僅か二ヶ年の間にやつてのけたが、彼の治政は一種の軍政であり、従来の暖やあづかい与頭・横目などの職名はこれを廃して、小隊長・半隊長・分隊長・小頭・調和などの軍職を任じ、諸郷を軍政の下において軍事と行政の両面で諸郷の振興を図ったのであるが、三島は源兵衛を砲兵半隊長に任じている。時に齡二十八歳。彼の地位は高かったわけであるが、その器量の程が推察されよう。

三島は鹿兒島から教育者の三原宗五を招聘して教育の振興を図った外、養蚕や養鶏・製茶を奨励して産業を興こし、神社の建立や修補を行い敬神崇祖の思想を鼓吹して各方面に多くの業績を残した。特に道路の開さく造成や堤防工事等も行って庄内・三股の大発展の基盤を短年月の間に仕遂げたが、源兵衛は積極的に三島の治政に協力すると共に、彼の事業に大変学ぶところ

があつたものようである。

明治四年十一月の新県設置を機会に、西郷と大久保の要請で三島は都城の地頭を辞して上京した。三島を都城地頭に推挙したのは西郷であつたが、西郷は今度は東京府知事に推薦したけれども、三島は任に非ずとして幕臣の大久保一翁を推し、自らは七等出仕に甘んじていた。しかし乍ら新政府は三島の英才を埋没させず、東京の教部大丞に任じた。恐らくこの職は、現在の東京都の教育長に相当するであろう。

三島が地頭を辞して東京に去つた翌年三月、源兵衛は荘内の里正兼戸長助に任せられて行政に当ることになった。里正は郡長の命を受けて庶務を処理する属史であり、戸長助は村助役に当るのだろう。

庄内村の行政に当ることになった源兵衛は、村の振興と村民の福利増進に力を効し、子女の教育の重大さにも深く思いをいたして、先ず自分の子供たちの学資を得るために事業を興そうとして、明治五年ごろより志布志から魚貝や海藻類を買い入れて都城や庄内村で販売した。明治八年には西岳のセリゴ（芹川内）に製鉄工場を設けて、シラス（白砂）中の砂鉄を採取、製鉄を初めて翌年には漸く稼働する運びとなつたが、翌十年早々には西南戦争が勃発した。

(3) 西南戦争従軍

同年三月八日には、彼は都城一番隊として総員二五五人と共に従軍出発し、高原・飯野・人吉・八代を経て十二日に熊本二本木の本営に到着、直ちに各隊に編成されて植木で激戦中、敵弾が左親指をもぎ取り頭蓋骨の頂点を貫通した。幸に脳までは達せず一命は取りとめて帰り、荘内の萩原医院で治療した。ここで治療中、頭の化膿部から毛髪とガーゼが親指大の塊となつて出て来たという。

一通り負傷部が治癒すると源兵衛は再度出陣したが、西郷軍の敗色は益々濃厚となり、敗走を重ねて高城で官軍に降服し、自宅で謹慎したという。

彼の従軍した時の地位は何だったのだろうか。

二十八歳の時に三島地頭から半隊長を命ぜられた程であるから、そして従軍は三十六歳の時であるのだから、只の隊員ではなかった筈である。もし彼が一部の長でもあったなら、戦後長崎の裁判所に送致されて、分隊長なら一年、半隊長なら二年、小隊長なら三年の懲役刑に処せられ、どこかの刑務所に服役した筈である。

それなのに自宅謹慎ですんだのは、従軍はしても彼は思うところがあつて長となつて兵を統率・命令することを避けたのか、

それとも只の兵隊だったと申し立てて長崎連行を免れたのだろうか。免れた人はいたといわれている。

荘内から西郷に私淑して従軍した者は前夜二百十七人もあつて、その内五十六人が戦死を遂げた。源兵衛はこの戦死した同僚達の心を思い遣り、遺族の悲しい心情を考へて、同志に謀つて明治十三年三月、山久院の境内に戦没者の慰霊のため招魂碑を建立した。この碑は、その後昭和三十八年四月、城山の頂上に移設されて現存している。なお招魂碑建立の頃に丁丑役従軍者記念碑も建てられたが、同時に城山に移された。というのも同年に庄内町の丁丑・日清・日露・日支及び大東亜各戦役の戦死者の総合慰霊塔を城山に建立したからであつた。

(4) 観瀾書院

下つて明治十八年有志と相謀つて観瀾書院を城下の東麓に創立し、推されて初代院長として士族の子弟の教育に当たつたが、戸長助として公費を以て建設したものか、或いは有志と協力出資したものかは詳かではないが、首唱者だったことは間違いない。

長男英俊の記録によれば書院建設の委員長は源兵衛、副委員長は丸目健蔵と満木藤蔵で、教師には島田丑弥太と杉村徳穂・柏木弥一郎を招聘し、講師は堀愿と子の英俊であつたが、建物

は廃校となった川崎分教場の廃材転用であった。

庄内には観瀾舎というものがあって、これは三島や三原が明治三年の頃、鹿児島各郷にある健児舎に倣^{なま}って結社されたもので、士族の子弟間の相互に切磋琢磨する組織であり、従来、役館その他が集会の場所として利用されていたものを、別途専門の建物として建設、勉学・修養の場にしたものである。

観瀾舎は元来士族の子弟の相互教育の結社であったが、明治三十年代に県立の中学校や商業学校及び農学校が設立されるに及んで、健児は従来の士族の子弟から中等学生に自然移行して行き、高等小学生でも向学心のある者はこれに参加して、後日村の三役に選ばれた者も多々いた。観瀾舎の運営については役場も多少助成したが、昭和二十年の敗戦後、自然消滅した。

観瀾舎は観瀾書院の後身だったのか、それとも観瀾舎が一旦衰えて観瀾書院となり、その後また観瀾舎に復したのか詳細はわからない。

筆者の最近の著書紹介

重要な文化財の一つでもある方言は今や消滅しつつあるので、せめて記録に留めておかないといけないと思ひ、著者がライフ・ワークの一つとして二十余年の歳月を以って編集し、集大成を試みた本書の特徴は、凡そ次のとおりである。

- 一、母語である薩摩方言も掲出語彙として解説した他、西諸県及び宮崎県内の各主要方言も参考のため掲げた。
- 二、方言の語源追求につとめた。

都城 さつま 方言辞典 瀬戸山編集

A5版 一〇〇三頁箱入
税込 六〇〇〇円
送料 五〇〇円

- 三、方言には連語の転訛が多いが、各品詞名を夫ぞれ掲げた。
- 四、例文として狂句を掲げ、興味を以って読めるようにした。
- 五、廉価を以って、各家庭に一冊ずつ備えられるようにした。

(類書の約五分の一である。)

研究

庄内史跡探訪（その四）

東 区 坂 元 徳 郎

はじめに

私が子供時代を過ごした昭和の初期は今と比べて文明の進度が極めて遅く明治・大正の習慣は勿論、江戸時代の名残りさえあるような時代でした。

夏にはオミケンの新田溝でスバが青くなるまで水浴びをしました。新田溝では畠婦りのおじさん達がコエタンゴを洗ったり牛や馬を洗ったり、また端の方ではおばさん達がナベのヘグロをこさいだり野菜を洗ったりまた洗濯などもしていました。

秋になれば庭の柿の木に登ってチャイゴネやケドインを腹一杯食いました。

春には両のポケットに青梅をギッシリ詰め込み塩をつけてガリガリ食いながら遊びました。

冬はアカギレやしもやけに悩まされながらも馬場を占領して

暗くなるまでハマウケや陣取り合戦に興じたものでした。大変長閑で幸せだったような気がします。

終戦後民主主義の名の元に未曾有の大改革が行われ私達を取り巻く環境はすっかり変貌しました。そして私達はその苦難や戸惑いの時代を克服して今新しい時代を迎えました。

従来の行政依存型の地域開発から地域住民主導型の開発時代が来たと思います。「庄内の村おこし」は庄内の歴史風土習慣の中で育った庄内の私達こそがその主役でなければならぬと思います。

近年若い人達を中心になってそれぞれの分野で少しずつその動きが出て来たことは誠にすばらしいことだと思います。

私達「庄内の昔を語る会」も庄内の史跡を探訪したり専門の先生方をお招きして庄内の歴史を勉強したりしていますが、会では先般「庄内地区活性化対策（史跡活用面から）」なる草案をまとめ市に提起しました。葬り去られようとする庄内の史跡の整備を行いこれに関する歴史伝承を顕彰して広く皆さんに知ってもらい「村おこし」の一助にしたいというものです。市ではこれに対して積極的に応援助成することが決まりました。ほんとに些かな思いつきでしたがこれが「庄内の村おこし」に少しでも貢献できたらうれしく思います。

創刊号から続くこの「庄内史跡探訪の記録」も今回で四回目を迎えました。庄内の史跡を出来る限りたくさん記録して置きたいと思いますのでご協力をお願いします。

三十九、マリスタン

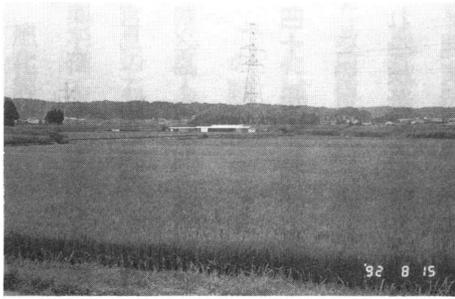
庄内橋から上流三〇〇メートル右岸に、通称マリスタンと呼ばれる場所があります。

江戸時代の古絵図によれば、この付近は「王子門」と言う集落が図示されています。この集落の中に王子権現と言う祠堂がありました。その祠堂のご本尊と言われる木彫の仏像と、摩利支天と刻銘された石柱が、川崎の前畑厚さん宅に現存します。

前畑さんの話では、これは確かにマリスタンからここに移したものだと言うことです。

(詳細は「庄内三号」で山元昭平さんの寄稿があります)

現在、当該地は耕地整理され何の変哲もない平坦な田圃になっていますが、この辺りを通称マリスタンと呼んでいます。



通称マリスタン

よくあることですが、地域の指標となる事物が、その土地の通称になっている所がよくあります。

マリスタンは、摩利支天(マリシテン)の誤称で、王子権現社の別称か「王子門」全体を指していたのか不明です。

「門」についてごく簡単に述べますと、江戸時代、薩摩藩の農業は「門割り制度かどわ」によって耕作が行われていました。大体四、五家族を一つの責任集団として田圃や、畑を作らせ年貢を納めさせていましたが、この農家集団を「門」と言っていました。

ちなみに「庄内地理志」による江戸時代の前川内村(旧庄内村の範囲)には、次のような「門」がありました。

平田 王子門 本平田門 福永門 上和田門 和田門

今平田門 新町門 続山門 藏満門 徳留門 満永門

大久保 大久保門 小久保門 益留門

引土 徳丸門

助 助ヶ久保門 定増門

乙房 乙房丸門 中島門 中吉門 馬籠門 月野門 立野門

権現地門 吉永門 来住門 宮之元門

神田 鶴村門 中村門 七牟禮門 宝満門 堂領門 富田門

本畠中門 今畠中門 吉村門 今堀門 本堀門

今屋 城村門 福田門 岡元門 田中門 今屋門 外今屋門

今山元門 平山門 永岡門

菓子野 菓子野門

宮島 上宮島門 下宮島門 今村門

鵜之島 内村門 鵜之嶋門

以上

四十、母智丘周辺遺跡

この付近は、古来より私達の先祖が住み着いていた処で、これを検証する色々な遺物が出土しています。

縄文時代早期、今からおよそ八千年以上も前、この地で人が生活していたことを示す資料が、丸山一帯から出土していますし、弥生時代の集落跡も確認されています。

奈良、平安時代、今からおよそ千三百年位前になりますと、各地に土豪が出現しますが、これらの人々が使用していたものと思われる土師器や須恵器、焼塩壺などの遺物も出土しています。なお、戦国時代になると「新宮城」という山城があったことが「庄内の地理志」にあらわれています。

狩猟生活から農耕生活、そして戦国時代を経て江戸時代と、この地が人間にとって快適な生活空間であったことがうかがえます。（この項、市文化課横山主事から頂きました）

四十一、明治丁丑之役従軍者記念碑

南州神社の境内に建っています。



明治丁丑之役従軍者記念碑

丁丑之役とは、明治十年の西南戦争のことです。西南戦争は私達にとってあまりにも身近な歴史の一コマですが、一応その大要を文献から拾ってみます。

※明治十年（一八七七）鹿児島私学校派を主軸とする九州土族が、西郷隆盛を擁して起こした反政府戦争で、日本史上最後の内戦です。廃藩置県後の政府の一連の近代化政策、特に秩禄処分、徴兵令、脱刀令などの領主制度解体の強行は土族の、社会的地位と生活に激変をもたらしたその全面的没落を結果した。

他方同じ士族出身者でありながら、政府高官は専制的となり驕奢な生活に傾いたので、一般土族の反政府気分は高まった。

明治六年、政府においては新政策を不満とする西郷隆盛が下

野し、大久保利通の独裁となるや、反政府士族は鹿児島に引き上げて、西郷隆盛を現状打破の象徴として見るようになった。

明治七年には江藤新平の佐賀の乱、明治九年には各県で農民一揆が続発し又熊本、神風連、秋月萩の乱も続発した。

この状況の中で、政府は鹿児島私学校を反政府の拠点とみなし、鹿児島にある政府火薬庫が、私学校派の手に渡るのを恐れて、密かに搬出を始めた。同時に、政府の密偵が捕まったのを機会に、鹿児島私学校派の怒りは暴発して、明治十年二月十四日一万三千の兵が武力蜂起した。

戦争は九州一円に及び、動員された政府陸軍五万八千五百五十八人、海軍二千二百八十人、内戦死六千八百人余、西郷軍の動員兵士三万人、内戦死五千人余

西郷軍は、皮肉にも西郷隆盛自身が創り上げた、統率の取れた政府軍の近代戦力の前に力及ばず、八月二十四日最後の拠点とした城山でついに終焉を迎えた。

この戦いに庄内郷からも、二百十八名が従軍し、そのうち五十六名もの人が戦死しました。

この石碑には、この戦いに従軍した二百十八名の人達のお名前が刻んであります。以下、刻面を右回りにたどりまします。

風化等により、刻字が読み取れないものは□で示しました。

なお、この記念碑は、元豊幡神社境内に建っていたものを、

昭和三十八年城山に忠霊塔を建立する時ここに移転し、今回（平成四年七月）南州神社の境内に再移転されたものです。

（正面）

明治丁丑之役従軍者記念碑

（左側面）

（一段目）

（二段目）

（三段目）

椋田 司

池田 一三

満行 太兵衛

福留 源右エ門

松元 傳右エ門

池田 重之

鬼塚 綱長

有島 助右エ門

時任 行吉

塚野 孝之丞

宮里 直右エ門

桑山 勘七

山元 市助

中村 直右エ門

坂元 源兵衛

山元 政九郎

新田 直右エ門

東 喜之助

村田 正作

永山 篤明

蒲生 才藏

秋永 四郎兵衛

佐藤 善兵衛

松元 繁

有田 貞吉

椎屋 貞四郎

小林 新九郎

亀沢 傳助

瀬戸口 與之進

黒木 嘉藤太

渡司 孝十郎

大峰 猪之七

（四段目）

原田 平右エ門

迫田 休八

清水 彦四郎

池田 藤彦

立山 行友

宮越 正良

野間藤太 長峰通悠 (裏面)

龜沢眞澄 花房傳四郎 (一段目)

福留弥七 塚野傳之進 大川原善右工門

池田仲助 海老原十郎 池田傳助 大川原弥左工門

黒木宗明 椎屋弥次右工門 宮之原休左工門 瀨尾仲五

赤池東吾 (六段目) 桐原四郎右工門 得能直九郎 園木藤兵衛

吉川家徳 加塩武生 東条源左工門 大神新太郎 末原東一

満木藤藏 野崎彦八 矢野弁助 早田才九郎 塚田辰之助

阿久井一二 花堂熊藏 池田政九郎 大神彦左工門 加塩捷巳

秋永長一 八木源九郎 萩原直次 (三段目) 新穂嘉藤太

齊藤辰之助 前田傳九郎 西俣傳太郎 花房兼平 秋永八兵衛

(五段目) 安田豊 荒川内四郎助 入来鉄之進 迫田甚藏

福留伊右工門 清水磯助 羽田傳五左工門 大神新助 藤浪安盛

深川仲十郎 有馬次兵衛 西俣八百助 蒲生次兵衛 阿久井正八郎

紫藤百助 迫田兵右工門 阿久井小一郎 有田貞助 岩切藏右工門

龜沢森助 山元十左工門 (二段目) 花房源兵衛 桂木良耀

伊地知初助 益田百助 財部政九郎 永田正助 坂元千二

奥田猪之助 瀬戸口傳四郎 黒木直彦 猪俣直作 (五段目)

坂元直記 坂元邑司 財部熊四郎 松元紋一郎 池田仲右工門

河野善太郎

宮越祐九郎

鎌田才助

村永直太郎

河野甚太郎 黒木経清 迫田禎助

田代当助 池辺伊十郎 山下直四郎

大神伊助 有田寿右工門 入来林助

大川原弥左工門 (四段目) 瀨尾正助

瀨尾仲五 赤木助兵衛 末原熊次

得能直九郎 園木藤兵衛 有田武右工門

大神新太郎 末原東一 湯之前純秀

早田才九郎 塚田辰之助 迫田善四郎

大神彦左工門 加塩捷巳 志々目米藏

(三段目) 新穂嘉藤太 桂木弥一郎

花房兼平 秋永八兵衛 東熊太郎

入来鉄之進 迫田甚藏 (六段目)

大神新助 藤浪安盛 津田兼敏

蒲生次兵衛 阿久井正八郎 大神忠藏

有田貞助 岩切藏右工門 桐原乙助

花房源兵衛 桂木良耀 立山善助

永田正助 坂元千二 有田休右工門

猪俣直作 (五段目) 野崎政彦

松元紋一郎 池田仲右工門 佐藤孫兵衛

赤池 才四郎

(二段目)

黒木 経廣

蒲生 政助

戸島 直藏

有馬 純重

長友 良助

坂元 直九郎

遠矢 政四郎

臼杵 甚四郎

栗山 政太郎

奥 道晴

長友 善

桐原 善九郎

谷口 乙助

(右側面)

朽山 覚助

(四段目)

(一段目)

長谷場 四郎右エ門

椎屋 傳兵衛

平山 甚左エ門

坂元 直藏

志々目 次助

平山 八藏

中満 熊四郎

長友 弁藏

高橋 直右エ門

鎌田 直左エ門

久保田 良助

鎌田 小右エ門

本野 利右エ門

安田 文藏

鍋倉 新太郎

竹ノ下 柳四郎

宮里 源助

斉藤 新之助

(三段目)

安田 與之助

早田 藤作

丸目 正親

村 永良助

肥後 喜之助

丸目 正行

大川原 乙助

坂元 八百助

田中 重勝

山元 米助

黒川 喜八郎

細山田 乙藏

山之城 四郎右エ門

大神 祐太郎

皿良 豊厚

坂元 折右エ門

長峰 政一

細山田 唯信

(五段目)

入来 厚實

村 永祐之進

鎌田 造助

恒松 兼重

出納委員

岩佐 五兵衛

(六段目)

阿久井 一二

瀬戸口 伊兵衛

高橋 吉五郎

蒲生 次兵衛

東条 伊兵衛

松田 龍之助

蒲生 才藏

壹岐 源助

森 友太郎

福留 弥七

中山 柳四郎

大浦 利吉

財部 繁作書

桑波田 正之進

(宇野才次郎)

石工

黒木 乙助

野口 仙助

立山 糺

竹下 新兵衛

万代 浅市

外山 美登

四十二、招魂碑

南州神社の境内に建っています。

庄内郷から、西南戦争に出陣し戦死した五十六名の方々の、お名前が刻んであります。



西南役戦死者の招魂碑

この石碑も、前項同様元豊幡神社の境内にあったものを城山に移し、そして今回（平成四年七月）ここに移したものです。以下刻面を右回りにたどります。

- | | | |
|----------|---------|---------|
| (正面) 招魂碑 | 中村 直右エ門 | 野口 嘉太郎 |
| (左側面) | 池田 一三 | 梅村 休藏 |
| (上段) | 松元 傳右エ門 | 山下 直助 |
| 椋田 司 | 有島 助右エ門 | 外村 清太郎 |
| 福留 源右エ門 | 齊藤 與八郎 | 児玉 甚之丞 |
| 鬼塚 綱長 | 齊藤 伊左衛門 | 丸目 清作 |
| 束野 孝之丞 | 永山 篤明 | (右側面) |
| 山元 市介 | 宮里 直右エ門 | (上段) |
| 山元 政九郎 | 佐藤 善右兵衛 | 新田 直右エ門 |
| 村田 正作 | 椎屋 貞四郎 | 田中 柳藏 |
| 秋永 四郎兵衛 | 大峯 猪之七 | 立山 行友 |
| 有田 貞吉 | (裏面) | 横山 弥兵衛 |
| 龜沢 傳助 | (上段) | 園田 柳助 |
| 渡司 小十郎 | 明治十三年建立 | 山之上 八郎 |
| 原田 平右エ門 | (下段) | 丸目 助太夫 |
| (下段) | 瀬戸口 與之進 | 松浦 小太郎 |
| 池田 藤彦 | 黒木 才之丞 | 迫田 休八 |

- | | | |
|--------|--------|--------|
| 坂元 正之助 | 牧 五右エ門 | 前田 佐太郎 |
| 満行 太兵衛 | 時任 行吉 | 寺崎 傳兵衛 |
| 池田 重之 | 森 次兵衛 | 桑山 勘七 |
| (下段) | 川崎 藤四郎 | 折田 十郎 |
| 大田 善太郎 | 池田 善太郎 | 梯 正藏 |
| 白谷 熊藏 | | |

四十三、忠魂碑

城山広場の東端に建っています。

明治三十七、八年、日露戦争に庄内村から百八十九名の方々が従軍されました。このうち名誉の戦死を遂げられた十七名の方々の名前が刻んであります。

なお、従軍者のお名前は、前三号の本項三十七に記録しました。また日露戦争の概要についても、同項三十六で述べましたので、ここでは省きます。以下、右回りに刻字をたどります。



日露戦争戦死者の忠魂碑

(正面) 忠魂碑

(左側面)

陸軍歩兵特務曹長 勲七等功七級 桂木良清

曹長 勲七等功七級 東 一二

軍曹 勲七等功七級 長友常二

伍長 勲八等功七級 志々目善右エ門

伍長 勲八等 森友喜

上等兵 勲八等 時任藤一郎

上等兵 勲八等 肥後喜八

(裏面)

野戦砲兵上等兵 勲八等 松永 休右エ門

歩兵一等卒 勲八等 寶満 與四郎

工兵一等卒 勲八等 池田新助

一等卒 勲八等 東 清

一等卒 勲八等 迫田新二

歩兵補充兵一等卒 勲八等 西俣傳七

一等卒 勲八等 大村良助

(右側面)

輜重兵補充兵輪卒 馬籠源兵衛

日獨戦役

海軍上等機関兵曹 勲六等功七級 川畑吉助

陸軍歩兵中尉従七位勲六等功五級

シベリア戦 新地直實

明治四十二年二月建立

庄内村在郷軍人会

財部繁作 謹書

四十四、大東亜戦争戦没者碑

城山広場の東端に建っています。

大東亜戦争、現在では太平洋戦争と称していますが、まだ私共の記憶に新しい所です。庄内からも、多数の人が戦争に行きそして多数の人が帰らぬ人となりました。国土は、敵の爆撃により焦土と化しました。私共の庄内も大きな被害を受けました。



大東亜戦争戦没者碑

老いも若きも、国民の全てが参加した悲惨な戦争でした。念のため、その概要を史書から抽出しておきます。

『昭和十六年（一九四一）十二月八日から二十年八月十五日まで、日本と中国、アメリカ、イギリス、オランダなどの連合国との間に戦われた戦争。』

昭和十二年七月七日の蘆溝橋事件に始まる日中間の全面戦争は日本政府や軍部の期待に反して、拡大と長期化の一途をたどった。このことは日本の戦争資金や資源、労働力に不足を来たし国内経済に深刻な影響を及ぼして来た。この行き詰まった日中戦争を、日本が優位な中で終結させる為に打ち出したのが、いわゆる南進政策である。その頃、ヨーロッパではドイツが優位に戦争を進めており、日本はこれに呼応する形で東南アジアの仏領インドシナ、蘭領インドシナ、英領マレーなどを電撃的に占領し、その豊富な資源を獲得する作戦を展開した。

日本のこの南進とドイツへの接近は、アメリカを刺激し、アメリカは日本に対する石油や、鉄鋼等の輸出を制限する措置を執った。この為、日本とアメリカは極度の緊張状態となり、幾度か日米間交渉が続いたが、中国からの撤兵を要求するアメリカと、絶対に譲らないとする日本との間に交渉妥結の可能性は少なかった。

このように日中戦争の行き詰まりから、その打開の道を南方進出に求めて、アメリカと対立したことが、太平洋戦争開戦の原因となった。

当時、日本とアメリカの国力の差はあまりにも大きく、日本政府や大本营に勝利の確算はもちろん無かったが、今まで強力に推進して来た大東亜共栄圏確立や、鬼畜米英打倒と言った国家体制を、急激に転換することは、国内に内乱や革命の起こる恐れがあったことや、短期決戦ならという甘い判断もあったこと等で、戦争回避の決断をさせなかったのである。

昭和十六年十二月八日、海軍はハワイ真珠湾を不意打ちし、陸軍は無通告で、マレー半島へ奇襲上陸を行い戦争に突入した。当初、日本はほぼ計画通りに作戦を展開していったが、この緒戦の成功は相手側の準備不足によって得られたものであった。半年もすると、米軍の物量的反撃が始まり、日本軍は各地で主導権を奪われ逐次後退、太平洋の島々では「玉砕」という名の全滅を続け、二十年四月には沖縄本島に米軍が上陸し、守備軍も住民もなすすべも無く、ただ玉砕するばかりの悲惨な戦いを余儀なくされた。一方本土は、二十年三月の東京大空襲を始め、主要都市の殆どを焼き払われ、敗色歴然たるなかについに、広島・長崎の原子爆弾による決定的打撃を被るに至った。

また、二十年八月八日ソ連はこの戦争を終わらせる為と称して、日本に対して宣戦の布告を行い、北滿の地に軍事行動を開始した。事ここに至り、日本はポツダム宣言を無条件で受諾し、戦争は終結した。

結局、この戦いは、日本帝国主義の中国侵略の延長拡大であり、日米両帝国主義の中国を巡る争覇戦でもあった。

いずれにしても、太平洋戦争は日本にとって国力の限界をはかるに超えた大規模な戦いで、国内のすべての力を根こそぎ戦争に集中させ全国民を挙げて軍隊化し、軍の指揮下において戦った無謀な戦で日本歴史上最大の惨禍をもたらした戦争であった。軍人や一般国民を含む人命の被害だけでも、二百五十万人とも三百二十万人とも言われており、戦争被害としては外に類例を見ない莫大な数である。』

我が庄内からも数多くの人達が必勝を信じて出征しました。そして、多くの人達が再び庄内の土を踏むことはありませんでした。この碑にはこれら五百五十名の方々の名前が永遠に刻み込まれています。私達は今大変幸せですが、この幸せはこれらの方々の尊い犠牲の上に築かれたものであること決して忘れません。

以下右回りに刻字を転記します。

(正面) 昭和三十八年二月建立

大東亜戦争戦没者碑 庄内遺族協助会

(左側面)

(一段目)

(二段目)

(三段目)

東区	陸軍	田中三種	黒木善明	野崎政光	田中力	田中光夫	田中近則	山田俊行	花堂次男	横山一夫	大岩春好	八木章	飛松光夫	前田武男	釘崎兼重
渡司勇	竹下守	田中重利	入木秀夫	阿久井保治	藤崎進	吉田福義	阿久井尚	宝満秀清	満木忍	中島俊夫	竹下栄作	荒川内辰夫	齊藤一正	瀬戸山清二	
千代森幹夫	続山義男	梶原定夫	阿久井恵生	椎屋厚	園田辰雄	赤池国年	延時貞美	福留信雄	肥後速雄	野間日良	塚野秀雄	赤池武俊	竹下一夫	村永雪夫	

(四段目)

宇都親

前田公徳

長峰末夫

西俣三義

中村岩雄

今村信夫

長友俊健

立山一二

塚野三郎

清水辰生

中村八郎

(十段目)
池田哲夫

蒲生親

丸目正生

入来光夫

大神強

池田国利

池田静夫

戸島藤吾

児玉辰夫

阿久井武夫

福崎寿臣

東条四郎

大神静男

入来熊太

海軍

鍋倉俊夫

吉永政雄

(九段目)
橋口武夫

木村森雄

荒川内清二

山下鎮雄

阿久井久美

伊地知次夫

松山実方

大神国重

得能月夫

有馬文夫

野口勇夫

(八段目)

永井栄利

小林孝三郎

有田明

広畑志信

警部

栗山香澄

有島峰正

佐藤司

有田重則

上野武夫

坂元牧之助

栗山正美

清水徳助

益田武彦

長峰七郎

霜出徳一

(七段目)

西俣栄心

新留勝美

海軍

長峰幸彦

内田義雄

西区

大神一朗

七牟礼次男

堂領良治

坂元一也

梶原寅之助

陸軍

東正章

丸山秀雄

荒川儀晃

山下正一

坂元盛善

若松登

上之原利信

富田栄

財部計一

福留節

(六段目)

中村一二

安楽光則

富田純良

田中弥之助

鎌田金丸

菅付鉄雄

鶴村文生

黒木武彦

中村栄二

中満康男

原口広

市吉一郎

堂領綱治

蒲生次夫

下松瀨行雄

長谷場東一

(五段目)

森島秀義

栗山純男

蒲生四夫

椋田敏之

橋口利秋

内田四男

井手上兼盛

鶴村酉男

桐原国男

前田正則

(十一段目)

前田登

田島忠次

大神親秋

平田良美

今村正行

吉村実義

大浦修平	陸軍	町区	(裏面) (一段目)	富田利行	中村次男	池田国貞	今村安男	中村喜藤次	蒲生六二	黒木義孝	井手上巧	伊知地民夫	軍属	釘村兼盛	野海文雄	椋田睦郎	久保秀基	桐原虎二	
	糟野常盛	糟野一夫	牧之瀬一郎	中馬卓爾	俣野侃	有馬好治	時盛継雄	田口好利	浜畑福二	松田勝彦	今城信一	済陽誠二	岡村正身	岡村秀孝	宇野重雄	藤村武雄	今村優	鶴川一義	
梅ヶ谷孝文	陸軍	関之尾区	外山吉二	吉永新盛	立野吉平	軍属	大番一三	山口俊盛	宇野吉実	宇野勝芳	鶴村実	永山義光	海軍	岩満徳雄	猶野清助	前野順一	東隆三	(二段目)	
迫田良雄	海軍	桐原満雄	田川英一	大脇文政	肥後幸一	肥後幸一	森島定	坂元実利	久松春美	谷口幾治	坂元新次	末原実雄	萩原春雄	坂元親雄	肥後茂	(三段目)	迫田重治	坂元栄次	平山道義
前畑兼雄	尻枝重利	尻枝純利	横山和則	大村純義	田中義治	田中義美	田中義美	大村四夫	徳丸種行	花原清孝	検見崎正長	有田実春	(四段目)	花原鉄夫	佐土平熊吉	陸軍	川崎区	坂元次男	中山信男
木ノ下広	木ノ下信郎	花原藤夫	海軍	森吉夫	上柳純孝	海老原安美	福留孝夫	福村一夫	早馬国雄	(五段目)	新地清次	新地政則	佐土平一男	前畑義雄	徳重好美	竹中圓実	橋口盛雄	浜崎十兵衛	徳重繁夫

和 田 義 春	栞 山 登	中 吉 利 行	東 野 勇 夫	滿 永 正	浜 田 実 男	宮 山 光 則	(六段目)	大 久 保 克 之	和 田 武 二	陸 軍	平 田 区	竹 中 広 圓	花 原 輝 光	折 田 俊 雄	石 原 実 盛	德 重 徳 次	軍 属	前 畑 幸 男	前 畑 一 男
安 藤 工	軍 属	福 留 義 行	和 田 健 市	(七段目)	花 吉 秀 頼	東 野 正 位	西 原 実	新 町 景 次	新 町 正 雄	徳 丸 寅 生	中 吉 重 行	森 山 美 利	鶴 島 一 夫	浜 田 辰 男	浜 田 辰 美	中 村 初 市	平 田 安 夫	和 田 末 盛	福 永 武 則
新 町 清 藏	(八段目)	平 田 光 春	花 吉 俊 一	和 田 光 義	平 島 栄	海 軍	徳 丸 正 良	福 永 一 盛	松 崎 徳 美	高 橋 利 春	和 田 清 則	和 田 勇	徳 丸 正 信	和 田 光 盛	花 吉 英 市	立 野 昭 久	西 原 勇	和 田 義 信	徳 丸 健 一
鴨 村 義 夫	釘 村 重 男	釘 村 春 男	蒲 生 三 郎	海 田 家 信	細 山 田 則 義	細 山 田 肇	小 久 保 武 夫	大 峰 重 次	遠 矢 実 則	木 田 光 盛	遠 矢 次 夫	小 久 保 兼 重	小 久 保 利 夫	釘 村 良 治	陸 軍	乙房区	浜 田 武 夫	永 井 勝 己	東 野 重 之
中 島 隆 利	宮 田 初	馬 籠 肇	川 畑 辰 夫	中 島 次 盛	乙丸 助左門	乙丸 国久	宮 田 義 夫	皿 良 広	中 吉 敬 二	定 益 初	定 益 信 夫	鷺 坂 晴 美	吉 川 利 雄	江 藤 義 則	田 中 一	松 崎 重 治	有 田 利 武	(九段目)	釘 崎 良 雄
吉 川 藤 義	丸 目 次 雄	宮 元 義 盛	来 住 春 義	宮 元 勇	宮 元 国 夫	高 橋 静 男	細 山 田 安 雄	高 橋 隆 行	吉 永 金 重	中 吉 光 儀	中 島 茂	中 島 勝 典	宮 田 秀 雄	前 原 義 行	(十段目)	前 原 忠 男	内 政 次	内 利 雄	中 島 久 男

宮田秀行	有田武広	釘村新一	遠矢良夫	増留俊夫	小久保助二	釘村義雄	田中次男	中島典清	月野治良	海軍	加藤秀次	(十一段目)		島田武博	島田時治	島田末治	宮田辰夫	馬籠義雄	秋永政盛	清水誠	
宮島区	花房兼嗣	永倉義昭	釘村治義	丸目正徳	西ヶ野利美	中島登	海軍	(一段目)	(右側面)	丸目利夫	宮元則雄	川口益光	宮田三郎	稲元均	中島広	立野二郎	内次男	乙丸久	乙丸安雄		
平田重雄	福田松雄	宮島益美	宮島実夫	宮島一	宮島経盛	宮島良男	今村光良	内村俊夫	坂元義則	今村正次	内村善雄	(二段目)		内村秀雄	内村義則	福田澄義	山口武綱	宮島俊治	宮島利夫	陸軍	
鎌田善次	前田時吉	平山良清	宮島政彦	黒田了	前田正	志々目義明	陸軍	千草区	黒島高	軍属	宮島正右門	今村明	藤江良治	前田隆次	(三段目)		前田義秋	内村義行	今堀義武	海軍	
原田勇	(五段目)		鎌田静雄	鎌田高	宮内利春	坂元鉄夫	蒲生義雄	蒲生遠保	蒲生義光	志々目憲明	山元清次	赤池光男	藤崎精義	長友当	長友実利	長友泉	長友進	長友三郎	(四段目)		鎌田藤雄
鎌田次男	前田正義	軍属	椎屋進	(六段目)		志々目三郎	志々目正晃	村永至	村永茂	志々目至	海軍	松留利雄	加藤静男	加藤吉人	長峰清二	村永俊男	村永次男	村永義則	村永実男	椎屋正雄	

花村 繁	中村 福次	福田 作雄	富田 健夫	菓子野 正義	菓子野 郁夫	花盛 栄家	(七段目)	堀之内 利行	鶴島 深	岡元 豊	土屋 兼重	重満 利男	岡元 速男	鶴島 道雄	畑中 勇夫	土屋 伝	陸軍	今屋区	長友 一男
西川 利右エ門	菓子野 正雄	永井 秀義	黒木 虎夫	吉原 秋夫	菓子野 利雄	鶴村 祐吉	原口 稔	城村 義則	畑中 利夫	(八段目)	花村 英市	岡元 重次	前田 秀儀	岡元 吉盛	畑中 一夫	畑中 忠夫	久保 美津次	久保 光義	原口 利美
陸軍	前田 侖	久保 岩雄	畑中 始	菓子野 慶信	鶴島 昇	岡元 純夫	花村 平吉	軍属	吉村 栄蔵	花盛 重光	田中 勉	岡元 正人	(九段目)	花村 栄	新地 正義	海軍	久保 岩男	花村 正二	高野 勝則

見ますとこれにはたくさんの方が刻み込まれています。建立	形石灯籠一对と丸型石灯籠一对の計四基が建っています。よく	ましたので現在は二基だけ残っています。この記念碑の前に角	ていました。このうちの二基は今年の七月南州神社に移築され	城山広場の東一隅について先頃まで四基の記念碑が並んで建っ	城山広場の東端に建っています。	平田 静雄	川久保 速雄	川久保 栄	福永 正二	児玉 登	山元 一義	国友 忠夫	東 一男	栗山 哲美	日田 正雄	辨 政人	荒川内 正義
						山野 武彦	吉永 次実	迫田 俊則	吉盛 国良	海軍	(十一段目)	田之上 禎二	浜畑 彰	平山 重夫	内村 秀雄	吉永 兼光	釘村 善二
							福吉 実夫	黒松 重雄	赤木 一	大坪 喜八	若松 兼則	前田 高吉	城村 安生	長倉 平治	有馬 静男	有馬 愛次	軍属

の年が書いてありませんので確かなことは分かりませんが刻まれた人名から推して明治中期以前のものであることは確かです。四基とも傷みがひどく刻面も風化が進んで判読不能の部分もあります。以下一基ずつ右回りに読んでいきます。

なおこれは本項四十一の明治丁丑之役従軍者記念碑又は四十二の忠魂碑建立の時に奉納されたものではないかと思われず。
一、角形石灯籠（右）



右端の石灯籠

(正面) 献燈

山上 嘉左エ門

(三段目)

(左面)

(二段目)

坂元 直九郎

(一段目)

大武 彦左エ門

栗山 伊左衛門

木藤 新之助

入 □ 鉄之進

桐原 善九郎

早田 才九郎

黒川 喜八郎

栢山 覚助

早田 藤作

大神 祐太郎

大神 新助

肥後 喜之助

長峯 □ 一

戸島 □ □

阪元 八百助

戸島 □ □

(四段目)

□ 藤 直九郎

山下 □ 四郎

蒲生 次兵衛

大神 新 □ 郎

入来 休助

有田 貞助

(三段目)

□ □ 正助

長谷場 四郎右エ門

佐藤 孫兵衛

末原 熊 四

阪元 直藏

□ 永 直太郎

(二段目)

中満 熊四郎

□ □ □ □

有田 武右エ門

鎌田 直左エ門

□ □ □ □

湯之前 純 秀

(背面)

(一段目)

白 杵 甚四郎

羽田 傳五左エ門

桐原 乙助

(四段目)

□ □ 善四郎

立山 善助

長 友 善藏

志々目 米藏

有田 休右エ門

平 □ □ 左エ門

(三段目)

野崎 □ 彦

□ □ □ 藏

桂木 寿一郎

財部 熊四郎

□ □ □ 工門

□ □ 長雄

河野 善太郎

鎌田 □ 右エ門

□ □ □ □

(二段目)

鍋倉 新太郎

□ □ 祐九郎

□ □ 藤助

(右面)

東 熊太郎

大神 □ 助

(一段目)

阪元 新吾

大田原 □ □ 工門

荒川内 □ □ 郎

(四段目)

満木 □ □

迫田 □ 助

津曲 兼

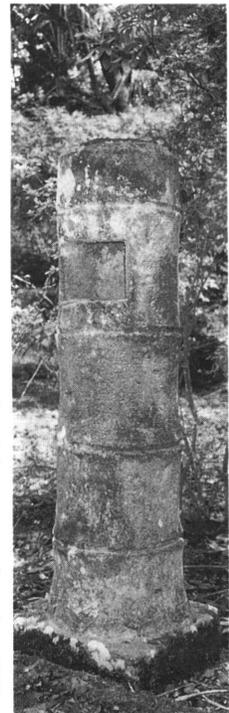
三、丸型 石灯笼(右)



丸型 石灯笼(右)

谷口九助	久保田親友	黒木□□
□目次助	永友辨藏	戸高休四郎
久保良助	安田文藏	池田祐九郎
宮里源助	□□宗雄	牧彦太郎
川野甚太郎	□松兼長	園木藤兵工
松下金藏	安田□之助	黒木□助
松元藤八郎	鎌田甚九郎	□田三之進
村永良助	丸目孫右工門	□村四郎
大川原乙助	吉原傳之助	□□□□
東善之助	山元米助	愛甲伸□
山城四郎右工門	吉原正長	花房兼平
坂元新右工門	鎌田進助	松元紋□郎
村永□之進		

四、丸型 石灯笼(左)



丸型 石灯笼(左)

田□良之助	宇野才次郎	椎屋伝兵工
恒松兼武	野口仙助	松田龍之助
本野利右工門	佐藤源兵工	森友太郎
竹之下門四郎	丸目正行	□谷
猪□與右工門	田中重勝	中□□之助
皿良善右工門	細山田乙藏	大□□助
丸目□親	皿良□源	大□□助
長峯□助	細山田□□	八木□□郎
桐原助四郎	□□厚	大□□左工門
吉川甚左工門	黒木□藏	鳥越金藏
田之上投兵工	有馬純喜	鳥越吉兵衛
高橋吉五郎	遠矢政四郎	鳥越正助
奥直清	上水流	黒木助右工門
永□正助		
猪俣直作		
大浦利吉		

石碑、石仏その他(その四)

町区 山元 昭平

一、宮崎元標拾八里

荒襲より国道二二三号に入り、御池街道へと車を走らせると流れゆく景観が目を楽ませてくれる。路傍の緑が季節を表現している様だ。戸之口に差しかかり路側の雑草のはえぎわに「ポットン」と立っている石柱が目に入り「ハッ」として車を停める。何の石柱かと、? 考え乍ら歩み寄る。やや黒づんだ一米大の苔の覆った石柱であった。余程気を付けないと見過ごしてしまう所だった。荒れ果てた何の変りばえもしない処に唯一っ何気なく立っている石柱。これが「宮崎元標拾八里」である。すぐ「庄内村道路元標」が頭をよぎった。

石柱の表面には「宮崎元標拾八里」右下に北諸県郡西獄村左側に字長迫と刻んであり左側面は○字壹里十七町三十間裏面明治三十八年七月改築右側面高原江四里九町廿四間四尺とある。相当以前より建てられていて、古くなり欠損して新しく建てられたのであろう。十八里と言えば約七十二軒米であるから逆算

して行けば自から原点が判明するのではと考えられる。住時これを基点として人々は旅を住き来したものだろう。車の無い時代であればこれを「目やす」として、たつきの為に貴重な存在であったかも知れない。

連想は連想を産む。慶長八年時の徳川家康が全国平定の策として、戦略政策の考えのもとに軍事経済治安のあらゆるものの根幹として道標に着目したものだ。これを献策したのがかつての金山奉公であった大久保長安である。長安はもと猿楽師で全国を遍歴してその道に通曉していたらしく、山相地歴に秀でていて、全国平定の道は先づ里程を定め道路を広く開き荷馬荷駄の便をよくし、より速やかにして土地の利をしめるにしかずと進言した。

故に日本橋を基点として道路元標が規定され一里(三六町)毎に一里塚が定められたのである。すなわち五街道、東海道、中仙道、日光街道、奥州街道、甲州街道がこれである。

当地区では今町の一里塚が現在残されている貴重な遺跡である。又話をもとに戻して連想を此の地に置き更に深く入って考えてみたい。島津藩であった安永、西岳は領地内であり、しきりに役人の往来があり時には藩主も此の道を利用されたのではと、安永の野牧の駒追いの行事。西岳村、馬渡りの野牧の駒追

の折等にも、朝靄の中を御先拂、鼻馬、杓箱、御徒士、台傘、床几、組頭、徒目付、御側衆、御弁当、槍鉄砲組そして御駕籠等々……と華麗な供揃がこの道をしづしづと通ったやも……と想を走らせるとき一連の錦絵が浮かんでくるのである。そして又下って明治一〇年の西南の役の折には燃えたぎる桜島の噴煙と共に一介の西郷翁の為に遠く鹿児島島の地よりトキの声をはずませて「チェツソー」の掛け声も勇ましく熊本へと攻めのぼりそして延岡へと走り又この地へと往還しげく多くの兵児共が青春をかけて戦ったであろうと、そして桐野利秋？ 辺見十郎太もこの地で戦い逸話を残し、つわものどもの夢の跡をしのぶにやぶさかではない。

こう思念するとき唯ポツネンと立っていて、今は見る人ぞなき路傍の石柱も長い歴史の流れに沿って時を刻み、生き抜いて来た大木と同じ様に変転極まりない激動を身近にみつめ、静かに佇み乍ら又時の流れを刻みつけて行くであろうこれが「宮崎元標拾八里」である。



二、孝子の表 汾陽けさよ事

古来から我が国に於いては、君に忠に親に孝に兄弟睦まじく夫婦相和し朋友相信じ……と言う縦の家族関係を重視して来た。我々も又そう言う教育を受けて来た。

時には戦国時代の下克上の頃は親も子も亡ぼし自己栄達の時代もあったが、徳川の世になり秩序が保たれ世情が統一されて来て人心把握の策が施されて天下統一の基盤として地方統治に領主（大名）を置き厳しい掟を設け国家統一をなさしめて来た。九州薩摩藩に於いても島津領主のもとに土農工商それぞれの分野に分かたれて、たつきがなされて来た。そして領民は（武家を除く）領主に年貢を上納して生活の保証を得ていたのである。領主はそれらに依って自領内を防衛し乍ら耕を興こし武を養い人文を広めて領内統一を計った。

特に家族制度に於いては一家の長を戸主としてその家族に於いては權威を持たせ、家族は戸主の意に従って生活が成されて来た。故に主と個、個と主を大事にする事により主君は常に個々の生活に意を致し、地方吏を通じて生活保護に意を尽し興揚策として孝養の美德を奨励して振興をはかった。

ここにかかげた「孝子の表」はその時代に生活を営んで来た人々の苦勞と、領主と家族と庶民との関係特に縦のつながりを

大事にし、君に忠に親に孝に…の美德を重要視し奨励して来たものではないだろうか。ここに記載したこの孝子の表は謂わば孝子の行いが上聞に達し領主が褒賞したものであるが、極めて貴重な文献であり、はしなくも先年汾陽家に秘蔵されている孝子の表彰状を評読する機会をもつ事が出来たものである。これは時の都城領主島津久静（二五代）から下されたものであり以下原文のまま記載する。

孝子表彰状 （庄内町 町区 汾陽松一郎蔵）

(1) 青銅千疋 唐人町

汾陽儀八

妻

右者姑三拾年以前ヨリ病氣相煩 起臥等モ調兼候容躰有之候
旭朝夕ノ介抱飲食等至旁心ヲ用ヒ叮嚀相事家中、勿論 親類
隣家も程能致会积候段 被聞召上 寄特ノ心入付 為御褒美右
通可被成下召 曾木甚五兵衛御取次ヲ以被仰出候条 於小番所
町奉行ヨリ申渡筋ニ相付御礼可申出候 此段町奉行高奉行横目
役其外可承伺ニ可被申渡候

北郷彦右衛門

戊□ 八月十八日取次 土持助十郎

(2) 都城第一大通四小区 日向国諸県郡

都城中町百十三番 屋敷借宅 平民商

汾陽儀八 妻

悼辞四拾七歳

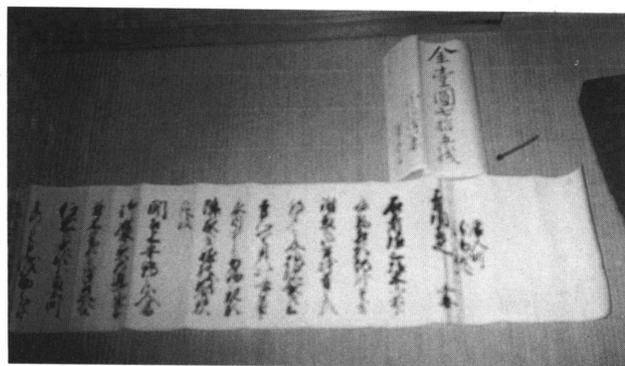
けさよ

姑事当年八拾四歳相成 積年癩氣の煩ニ而三拾餘歳ノ時ヨリ
干今 手足不遂歩行も難出来候処 けさよ事始終姑ノ側に付添
深切相事へ曾而旧領主ヨリ褒美金相遺候事モ有之其後猶更無懈
怠毎朝姑目覚候得者 手水結髪等イタシ呉衣服等も常々不垢様
手津カラ洗濯着替為致毎晩未寝中、不寂様混而付添 物語等イ
タシ用有リテ外ニ出候節ハ悴又婦等へ不怠致看護居候様托置。
大小ノ節ハ其意ニ不逆様自身愉敷始末イタシ 朝夕ノ飲食等ヲ
過半者 自分ノ働ヲ以種々其好ミノ品相述メ手ヲ添為給、氣慰
ノ為背ニ負ヒ近隣之列越茶ヲ勸メ加エ平日夫ニ能ク事へ婦エハ
丁寧致教諭候処ヨリ家内モ別而睦敷且ツ親族近隣ノ交モ行届町
中举而其善行へ致感服候段相聞之奇特ノ至ニ付為其賞目録之通
下賜候事

壬申十一月廿五日 都城県

(後注) (1)の表彰状は文久二年 都城領主島津久静二十五代よ
り下賜さる。

(3) 本文最後尾「目録の通下賜候事」とある目録とは金一円七
拾五銭のことである。この頃は(明治五年)は米一升の値段が
三銭八厘八毛であるから当時としては大金であった。



金石城跡発掘調査

都城市教育委員会 埋蔵文化財調査員

(東区出身) 横山哲英

連日猛暑が続いていた、平成三年八月。都城市庄内町にある金石城跡の発掘調査が始まりました。

金石城は、庄内町の中心部に位置している市指定史跡「安永城址」を構成している四つの曲輪へ「内城(本丸)」・「二之丸(今城・新城?)」・「金石城」・「取添」のの一つです。宮崎や鹿児島にある中世の城は、こうした大きな曲輪を幾つも集めて一つの城を形成している場合が多く、群郭式あるいは連郭式城郭とよばれています。南九州地方にのみこの様な城が多いのは、当地方が簡単に分割できるシラス台地に城を作る場合が多いのと、少ない兵力を分散させて有効に機能させるには、こうした大がかりな城を作る必要があったためであると考えられています。ちなみに、都城島津氏(北郷氏)の本城「都之城」も同じ連郭式城郭で、大小十一の曲輪からできています。

今回調査を行った金石城をはじめとして、安永城は市内に残っ



発掘作業

ている中世の城の中では最も保存状態の良い城であり、北郷氏が都城盆地に根付き始めた頃の様子を明らかにしていく上でも、大変貴重な城跡です。ですから、今回金石城が失われたのは大変残念なことであり、今後は残った三つの曲輪をどのように保存・活用していくか、庄内の昔を語る方々をはじめ地元が一体となって考えていく必要があると思われまます。

さて、金石城跡の発掘調査は、盛夏から霧島おろしの吹き荒ぶ十二月まで行われ、数々の遺構・遺物が発見されました。細かく見ていくと四つの時期に分けられるのですが、今から約四〇〇年前頃が、金石城の最も盛んに使用されていた時期であるようです。ちょうど織田信長が全国統一を行おうとしていた頃で、南九州でも島津氏や伊東氏等の戦がひんばんに行われていた時期です。北郷氏にとって本城に次ぐ重要な城であった安永城でも、こうした戦に備えて、建物の増改築や通路の改修、武器や馬具の修繕などが日頃からよく行われていたに違いありません。

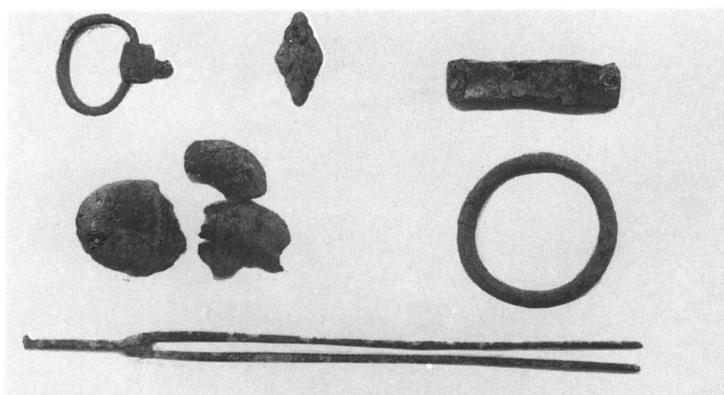
今回は金石城跡の $\frac{1}{3}$ の面積を調査し、掘立柱の建物跡二十八棟、通路跡三条、かまど跡五基、鍛冶工房跡一カ所など、城の機能を明らかにする防衛施設群と、当時の人々の暮らしを想像させる日常生活用の施設群を一緒に発見することができました。



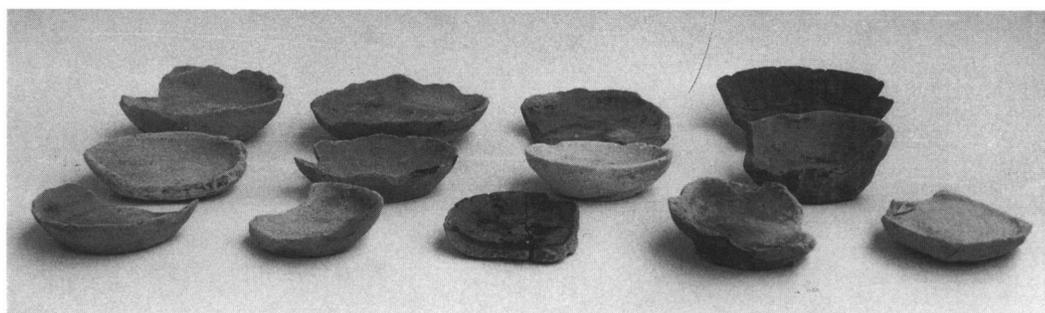
安永城全景 手前金石城の発掘現場

特にかまど跡は都城盆地で初めての発見であり、これまではあまり知られていなかった山城内部での食生活の様子を再現してくれました。また、こうした遺構と一緒に約一〇〇〇点の遺物が出土していますが、一番古いものは、今から約二五〇〇年程前の縄文時代の土器や石器です。これは、金石城のある丘が縄文時代の人々にとっても生活のしやすい場所であったことを示しています。この他にも、金石城で生活していた人々が使っていた、中国製や唐津・備前焼きなどの食器類、武器・馬具・銭・籠城戦用に貯えておいた米など、多種多様なものが出土しており、想像以上に豊かな当時の生活を明らかにすることができました。持ち帰った資料は現在整理・分析中ですので、またの機会にでも詳しく報告していきたいと思えます。

最後になりましたが、調査期間中を通してご協力くださった「庄内の昔を語る会」や地元関係者の方々、炎天下での重労働に従事して下さった作業員の皆さん、そして何より、多大なる出費にもかかわらずご理解・ご協力をいただいた池田家に対し、この場を借りて心から感謝申し上げます。



◀ 銅製品
(カンザシ、銅鈴、馬具、鎧飾り)



土 師 器

講演のあらまし

平成三年五月十八日

人形浄瑠璃の公演

山之口麓文弥節人形浄瑠璃保存会

山之口町の麓に伝わる文弥節ぶんやぶし人形浄瑠璃は、三百年の歴史をもつ、古いかたちを残した人形浄瑠璃で、全国五ヶ所にしか残されていない珍しい無形文化財である。この貴重な人形浄瑠璃の公演を、町内各種団体の協賛を得て行った。

だしものは、人形浄瑠璃「出世景清」近松門左エ門作。と狂言、「たかさご馬場のごぜむけ」。三味線の伴奏と、浄瑠璃の節まわしの語りに合わせて、あやつり人形で表現する物語である。

悲運の武将平景清の妻阿古屋が、夫の疑いを晴らしきれず、思い余って二人の我が子を殺し、自分でも死ぬ場面では思わず涙し、ごぜむけの滑稽な仕種には大笑いして、伴奏と語りと人形と、三者一体となつての保存会の方の熱演に、惜しみない拍

手が送られた。伝統芸能を継承する重要性を認識し、意欲をもつて取組んでいる若い保存会の方々に深い感銘を覚えた。



平成三年九月二十八日

講演「祖先のくらし」

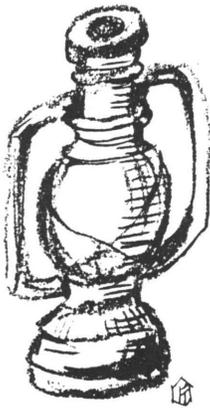
郷土史家 瀬戸山 計佐儀

民俗学の歴史を繙くと、民俗学育ての親として知られている柳田国男が、昭和十年に「日本民俗学会」（はじめは、民間伝承の会）を組織して研究も本格化している。更に歌人として知られる折口信夫の古代研究（民俗学編）など、民俗学研究の発展に重要な役割を果たしている。このように民俗学の発生は、まだ歴史が浅い。

領主など統治者側の話が主となる郷土史とともに、民衆を主人公とする所謂、民俗学の立場からも、あらゆる面から祖先の生活を知り、伝承することは大事なことであり、緊急を要することと思う。次に民俗調査の対象として具体的にあげる。

- 一、衣食住に関するもの。住居、家具調度、飲食用具など。
- 二、生産、生業に関するもの。農漁猟具、林業陶工用具など。
- 三、通信、交通、運輸に関するもの。車駕、通信用具など。
- 四、交換、交易に関するもの。市、行商、質など。

- 五、社会制度に関するもの。村落生活、親方子方など
- 六、言語、表言に関するもの。方言、伝説、謎、ことわざ等
- 七、信仰に関するもの。神、仏、民間信仰など
- 八、民間知識、技術、教育に関するもの。寺子屋、呪など
- 九、民間芸術、娯楽に関するもの。演劇、民謡、玩具など
- 十、人の一生に関するもの。誕生、成年式、墓制など。
- 十一、年中行事に関するもの。おねっこ、六月燈、ほぜなど。
- 十二、その他



対象	事業内容	期間	場所	参加人員
婦人	会長会 講演会 役員会 婦人野外研修 婦人・スポーツいろいろ 成人栄養学級	六月～三月 八月 六月～三月 二月 三月 四月～三月	地区公民館 " " 宮崎市 地区体育館 地区公民館	二〇〇 二二〇 一一二 二五〇 二二〇 三〇〇
壮年	役員会 ソフトボール大会 西岳壮年連協との交換 研修 壮年大学	四月～三月 七月 十一月 六月・一月	地区公民館 市公民館 松葉荘 庄内	六五 一六〇 一三〇 二二〇
高齢者	クラブ会長会 高齢者体育祭り ゲートボール大会 社会奉仕活動 会長研修 婦人部長視察研修	四月～十二月 十月 四月～三月 七月 二月 九月	地区公民館 市民広場 " " 史跡稚児桜清掃 市公民館 市公民館	二〇五 三〇〇 一五 一四 一六
民協	企画会 定例会	四月～三月 " "	地区公民館 " "	四八 一八〇
ボラン ティア	代表者会 民協・ボランティア合 同研修会	五月～十二月 七月	地区公民館 " "	三〇 四〇

以上、事業実績を紹介しましたが、今後の問題点について感
ずるままに述べてみます。

公民館で主催教室を開催していますが、特定の人のみが教室
に通い、はしごで習う人が多く、一部の人のみに限られる傾向
があります。

公民館は、地区全体の共有物であるという意識づけを行って
いく必要があります。

昼と夜の開講では、昼の方が開講率は良いのですが、若者の
受講者が少ないという欠点もあります。文学的なものより、大
衆芸能の色彩の強い教室の方が人気が高いようです。

これも、今の時代を反映しているのではないでしょう。

広報活動として、地区の行事を載せているにもかかわらず地
域に関心を持っている人が少ない。個人の利益にかなうもの
については関心が高く、ボランティア的な奉仕については関心が
薄く、大きな悩みの一つであります。

今後、生涯学習時代が到来すれば、地区民のニーズは高度化
し、多様化するものと思われれます。さらに、公民館機能の一層
の充実、学習環境の整備を進めていく必要があります。

地域に対する関心を持たせるために、奉仕の精神を育てるこ
と、それには、家庭教育、学校教育、社会教育の連携の強化が
必要であり、その媒介として地区公民館の役割がますます重要
になってくるものと思われれます。

全国高等学校総合体育大会

自転車ロードレース

庄内地区公民館社教主事 浦田 兼義

平成四年八月九日は、高校総体自転車ロードレースの開催日である。ところが、案内状も出していないのに参加したい旨の申し出があった。丁寧にお断わりしたのだが、相手も相当に意を強くしているらしく、なかなか聞いてもらえない。すったもんだのあげく、前日の来訪となった。九日の大会の準備が何もできない。幸い午前中にお引きとりいただいたので、午後からが準備となった。台風一過、大変な散らかり様である。まだ、雨風共に治まりそうにはないが、そんなことは言うっておられない。閉会式会場に行くと、木枝や葉っぱがものすごく散らかっており、又、道路も大変な様子である。大会が開催できるかどうか不安になった。しかし、この総体にかける庄内地区の人の意気込みは違っていた。会場の設営、道路の清掃、プランターの運搬、歓迎ののぼりなど、小学生から高齢者まで一丸となっ

て九日に向けての準備である。準備が終って、閉会式場と道路を見たが、それは台風前と変わらないぐらいすばらしいものであった。もし、庄内地区でなかったら、これほどの協力が得られたらどうか。庄内地区だったからこそできたのだろう。

八月九日。すばらしい朝を迎えることができた。午前六時にロードレースのスタートである。何人位の応援があるのかわからなかった。道路に出て見た。たくさんの人である。スタート地点付近は特に多い。少し離れたところから応援することにした。朝日の中に庄内の人の顔が見える。輝いて見える。庄内は本当にすばらしい。そしていよいよスタートである。



庄内地区の方々の期待を背負って

『一番。宮崎県代表 都城工業
高校』 『十、九、八、七、六、
五、四、三、二、一 パアーン』
『ガンバレー ガンバレー ガ
ンバレー ……』 『パチパチ
パチパチ パチパチ ……』

庄内地区の皆さん、本当に御
苦労様でした。

遊・YOU・庄内川

庄内地区元気づくり委員会 蒲生 宏孝

去る七月二十六日、庄内川つり大会を開催しました。

白バエ、十五万匹、ふな五百kg、鯉千五百kg、を庄内川に放流して七月二十六日のつり大会に備えました。

当日つり大会参加者、八百から千人位で都城地方でこれだけ集まったつり大会は他になかったそうです。気になる成果はどうだったのかお知らせします。つり大会参加者の九十九％は鯉ねらいでした。つまり庄内川で八百人以上の人々が、鯉をねらって炎天下の中奮闘された事になります。結果、八百人、鯉をねらってつれた鯉はたったの七匹です。なんともいいようがない悲惨な結果となってしまいました。鯉を早く放し過ぎたのが一番の原因だったようです。そして、一番がっかりしたのがつり大会を誰よりも楽しみに、鯉の放流を手伝ってくれた子供達でありました。「なぜつれないの、私達があれだけいっぱい鯉を放したがね」いきどおりもひとしおだったようです。放したその日から大量に鯉を釣った数少ない大人達がいた事など、子供

達に説明もできず私達は途方にくれました。この数少ない大人達は子供達に何と釈明されるでしょうか。そういう人達がいる事を知らなかったのが一番悪いのですが、それにしても、この人達にはモラルのひとつかけらもないのでしょうか。庄内川で二度とつり大会など開く気がなくなったのも事実です。庄内川で魚がつかれるようになればどうなるか、皆でもう一度考えてみようと思います。庄内川で魚がつかれる。と世間でうわさになると、市内、県内、九州。全国から釣人が押し寄せます。人が集まれば先ず、行政が放っておきません。河川がきれいに改修されます。結果として庄内全体が活気をおびてきます。こうなると庄内川に皆の目が注がれ、庄内川はますますきれいな川となります。つぎは、きれいな川の両サイドの水田が見直されてきます。つまり庄内の農業が脚光をあびてきます。農産物もクリーンさで売れることになります。庄内の活性化は庄内川から始める。この事は、庄内の人だけではなく誰もが認め、賛成して下さっています。そこで話だけでは事は動かないので小さな事だけれど、魚がつかれる川にしようという、こころみを今回つり大会という形で実行しました。何か事を起こさないと庄内川は私達に何も与えてくれません。以上、悲観的なことだけを書きつづりましたが、庄内川に目を向け、小さな事ですがつり大会をやっ

てみて、口では言い表わせない勉強をさせてもらいました。また、多くの方々の知恵を頂き、賛同を得る事に成功しました。

その一、庄内川白バエつりマップが完成します。鯉だけが釣りではなく、白バエこそ庄内川の本命です。現在、ポイントによって白バエがおもしろいようにつれます。もっとうれしい事に、おびただしい数の白バエの稚魚が増えています。このまま、あと二年間、放流と投げあみ禁止を続ければ、予定通り白バエの里として庄内川はよみがえるはずですが、ただ、残念な事に夜密かに投げあみをうつ何ともバカな人が居るのも事実です。

その二、私達は関之尾滝を含めて、庄内川と位置づけ庄内川への行政のテコ入れをお願いしております。上流に関之尾滝、滝より下流の庄内川全体が遊べる川として生まれ変わるよう、行政として打つ手をお願いしているのです。庄内の人達皆で取り組めば必ず実現できる可能性大です。そして庄内の活性化のキーワードを庄内川はにぎっている気がしてなりません。

その三、庄内川を守って、育てて、庄内を活性化へ導こうとする事に賛同を頂き、実際応援を申しでて下さる方々が数多くおられます。この事が私達に大いなる勇気を与えてくれました。何よりも今、私達、庄内人が力を合わせて行動を起こさなければ、しょうがない町から脱する日は永久に来ないと思われるの

です。庄内川から魚のつれる川、きれいな川、として全国に情報発信ができる日は近いと、今誰よりも感じています。どうぞ皆様も今一度、庄内川に注目しておもしろくなるよう考えてみようではありませんか。

庄内に住んで、しょうがない町などと庄内の悪口を言ったら、他所の人が庄内をいいところだと思うはずありません。また誰かが何かしてくれるのを待っていても、誰も何もしてくれません。自分達で動く事が活性化の前提だと思います。それぞれに好きな人が好きなように、好きな事で動けばよいのではないのでしょうか。「俺がおる」では動いた事になりません。感じて動く事が感動につながると思います。少し偉そうに書きましたが、私もつい最近までしょうがない町だと思っていました。人の悪口を言う事がたやすく、たのしいと同じように庄内の悪口を言うのはたやすい事でした。しかしある時、他所の人達の目には庄内はすばらしいところに見える事に気づきました。関之尾滝もいいのですが、庄内川に霧島が映えて、稲穂がゆれ、それを前景に人々の住む町が実にバランスよく並び、ヨーロッパの村々の一つを見ているようだと言われます。もし川に並木や森があったらすばらしい景観になるでしょうね。とベタほめです。こんなところだから住んでる人もきっとすばらしい人ば

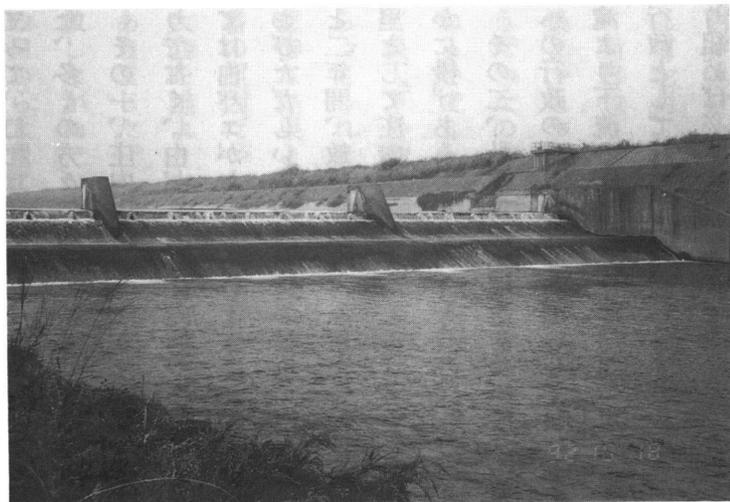
大いなる庄内川

庄内町元気づくり委員会副会長 大川原 紀美生

かりでしょうね。にはちょっと考えましたが、その通りですと答えました。何も開発がなく、手つかずで残されている庄内は、そのまま日本の田園地帯の見本となる予感がして、それから私は庄内の悪口を言うのをやめました。どうぞ皆様も庄内川から庄内の町を見、牧之原から庄内川をながめて考えみて下さい。きっとすばらしい庄内の将来像が目に見えれば、

目に浮かんだら私達に教えて下さい。どんな提案でもよろしいのです。庄内がおもしろくなる提案を頭の悪い私達は考えあぐんでいません。つまり知恵がないのです。皆で考えればもっともつとすばらしい庄内の将来像が見えてくるのではないのでしょうか。

このたびカヌークラブのスタートにあたり、庄内川のあらましを少し述べさせていただきます。庄内川は霧島屋久国立公園の天孫降臨の地、霊峰高千穂の麓にある武床これより湧き出る自然水が源流である。この水が幾山河を越えて霧と歴史のロマンを旅して東洋一の欧穴をつくり、轟音凄まじき関之尾の滝となり、庄内町を貫流する。遠い私たちの先人達が知恵と汗の限りをつくし北前用水、南前用水、前田用水を開発し大荘園を作り上げ、総面積は九五八ヘクタールの緑と食の産地として富み太らせてきた。しかしながら、今日の世界経済と合わせ日本経済の変革とともに、私たちの庄内も次第に人口減少と急速な高齢化、産物の減少、銘柄確立の遅れ等々の変化が表われてきた。先人の残してくれた大荘園に報いるために又、庄内地区住民一人一人が憂い歓喜の声を上げる荘園作りを行うにあたり、今一度、大いなる母の庄内川に着眼し、自然の力で造り上げた景観と共に進み行く、郷土作りの一貫になり得るカ



ヌークラブが発足した。会の発展を大いに期待するものである。



庄内川に魅せられて

都城カヌークラブ 小野基宏

庄内川の滝の下がカヌーの練習場として使えるのを発見したのは、当時、市立庄内病院に勤務されていた内科の若い医師、加藤先生でした。

都城市内には水がきれいで、カヌーの練習にも使えるような川は無かったので、先生の「あそこは使えるかも知れない」という言葉に誘われ、二月の寒風吹きすさぶ日に滝の下のトロ場から何艇かのカヌーを浮かべて下りました。冬の渇水した時期でしたが、いくつかの瀬があり適度に大きな岩があって楽しいコースでした。しかし、最後は岩が両岸から迫って狭い水路になっており、しかもS字に曲がっています。私は満を期して突っ込みました。しかし、後ろから押してくる水の圧力で岩に張り付けられてしまい、そのままあえなく冷たい水の中に引きづり込まれてしまいました。その冷たいこと、寒いこと。着替えてからも震えが止まりません。それから、その場所を誰云うともなく「小野ヶ淵」と呼ぶようになりました。そして、私たちカ

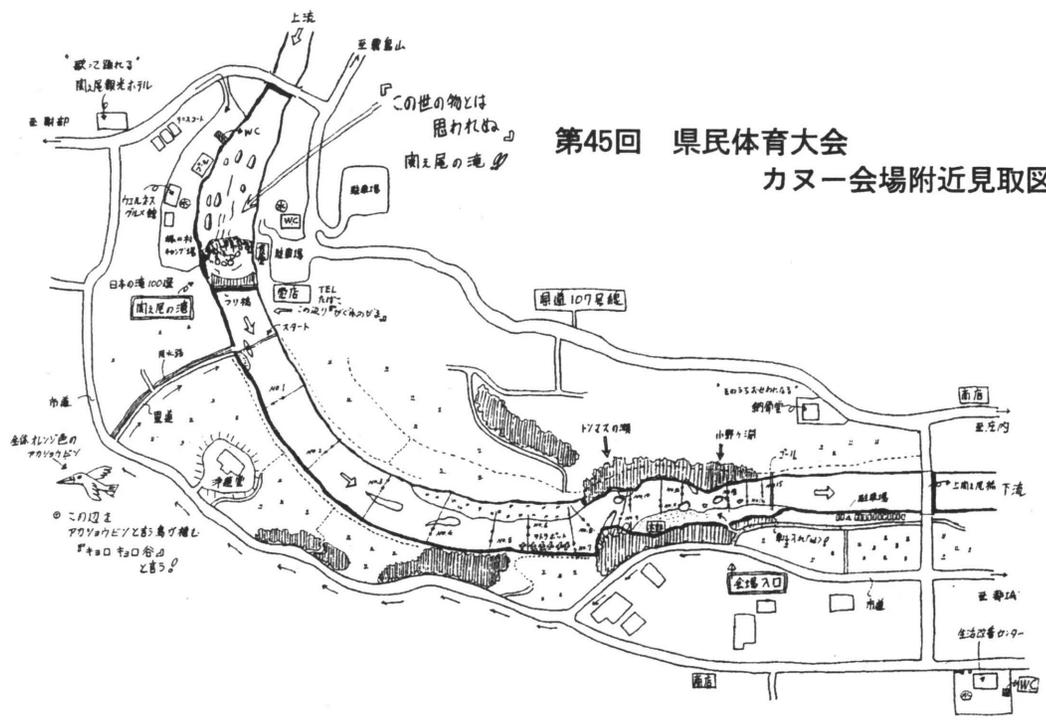
ヌークラブは平成三年度、四年度の県民体育大会カヌースラローム競技を都城関之尾、庄内川で開催いたしました。

カヌー競技はマイナースポーツであるが故に県民の関心も低く、競技人口も県内合わせても百名に満たないのが現状です。しかし、カヌーは競技だけが目的ではなくレジャーとしての楽しみも大きく、川に限らず湖でも海でもプールでも楽しむことができます。そのためにスポーツとしてのカヌーは年齢を問うことなく幅広く楽しむことができます。

私たちカヌークラブは県民体育大会を開催するにあたり、そのようなカヌーのPRや、カヌークラブが抱える問題でもある河川汚濁の問題等を庄内地区の住民の皆さんに知ってもらい、一緒に楽しんでいただくためにひろくオブザーバーとしての参加を求めました。大会当日は暑い日でしたが、多数のオブザーバーの方々が参加していただき、理解もしていただいたと自負しています。

私たちは、これからも、Give and Take の精神で庄内川を使わせていただくつもりでいます。

第45回 県民体育大会 カヌー会場附近見取図



二十一世紀への

学校づくりを目指して

庄内小学校長 中原 照 美

二十一世紀を目前にして、学校教育も大きく変貌を遂げようとしています。心豊かにたくましく生きる人間の育成が最大の課題なのです。そのために、庄内小学校では本年度から県・市教育委員会の研究学校の指定を受け、教科「体育」を通して一人ひとりの子供達に自ら考え、判断し行動できる能力や態度を育成していこうとしています。

研究主題は「運動の楽しさや喜びを味あわせ、一人ひとりを伸ばす体育科学習指導法の研究」とし、心身の健康や安全に関する習慣を身に付け、実行力を持ち、体力、気力が充実して、明朗で活力のあふれた子供づくりを目指しています。

一般に、庄内小学校の子供達は、明るさや人なつこさ、知識量はあるものの、うまく長所を活かして自分から進んで行動することや物事に対し最後までやりぬく根気力に不足しているようです。また、やや自分の欲望を押さえきれない面もあり、様々

な困難に対しての耐性もなくなりつつあります。

これでは、これからの激動する社会にはついていけないことになります。だから、どんな社会の変化にも対応できる人間の育成が要請されているわけです。新学習指導要領による教育課程の編成、実施、学校週五日制等、一連の教育改革が実施されるのもこのためなのです。

そこで、先ず学校、教師が変わらなければと考えています。従来の教師主導型の知識注入の指導では、未来に生きる子供の育成はできません。ですから、学校、教師が本校の伝統を大切にしながらも、新しい学校づくりをしていくのだという自覚と認識に立って、これからの研究を進めていこうとしています。

終わりに、今年度、本校児童の都北学校創意工夫工作展の成績を紹介します。

第28回学校創意工夫工作展 優秀学校賞

入選	特選	賞	作品名	学年	氏名	作品名	学年	氏名
二人のりポート ポンプ収納	半日日時計 高齢者用サワー タイム	2	未来の庄内	2	山元 貴絵	糸立て ラーメンカップの 動くおもちゃ	2	和合真理子
上之原梓紗	中村 俊一	6	坂元 大介	6	坂元 大介	ワンタッチペーパー ホルダー・ストッカー	1	和合 俊介
重久 隆	U・F・O	2		2	坂元 裕一		5	降旗 政洋

旅の思い出（奈良・京都）

町区 南 崎 喜 美

秘佛います開山院の庭にして

松吹き渡る風の音聞く

淡^{あわ}あわと畝傍香久山かすみゐる

大和路の春巡り行くかも

いにしへの朱雀大路の細^{ほそ}ぼそと

続くをたどる平城宮跡

法華寺のゆらぐ光の輪の中に

くちびる紅き光明子像

法輪寺いかなる人の願ひにて

このみ仏は刻^{きざ}まれにしか

かにかくに命保ちて本願寺

み仏の前に今ぞぬかづく

大原の里訪ねむと京の宿

出づれば比叡^{ひえい}は今日も雪なり

青春の回想（その一）

（終戦、捕虜、引揚げを詠む）

東区 黒 木 聖

終戦の玉音放送聞く中に

手榴弾の音して友の死にゆく

それならば生命が欲しくないのかと

軍医に言われだまりし心

己^{おのれ}らを閉じこむるべき鉄条網

凍土^{とうど}を穿^{うが}つツルハシの重し

指揮とりて積む餓^が屍^し体の凍^こて果^いてて

基地すべり落^ひつ氷^{ひょう}魂^{たま}の如

餓^が屍^し体の朽^くちし眼^{がん}窩^かが父^{ちち}母^{はは}を

頻^{しき}りに呼^よべり冬^{ふゆ}迫^{せま}る丘

庄内俳句会

— 当季雑詠 —

若桜今年又咲く特攻碑

夏雲や阿云の仁王とだんご汁

散歩径日毎刈田の広がれり

いつまでもこのままでいてよ柿若葉

戸に触れて南天の実の艶ざかり

ゆうらりと揚羽舞行く諏訪神社

甘すぎる種なしぶどうあわれなる

喪にこもる食べごろなりし無花果も

流るるもこもるも霧や過疎の村

凭るるによき樹ばかりや孟蘭盆会

夕月や破れ団扇で勝名乗り

朝顔や引越の荷に揺れて行く

終戦のあの日何処にゐたかを言ひ

萩芒男が活けて良夜かな

今昔の霧の流に武者がおる

青芒斗酒辞せずして斜視やぶにらみ

花しげく落ちると見れば鶴ひよがいて

青柚を守りし棘の険しきこと

俯瞰したその街に入る夏帽子

ふとわれに戻りし蝶やあらあらし

稲掛くる少年汽車を見ていたり

雷鳴に照れつつはづす耳飾り

火山灰の降る朝に出逢った秋の風

秋蝶の見分けがうすい火山灰

小手毬を池で識ったよ左右もいて

借りのない余生であればと秋思う

露草をいとしんで行く廻り道

嬰兒を抱いて見たしや眠り草

あじさいや水にやさしい顔をもつ

きうり漬どんな話しもきいてみる

信濃路は仏も宿ももみじ色

スケッチの子に空澄みて六地藏

権太柿ごんた買ふて仲良き夫婦なり

車椅子器用に動かし茶を摘めり

やんま来て羽根の長さを見せつけぬ

白粥の膜つややかに秋立てり

菖 福

敏 子

多 峰

道 子

安 子

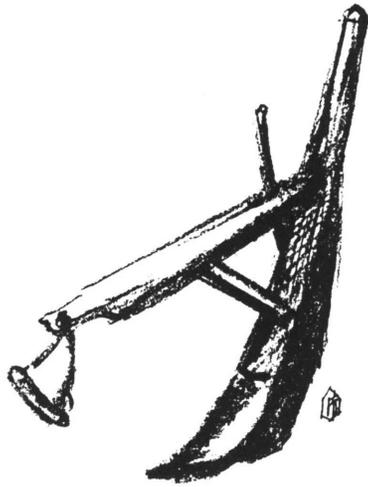
吐 雲

その子

秀 峰

みさ子

巴旦香



子や孫に語り伝える話

太平洋戦争の教訓

東区 黒木 聖

明治以後、日清、日露という二つの大きな戦争を経て、急速に国力の発展をとげた日本は、満州を舞台として、着々資本主義国家としての内容を、充実させていった。

ヨーロッパが、第一次世界大戦に巻きこまれた頃は、アメリカと共に、戦争の際に乗じて漁夫の利を占め、中国に市場を広げることが出来たが、戦争が終わると、ひどい不景気に見舞われ、国民生活の不満のはけ口を、大陸政策の遂行に求めた。

すなわち、満州事変を起こして、一挙にここを軍事占領し、一九三二年、遂に満州国を作ってしまった。その頃盛んに日本の生命線という言葉が流行して、満州を手中におさめることが、日本を発展させることだと信じられた。

これはもともと、よその国の中に、勝手になわ張りをして、ここが自分の領土だと宣言したようなもので、中国の南京国民党政府は、国際連盟に日本の不当な侵略を訴え、日本は連盟から脱退した。日本はやがて、ドイツとイタリアとの間に防共協

定をつくり、一九三七年には、芦溝橋事件から中日事変を引き起こし、南京を占領した。ヨーロッパにおいても、ドイツがオーストリアに進出し、チェコスロバキアを占領した。イタリアもまた、アルバニアを攻め、ドイツがポーランドになだれこんだのをきっかけに、第二次世界大戦となったのである。

経済封鎖下の日本が、その活路として決意した日米英戦の第一目標は、南方の石油資源を確保するにあった。それ故、ハワイに集結する米國太平洋艦隊の、撃滅作戦を決定した為、米英が対日宣戦布告し、遂に十二月八日太平洋戦争に突入してしまつた。太平洋戦争の戦況は、始めのうちこそ、アメリカ、イギリスの隙をついて、成功をおさめた様であったが、一年経たぬ間に、あまりにも遠くまで、その手を伸ばし過ぎて補給が続かず、連合軍の反攻がはげしくなつた。

一方、二年目には、ヨーロッパ戦線で、イタリアが連合軍の前に屈伏、三年目には、南方の島々がアメリカ軍に占領され、四年目には、ドイツが遂に降伏して、日本だけとなった。

しかし、これも本土への空襲が度重なり、遂に広島・長崎の原爆投下によって、最後のとどめをさされる事となった。

この戦争で、日本では百五十万の軍人が戦死し、銃後の国民は七十万近くが、空襲で殺された。戦争は大和魂で勝てるもの

ではなかった。また日本は万世以来、神の国とされていたが、神の国でもなかった。体験した戦争は、首がとび、心臓や腹わたが飛び出し、わが子をしめ殺す母親、一家が輪になって自決をする姿、崖の上から身をおどらせる母と子、人間同志の殺しあい……こんな残酷な姿を想像したこともなく、とても言葉では言ひ表わすことの出来ない悲惨なものでした。

日本は太平洋戦争で、度々玉砕という言葉を使いました。確かに玉砕という言葉は勇ましく、戦って死んだ人ばかりでなく、現在生きている私共の心や体の中でも消えることがあります。

終戦より満四十七年を経て、今や戦争という文字も風化されつつありますが、平成の世にも国の内外に様々な形で、戦の傷跡が残っています。そんな中、世界の方々では、内戦が絶えません、世界が一つの太陽の下で、協力して平和を愛する善良な国であることを願ってやみません。

人間と人間とが殺しあう事は、人類にとって、みじめなものであり、悲惨なものであり、おろかな行為であります。

若しも将来、戦争が起れば、核の使用は疑いの余地もありません。核戦争になれば、死者の数は第二次世界大戦をはるかに超え、最悪の事態を招き、地球から人類は滅び、文明は破壊され尽くされてしまうでしょう。

四十七年という時の経過は、戦争を知らない子や孫達ばかりでなく、親達も増えています。過去の戦争を顧みた時、戦は、やむにやまれぬ事情を導火線として、国と国とが、その全能力をあげて、ぶつかり合うものかも知れませんが、結局は、人間の殺しあいであります。平和な生活の、乱入者でもあります。戦うのは、軍人ばかりでなく、その国の国民の末々に至るまで、非常な苦しみの中に投げこまれることになります。

戦争放棄により、日本は平和という名のもとに戦後、経済と文化の発展を遂げ、福祉国家となりました。平和とは、「争いがなく、なごやか」な社会という事です。しかし、人間が生きる栄える原動力である欲望は、残念ながら争いにつながり、場合によっては「力の対決」になることも、人間―人類―の宿命であります。これからの日本はどうしたらよいか？真剣に考えなければならぬ問題です。最低限の力を備え、平和と民主主義を守りぬく心構えを持つことが大事だと思います。

過去の歴史を振り返り、二度と悲惨な侵略戦争を繰返さぬ様、後世に語り継いでゆく義務が我々にはあります。

未来永劫にわたり、戦いのない平和が続くことを祈るのみです。

残念至極な思い出（その二）

町区 徳 永 幸 男

佐藤幸人君の昇天と復員するまで

昭和二十一年五月二十四日私はバレイにて栄養失調になりハルボンの練成隊（病院）へ送られました。佐藤君は練成隊の二階の床の上で私のすぐ隣りで起居を共にしていました。

彼が昇天する前夜、彼は両親・家族の方が写っている写真を取り出して「みんなどうしているだろうか」と私にも見せてくれました。翌朝佐藤君は起床だよと声をかけましたが、何の応答もないので毛布をはいでみたら残念至極・口に泡を一杯噴いてすでに帰らぬ人となっております。昨夜家族の写真を見せてくれたのが最後の別れとなったのであります。

佐藤君は私より少し若い気立のやさしい、おとなしい性格の好青年でした。出身地はたしか大分県玖珠郡森町と言っておりましたので、隣県人として最も親しい人物でありました。

彼の遺体はハルボンの奇麗な砂地の墓地に懇ろに埋葬致しました。佐藤君が所持していた財布一、印鑑一、貴重品袋一、写

真二枚は彼の遺品として家族の方へ届けてあげるため私が預り、昭和二十一年十月一日私はハルボンの練成隊からチタの第六分所（中間集結地・一、五〇〇名収容）へ転属になりました。チタでも強制労働は続きました。昭和二十三年六月二十三日ダモイのためチタを出発・同月三十日ナホトカに着きましたが日本から船が出ないとの事で同年七月十五日ウォロシロフ地区のグロテコフへ逆戻りさせられ産院建設と砲兵隊の食堂建設作業・昭和二十四年三月十六日からボーエンキ・レチホフカでの伐採と材木の貨車積作業と重労働は限りなく続きました。同年十月二十一日伐採作業中にダモイの通報があり下山しましたが、皆デマだと信ずる者はおりませんでした。が、同年十月二十四日二回目のナホトカの第一分所に着きました。二十五日第四分所・二十六日第三分所（税関検査）と復員の準備・手続等を終り十月二十七日愈々入ソ抑留以来四年二か月ぶりの待望の乗船・佐藤君の遺品も三年以上持ち続けて来ました。一人ずつ名前を呼ばれてタラップに向かいました。タラップの一段目に両足が着いた時さらばシベリアと筆舌に尽しがたい喜びと嬉しさ、そして長期間死の重労働に苦しめられた憤激が全身に漲りました。引揚船は信洋丸（貨物船七、〇〇〇屯）で昭和二十四年十月三十日舞鶴港に無事入港しました。

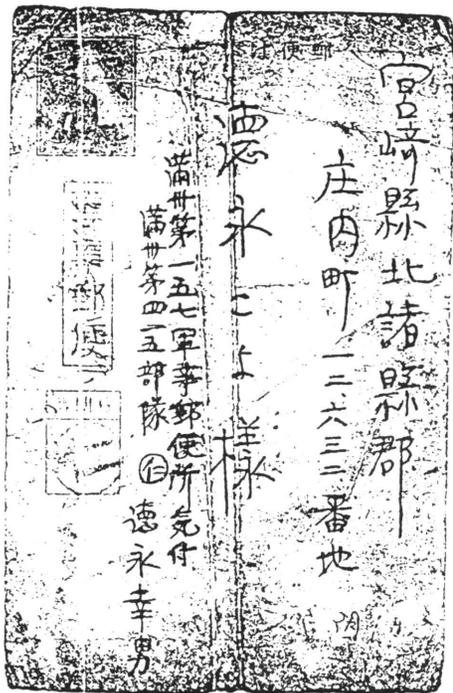
何もかもすべてが感激の連続でありました。復員に関する一切の手続を済ませ三年有余シベリアの各地を持ち続けてきた佐藤君の遺品を第一復員課遺霊係に預けました。佐藤君のありし日の姿が浮かびあがり静かに心からご冥福を祈りました。同年十一月六日帰宅してから佐藤君のご両親のお名前が不明であるため彼の出身地である大分県玖珠郡森町の役場宛に彼の遺品を第一復員課遺霊係に預けた旨手紙で連絡しましたが其の後は何の応答もありませんでした。きつと佐藤君の実家に届いているものと確信致しております。最後になりましたが佐藤幸人君と同様にシベリア強制抑留中不運・不幸にして亡くなられた全国の方々の安らかな御冥福を衷心よりお祈り申し上げますと共に、合わせて御遺族の皆々様に対し深甚なる哀悼の意を捧げ今後益々の御健勝と御繁栄を御祈念申し上げます。

略歴

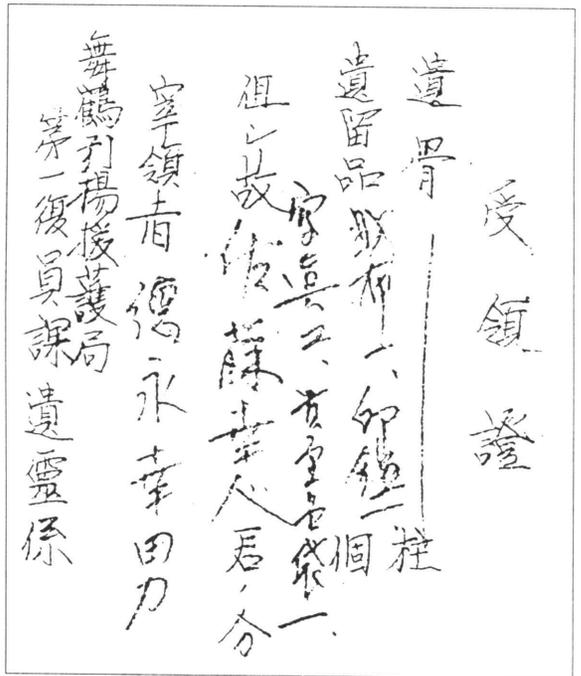
一、終戦時所属部隊

満州第一五七軍事郵便所気付

満州第四一五部隊（平時） 第二三九〇八部隊（戦時）



◎遼陽の幹部教育隊から母宛に出したはがきです。



◎佐藤幸人君の遺品を預けた時の受領証です。

終戦の日前後

東区 黒木 ツミ

昭和十二年七月七日に支那事変が勃発しました。その日、私は長男を出産しまして、村井こちえ産婆さんが、「戦争が始まったが、ここのお父さんも召集令状がこなければいいがね。」と話しながら赤ん坊を取扱って下さいましたが、間もなく赤紙がきて八月五日に入隊しました。農耕馬も夫と同時に徴発されました。その頃の私の家族は、祖母、両親、妹、幼児二人の七人でした。

戦争は益々大きくなり、太平洋戦争へと発展して銃後の生活も厳しくなってきました。青年学校は、校舎は二棟で、それが当時、農繁期の臨時託児所に使用されていました。東北の角に馬屋があったようです。空襲は日に日に激しさを増し、警戒警報の毎日でした。その頃、こちらに居た兵隊さんは大阪方面の出身者が多かったようです。警報と同時に湯谷方面の防空壕へと、トラックで飛び出し、兵隊さんの人かけは全くなかった様です。

八月六日、遂に庄内が空襲を受けました。庄内小学校を中心に、西区、町区はひどい災害を受け、人々はただ茫然として立ちつくすのみでした。幸い私の家はそのままだったので、小学校周辺を宿舎としていて焼け出された兵隊さん十八名が、宿舎として住まわれることになりました。両隣りは上官の宿舎です。しばらくの間ではありましたが夫は戦地、家族、幼い子を抱えて、今ではよく頑張ったものだと思います。

八月十五日、重大放送があるというのでお盆の日でもあるし、親族や客の人たちとともに聞いた終戦のラジオ放送、天皇陛下のとぎれとぎれ聞こえてくるお言葉に、ただ啞然として言葉もありません。残念な気持ちとホッとした気持ちでした。放送後しばらくして兵隊さんたちは帰ってこられました。皆言葉はありません。夕方になって諏訪神社前の道路で、たくさんの将校、兵隊さんが、手帳はじめ、重要書類みたようなものを、泣きながら焼いている姿が今でも消えません。

夜になると、私の家の兵隊さんたちは酒宴が始まりました。それも皆が泣きじゃくりながらの宴会。間もなく兵隊の一人が上官に向かって暴言をはく始末。でも上官は寝入ったふりして何も答えません。しまいにはドタン、バタンと、とっくみあいの大騒ぎ。その時、私は初めて全身に龍の入墨をしている人

見ました。実に不安でした。

予想もしない終戦という事態になって、皆気持ちの收拾がつかず、やるせない、うっ憤ばらしの挙句の果てとは思うものの、幼児をかかえ、夫の陰膳に無事を祈り、床についてもねむれぬ夜でした。翌日から翌々日の夕方までには皆さん郷里へと出発されました。



「かんだれ」より怖い爆弾

千草 蒲生 トミ

かんだれさあ（落雷のこと）は、所を嫌らわず前ぶれもなく落ちますが、戦争中のアメリカさんの爆弾も同じでした。

忘れもしません、昭和二十年の七月十七日（曇、晴）午後二時頃、空襲警報のサイレンが鳴りましたが、度々のことで今では馴れてしまって防空壕には走って行きませんでした。

二、三分はたったでしょうか。突然、大音響がして、家が大地震のときのように揺れましたので、びっくりして防空壕に逃げ込みました。

警報が解除になって、おずおずと外に出て見て二度びっくりしました。

南隣りの白杵重盛さん（通夫さんの父）の馬小屋が後形もななくずれ、馬二頭がふっ飛んで即死していました。

直径十メートルぐらいの大きな穴がぼっかりあいて、あたりはくすぶっていました。

私の家も障子は全部ふっ飛んで、家の中に散乱し見るかげも

ない悲惨さでした。

子供達五人は、物が飛んだときにあたった傷でしょうか顔や手足が血まみれになっていました。

男手のない当時のことですので、医者に走る者もおらず、ただまごまごしているばかりでした。

幸いに、矢野ミスミ（婦人会長）さんが歩いて谷頭の高橋医院に連れて行って下さった時は涙を流して喜んだものでした。

その時、戦争というものは、全然関係のない一般人や家屋にまで被害を与えなければいけないのかと残念で残念でたまりませんでした。

そして、お国のために、戦争に勝つために、女手ひとつで育てた稲も全部供出して、からいもやら小麦のだんごでがんばり通している自分が見じめに思えてなりませんでした。

乳のみ子や幼児にまでひもじい思いをさせて戦う戦争は何のためのものだろう。

早く戦争は終わって欲しい。男達も元気で帰ってきて欲しい。このことだけを毎日神様に祈りながら過ごしました。

あの頃の日記から

東区 片ノ坂 登

昭和二十年四月六日宮崎師範学校予科一年に入学しましたが、新校舎は空襲による直撃を受けたので教室は全く使用できず、やむなく宮崎市倉岡の金崎公会堂に移住し、ここに「七生塾」の看板をかかげて学んでいたが、その頃の日記を原文のままのせてみたい。

八月六日 晴天

八時、川舟で渡って太田原農場に向ふ。太田原第三農場の水田の除草をやったが水が無く爪が痛かった。晝食には早かったが載いたあと二時間休んだ。その間敵中型機が低空で来襲した。休憩中雨になりそうだったので干した麦を取り入れたが終る頃ちようど降り出した。午後一時から第三農場の除草。案外早くしまえたので歸塾の途につくも体の調子が悪く遠回りしてかえった。元氣な友だちは渡河した。かえるとき足がよろよろした。

塾にかえてみると坂元教官、三浦さん、吉野さん、秋山さ

んが学徒隊訓練助手として来て居られた。

二回目の皮がはげ出した。

八月七日 晴天

学徒隊訓練

朝の研修時に坂元教官より銃の名称を教わる。八時より川原にて伏射・膝射の訓練だったが木銃をもってやるときに比べ大変手がだるかった。それに草で蒸し暑かったが、教官・上級生の指導に依ってよい出来ばえだったと思った。訓練の必要を一段と感じた。

午後の訓練を終わったあと体洗いで、教官に「一日の汗をぬぐって」の歌を習う。堤のところで歌ったあと、川幅のはかり方まで習った。

一、一日の汗をぬぐいて 二、節くれの指をかざして

夕映えの 岡にのぼれば 夕映えの 岡にのぼれば

父母の いつもやさしく 風は梢に ふるさとの

笑み給ふ 岡の彼方に 歌を 歌うよ

八月八日 晴天 大詔奉戴日

研修時に照準法と数学(幾何)を習う。八時から訓練が始まっ

た。今日は昨日に比べて日照りが強い。半日で習熟の域に達せ

ねばならぬのだ。一生懸命になってやった。教官も「立派な学徒隊が出来た。よく目だつように上達した。」と褒めて居られた。晝食時に教官が「御飯はこれでは少ないな。塩はどのくらい入れたのか」と詳細に尋ねられたが、答えようがなかった。

八月九日 晴天

研修時ニ教官ヨリ生物ト農業ニ関スル話アリ。八時渡河シテ農場ニ行キ牛旁・人参・大根ノ植付ケヲスル。晝ハユックリ休ンデ目的ヲ達シテ五時頃歸塾スル。

「ソ聯八月九日三時滿州西東部ヨリ黒龍江ヲ渡河シテ交戦中ハルピン及ビ朝鮮北部ヲ攻撃中」トノ情報ヲ耳ニス。

戦イニ備エ病ヲ早くナオシテオキタイ。

八月十日 晴天

今日ハ週番服務デアル。朝銃剣術ノ練習。太田原農場ノ陸稲甘藷ノ除草。皆ヨク働イタ。十一時頃敵機来襲シ市内ヲ焼夷攻撃ス。

八月十一日 晴天

朝四時二十分起床シテ炊事ニ當ツタガナカナカ火ガ燃エナイ。

苦勞シナガラヤットツケ、六時ニハ出来タ。七時ニハ作業場
ヘ出發セネバナラナカッタガ任務ヲ果シタ。晝食モ喜ンデ皆ガ
食ベテクレタ。

午後カラ二十名ガ歸郷シタ。残ッタノハ十三名トナッタ。夜
ハキウリヲ食ベテ樂シンダ。

八月十二日 晴天

歸省許可サレル。此ノ病身デハ十分ナ奉公ハデキナイ。満十
七才トモナツテイルノデ学徒隊トシテ何時召サレルカワカラナ
イト申シ出タノデ許可サレタ。七時半皆ト別シ、空襲下ヲ歩イ
テ高岡マデタドリ着イタノハ十一時。途中待避シナガラ歩イタ
ガ宮崎ノ方ヲ見ルト煙ニツツマレテイタ。敵機襲来ハ一日一日
加熱シテキタ。敵機ハ急降下ヲ繰リ返シテイタ。宮崎行キ省營
バスハ市街地ニ入ルコトガ出来ズ引キカエシテ来タ。四時頃鎮
火シタラシイ。紙屋行キノバスハ四時半デアッタガヤット五時
出發トナリタ方六時ニ紙屋ニ着イタ。乗リツグバスハナク仕方
ナク野尻ヲムケテ歩イタ。体ヲ無理シナイヨウニ歩キ野尻ノ旅
館ニタドリ着イタノガ九時半。食ベルモノハナクトウキビヲ戴
ク。

八月十三日 晴天

七時バスニ乗リ小林駅ニ着ク。偶然長友大佐殿（師範学校ノ
配屬教官）ニ会ッテイロイロ話シテ別レタ。

十時家ニ歸リ着イタ。

八月十四日は書いていない。八月十五日は日本敗北の日と書
いてあるだけで日記は終わっている。病というのは栄養失調で
脚気の弱々しい体になっていた。十三日家に帰ってきたときは、
この子は肺病に罹っていると母は思ったらしい。脚気を癒すに
は小豆を食べたらいいかかシジミも効くとか人の話を聞いては
いろいろとお膳だてしてくれたおかげで体調もよくなって九月
の彼岸すぎには焼け残った旧男子師範寮に帰って行った。体力
がしたのは母のおかげもあったが、戦時中沖繩から疎開して
いた二世帯が私の家の隠居に住んで居り、手作りの沖繩料理を
食べさせてもらったのも元気づいたもとので、今でも有り難い思
い出の一つとなっている。

賑やかだった庄内の街まち

町区 水谷 文江

私が父の仕事の関係で、庄内に帰ってきたのは大正八年で、その頃の小学校は、庄内村立庄内尋常高等小学校といい、それぞれ六年、二年でした。庄内町立となったのは、大正十三年（一九二四）、町制が施行されてからです。

その頃の庄内の町は大体今の区割りと同じで、東、西、町、関之尾、川崎、平田、乙房、今屋、宮島、千草の十の部落に分けられていましたが、矢張り乙房が一番大きな部落でした。その当時は、町区をのぞいて他の部落は農家が多く、殆どの農家で養蚕が盛んに行われていました。

そして町区には、長倉さん、南崎さん、安藤さんという大きな製糸工場があり、女工さんたちも八〇名位、従業員の人も合わせて九〇名を超していたでしょうか、まだ他に十人位の女工さんを抱えた小さな工場もあったようです。

大きな三本の煙突からは、毎日、勢いよく煙が立ちのぼり、毎朝早くから工場に通う女工さんたちの元気な姿で、町の通り

は大へん賑わいました。

年に四回程繭が出荷されますが、この時期は町も農家も実生き生きと生きていたようです。町にはかなり大きな呉服屋さんが三軒もあり、町の十字路をはさんで東西三百米程、西側は殆ど商店街でした。お菓子屋さん、魚屋さん、肉屋さん、小間物屋さん、荒物屋さん、酒屋さんなどがずらっと軒を連ね、山田、西岳からは勿論、財部の十文字、堤方面からも皆この庄内の町に買物に來られます。通りは夜遅くまで明るく賑やかでした。

四季を通じてのお祭りなども、それはそれは賑やかなものでした。夏祭りの祇園の山車が出る時など、山車の後から浴衣姿の大人や子供がぞろぞろとついていきます。小学校の運動会、町民祭など家族ぐるみで出掛け、朝早くから良い見学場所をとるのも大変でした。道の両側には露店も一ぱい並んで、呼びこみの人の声に思わず一軒一軒のぞいたものです。願心寺の十二月の報恩講の時など、車もない時代なのに遠い田舎からも出てこられた人たちが、あの広い願心寺の本堂に座りきれない程の人出でした。お寺の下の通りには露店が並びまるでお祭りです。今でも夏祭りの夜のガス燈の臭い、甘ずっぱい夜店の匂いとともに、賑やかだった昔の町の通りの様子を、なつかしく思うこの頃です。

最後の訣れ

平田 平田 光盛

昭和二十年、日米戦争における日本空軍は爆薬を積んで突撃する戦術しかとれない残念な状況にあった。

従って、飛行士であれば、いつ特攻の命令が下って、愛機と共に艦に体当りしなければならぬかわからない運命のもとにあった。

一月十八日、突然「メンカイニコイ、ミツハル」の電報が佐世保海軍航空隊の兄から届いた。

とり急ぎ父が本駅に切符（乗車券）買いに行ったが「買がならんかった」としよげて帰って来た。

ここで会えなかったら、もう生きて会えないかも知れないと一心でどうにかこうにか切符二枚を手に入れて、母と私は夜の八時三十分の汽車に乗った。

鳥栖駅で乗替えのとき、旅馴れない親子であり、気もせいじいたので、構内放送を聞きもらして佐世保行きの列車に乗ってしまったようである。

運命のいたずらというのは、こんなことなのだろうか。後で聞いた話によると兄も急に休暇がとれて都城に向う途中の時間に鳥栖駅で乗替えを待っていて、何か予感みたいなものがあったのだろうか。

その駅で待っていることを二、三回放送してもらったそうであるが残念ながら私たちには伝わらなかった。

翌日、十時三十分頃、佐世保に着き、佐世保海軍航空隊の人に逢って、兄の事を聞いてみたら、運よく同じ隊の人で詳しい話を聞くことができた。

そこで初めて休暇をとって帰省した兄とどこかで行き違いないことが解った。

やむなく、同行した三股町の小倉さん母娘、高原町の須波さんと一緒に旅館に泊まることになった。

今の様に安易に電話で連絡がとれる時ではなく、庄内と佐世保と遠く離れて、ただ逢いたい一心にやきもきしたのは、私達親子だけではなく兄貴も同じやり切れない気持だったと思う。首を長くして待った三泊、二十一日朝電報が届いた。

「キョウヒルゴロ ツクヨテイ、ミツハル」の電文を読んだときの親子の喜び様をご想像してみてください。

天にも昇る気持で駅に行って、兄貴が降りて来るのを今か今

かと待ったが、一向に姿を見せない。

五時になりました。八時の時鐘を耳にし、途中で空襲にでも遭ったのではないか、乗替えの時間に遅れたのではないかと心配はつのるばかり。

十一時頃の最終列車が着いた。改札口に出て来た兄と小倉さん、須波さんの三人は何事もなかった様にニコニコ笑いながら、「ヨー」と私達に声をかけた。

待つ人の気持も知らずにと怒りが先に立ち、瞬間、喜びと安堵に変わったのは共通した皆んなの感情だった。母の第一声は「もう逢えんのかと思つた。よかつた、よかつた」と涙につまっていた。

とり急ぎホテルに帰り、鶏肉の煮しめを食べながら、親子三人水いらずでしんみりと語つた。

兄が、一語一語ゆっくりと話したことは「戦争は今勝つか負けるかの分け道だ、俺達航空隊が体当りで敵艦を一隻でも多く沈めることが、日本の勝利に繋がるのだ」と。涙目で聞いている母が「光春もぐらしこつね、こん世に生れて、おなごも知らずけ死んとかね」と母親の心の中をしみじみ訴えた。

「母さんは何を言うとな、この非常時にそげなこつ言うよと笑われるつど」と嗜める純情な兄の顔は笑っていたが、眼には涙

が光っていた。

弟の私に向かつて「光盛よ おれは先に靖国神社に行っちゃよいかい、今度逢う時は あそこじゃろう」「おまいも 母さんぬ助けてがんばつてくれ」と両手を力強くつかんで励ましてくれた。「うん」と首肯だけしかできなかったが、その時、海軍志願兵に合格していた私は、兄貴の遺した分は俺がやってやると心の中で誓つた。

長いようで短い夜を語り明かした親子三人に朝の光が訪れて来た。翌日は、佐世保の街を見物して夕方、航空隊の営門に着いた。いよいよ最後の訣れである。

母は、声もなくただ、ただ泣くばかりだった。

(注1) 切符二枚買うお礼になけなしの白米三升が必要だった。

(注2) 特別攻撃隊「震洋」の隊員であつたらしい。

(注3) 当時、御馳走といえはこれが最高だった。



甲種飛行予科練習生の正装

私の歩んだ道（その二）

平田 和田 盛行

昭和十六年四月、旧制都城中学校に入学して間もなく戦争遺児の靖国神社参拝に招聘され上京することになりました。

その時、庄内出身の先輩、大河内完爾（大学生）さん、北郷申吾さんと宿舎で語り合い励まされて「何が何でも母を助けて強く生き抜くのだ」と心に誓いました。

当時、厚生省勤労局長の要職にあった持永義夫先生にも厚生省でお眼にかかり、感激ひとしおでした。

新入生生活も束の間、日本は大東亜戦争へ突入しました。

学校生活の合い間には人手不足の軍需工場にかり出され、私たちは川南から富高へ、そして十九年には遠く福岡市香椎の九州飛行機製作所へ動員されました。作業しておっても空襲につぐ空襲で防空壕に避難する時間の方が多く、仲々はかどりません。一番楽しいはずの食事も芋やすいとんが多く米粒は数える程しかないみじめな生活でした。

しかし、私達学生はお互いに励まし合いながら頑張りました。

そして、忘れもしません昭和二十年の一月十八日、故郷の母の病い重しの報に接し、許可をもらって帰省することになりました。

ところが、その帰途、予想しなかった人に会うことになりました。肥薩線、大畑（おこば）駅で停車中、水呑みに降りた私は、ひとりぼつんと立っている佐世保海軍航空隊の平田光春先輩（平田、光盛氏の兄）に会ったのです。

休暇をとって両親に会いに帰るとのことです。車中、幼い頃の思い出や将来のことなど語りました。

谷頭駅で降りて庄内川の堤防を歩く先輩の軍服に身を固めた凛々しい姿とは裏腹に何かしらさびしさが感じられました。

虫の報せと言うのでしょうか、それから九日後の一月二十八日に光春先輩の戦死公報を知りました。

その後、先輩は特攻隊として出撃し、東支那海において壮烈な戦死を遂げたという話を聞きました。

戦争の悲劇とはいえ年若くして散って征った身近な人と思うとき、人生のはかなさを痛感すると同時に、お国のためと教えられた戦争が解らなくなりました。

再び香椎市に戻って、八月十五日の終戦を迎えました、よかったです。ほんとうによかった、再び戦争はするなと叫びたい。

尊敬する亡父の話

平田 本野 ア キ

私には昔を語る多くのお話がありません。

ただ、尊敬する偉かった亡父の事は、はっきり頭に残っています。

うまく書けませんが、頑固で曲がった事の嫌いだった父は、私を含めて九人の多くの子供も厳しく育てました。

今頃は、子供さんもすくなく、一人か二人ですから親もはれものにさわる様にして大事に大事に育てておられますので、私の大きくなる過程は想像もできないでしょう。

父は、常日頃、兄弟は下の者が上に従い、上の者が下を可愛いがれば争い事はないはずだと教えました。

家事手伝いというと、風呂たき、庭そうじ、内そうじ、炊事などなど、年齢に応じてはつきりしており、成長するに従って仕事の内容も段々と難しくなっていくシステムでした。

自分の仕事が終わるまでは、夕方まで家に上がれませんでした。休日とか学校から帰るとよく手伝いをさせましたが、家の都

合で学校を休ませることは絶対しませんでした。

こんな風でしたから、勉強には大変熱心で「一日一字、漢字を覚えてみよ、一か月ではどこになるか、一年には何百字になるか」と口癖でした。

祖母の話では、自分でも昼間馬車引きで疲れた身体で、夜、暇になると勉強していたそうです。

父は、決して偉くもなく学問もありませんでしたが、昔話がたくさん知っていて、夜床に入るとよく昔話をしてくれたものでした。

現在、親子のふれ合いとか対話とか耳にするとき、父はやっぱり子供の養育に大切なことを心得ていたのだなあと、ただ感心するばかりです。

今の私など、子供達に残してやれる語り草も何も待ち合わせしていませんが、ただこのせち辛い世の中を子供達が人様に迷惑をかけず、真直ぐに育ってくれることだけを願って生き抜いて来ました。

私の父もそうですが、ほんとうに昔の人達は有意義な話やためになる教訓をたくさん残してくだって、ただ頭のさがる思いです。

私が子供の頃聞いた話

(その二)

宮崎市在住 長 友 壮 二

(千草出身)

四、戻りもならじ、首つり自殺

庄内町区の松田治作さんが若い頃、熊原どんの使いで飢肥まで行くことになった。

独り旅は物騒だったので、懐中には短刀一振をしのばせ、朝は夜の明けぬ午前三時に庄内を立ったそうです。

途中、酒谷峠で若い男の首つり自殺を見て、気味悪い気持で部落に入った。煙草の火が欲しくて、ある農家に立寄ったら、薄暗い釜や(今の台所)ではあさんが火起し竹で火を起しておいた。煙草をすいながら、酒谷峠であったことを話すと、そのはあさんが言うことには、「あ^あんや^{若者}ちや、親不孝^者もんで、家出をした^のた^だが、途^あ中で^変気が^わ変わ^って^帰る^らう^もに^帰れ^ない^で、あ^あげ^くの果^はて^は、首^をつ^つた^たつ^つじ^やろ^と」と

五、前田用水路の見廻り役、片平一平衛どん

一平衛どんは鹿児島の人で、後には浜田姓を名のられたとのこと(中霧島の竜ヶ山温泉と関係があるのでは?)

この頃、城山には梨園がありました、その管理役もしておったでしょう。庄内小のがき大将共がわるさをして、頑固で厳しい一平衛おじさんにか^から^られ^た思^い出^が残^って^いま^す。

六、白石永仙という知恵者

慶長四年(一五九九)、庄内の乱のときの安永城の守将は、伊集院某といわれ、その作戦参謀がこの永仙であったと想像される。永仙の作戦は実に奇抜で、攻撃の通路に当るむた田(湿地)に白鷺をつないで敵軍を待った。

攻撃^{鳥津軍}軍は、田んぼに白鷺が降りているくらいだから、ここには守備軍はおらないと判断して一挙に進撃した。

勢込んだ攻撃軍は人も馬もむた田に足を突っ込み、大あわてのところをねらい射ちされて大損害を蒙ったという話である。

七、西郷ゆっさ(西南の役)とひくさば(千草)

西南の役では、部落の数え年十六才以上のにせ(若者)は無理やり伐り出されたそうです。

私の伯父に当る蔵右衛門(蒲生才蔵村長の頃の村会議員)が蒲生どんから出征する二人を見送りに行ったときの話、

その母親が偉い人でこんな教訓をしておったそうです。

「刀の下げ緒はせつべ長おすつとじゃつど、いざち言うとき、たすきにでん使われるいし、使い途は、どしこでんあつとじゃやかい」と。この戦いで千草出身の戦死者は、私学校の生徒だった池田重之、原田平右衛門の二人です（庄内郷五十六名の戦死者の中）西郷軍の敗けいくさで、ひさばにも官軍が攻め入るとかで、伯母のサエ（庄内、入来虎四郎の姉）は、山田村北田まで逃げて何日か隠れておったそうです。また、その時、南九州一円にはびこり、藁ぶきの家にも勢いよく生えたのが、ひめむかしよもぎ（外国から入った草）という背の高い草です。

若い者がいなかったので農耕は勿論、草取りもかなわなかったでしょう。これを「さいごう草」とその頃の人は言っても年寄りはそう言っています。

八、親の信頼があった昔の子供

私の父は、明治十七年生れで、満百歳で死亡しました。

この父は、小学校六年生のある日、祖父（末五郎）に、学校帰りに庄内の熊原どんに寄ってお金を借りて来るように頼まれたそうです。

金額はどの位か解りませんが、何かの事業資金ということですから、五十銭か一円くらいの少額ではなかったと思います。

（今の五千円か一万円）当時の庄内の富豪熊原治平翁は、借金 of 願いを告げる私の父（十二才の少年）に「よかよか、わかつた、まあ上いやんせ」とお茶、菓子で接待された。

父もませたもので外交辞令を心得ており「わあ、こらよか屋敷じゃ、よか掛軸がかかっつておる」とほめあげたので、翁は快く大金を借してくれたそうです。

九、すき焼き（馬肉）の始まり

これも伯父蔵右衛門の語り伝えです。

馬を殺して食べた初まりは、時代ははっきりませんが、志和池城、ろう城のとき、食糧に困った城兵が馬の肉を鋤のへら上にのせて焼いて食べたとのことです。

この余話に、都城と鹿兒島島津との戦いで、志和池城は地の利を得て、難攻不落で島津軍を悩ましたそうです。

島津軍にも智将がいて、地形図から見て大淀川が食糧輸送の要衝であるの見抜き、下流志和池下に見張りを立て、流れて来る米だる、調味だる等々を全部没収したために城への輸送が途絶えてしまって、戦いに大事な軍馬まで殺したということです。

私知っているかぎりの伝説や昔話を続けて送りますので、編集部の方皆さんご苦勞ですがよろしく願います。

招魂碑並記念碑移転のこと

庄内地区西南の役遺族会代表 池田正巳

西南の役で戦没された方の招魂碑、従軍者記念碑二基が、庄内町城山公園忠霊塔わきに建立されていました。この招魂碑は明治十三年三月、豊幡神社境内に建立され、昭和三十八年城山へ移転されたものです。

その慰霊祭は、従軍生存者、遺族、地区の方々の手によって、毎年盛大に行われてきました。しかし、時代の移り変わりとともに、社会情勢の激変、世代の交代と両碑とも関係遺族者等も少なくなり、意識の変化も加わって、参拝はもとより清掃等管理も行き届かなくなっていました。

そのため、南洲翁と、庄内郷出身の戦没者五十六名を合祀している同公園内にある南州神社境内に、両碑を移転し、参拝管理の便を図りたいと遺族会で相談しました。

そして市長へ移転許可申請、神社役員への移転合祀願の手続きをとり、幸い伊地知義夫館長さん、西俣保美さん、宇野興八郎さん等のひと方ならぬご努力によって七月十八日には移転を

完了しました。七月二十四日の神社例祭に、移転合祀の祭典も行われ、賑々しい夏祭りの行事に、定めし祖先の霊も慰められたことでしょう。

西南の役遺族会

池田正巳 益田正人、海老原義康、西俣勝、塚野米、黒木吉彦

坂元正人、福留フミ、野崎俊春



南州神社境内に移された招魂碑

塚野孝之丞の墓碑に詣でて

西区 塚野 米

平成二年十月十三、十四日の両日、熊本県植木町では、田原坂サミットが開催され、美少年の銅像の除幕式、官軍、薩軍の合同慰霊祭と多彩な行事で賑わいました。その合同慰霊祭に遺族として招待を受け、長男とともに参加させて頂きました。

孝之丞は、義父民衛（平成元年九月、九十三才没）の伯父にあたりますので、昔の書類等を見ながら、西南の役で幼少にして戦死した孝之丞のことをよく聞かされたものでした。

十三日の早朝に車で出発し、一路熊本へと向かいました。車中では、長男と色々なことを語り合い、また、どんなイベントなのだろうと期待に胸を膨らましました。高速道路で約三時間で植木町に到着しました。

田原坂公園は、とてもきれいに整備され、地域の活性化にも大きく貢献していることが、一目見てわかりました。美少年の銅像の除幕式には、地元テレビ局も取材を行っておりました。合同慰霊祭には、全国から多くの遺族が参加し、簡素ながらも

厳粛な式典の中、遺族による菊の献花が行われました。

式典の最中、私の隣りにすわっておられた婦人が、あなたは官軍ですか薩軍ですか？」とお互いはじめての人なのに、西南の役という絆で、それこそ、旧知の人の様に和やかな話が続いて、本当に嬉しく思いました。

田原坂公園の丘の周辺地を使い、陸上自衛隊と地元の青年団が、当時の装束姿で、「田原坂の戦い」の演劇がありました。大砲の轟音、銃声、白煙、白煙、当時の田原坂での壮絶な戦いを目の当たりにした様で、大変に感動致しました。



孝之丞の墓は、田原坂公園から約二軒の萩迫という所にあります。前に亡くなっ

た主人が訪れた時は、周囲は畑に囲まれ、竹やぶに覆われた細い農道わきの凹地に戦没碑があり、更にその上三米位の高所に墓があったということです。

今回訪れてみますと、付近一帯がすっかりきれいに公園化されています。これは、植木町老人クラブの方々の御尽力によって、近隣にある薩軍の墓碑を全部一ヶ所に集め、薩軍墓地として丁重に慰霊碑を建立、平成元年四月、公園として、完成されたものだそうです。戦没者に対する地域の方々の御気持、遺族の一人として、誠に有難く、感謝の気持ち一杯でお詣りさせて頂きました。

地元、植木町役場の皆様方や郷土史家の中村稲男先生に大変御世話になり、感謝に絶えません。

植木町郷土史家 中村稲男氏編集

西南之役田原坂資料集『歴史のはざまに』の中から

(平成二年九月一日発行)

塚野孝之丞戦没碑は、昭和七年の建立と新しい。保塁の争奪戦に勇戦奮闘の功績を、陸軍大臣荒木貞夫名を以て次のように刻んであります。

「君ハ日州庄内ノ人僅カ十五才ニシテ薩軍ニ投ジ奮戦此ノ地ニ没ス、時ニ明治十年二月二十八日、義軍遂に破レシモ君カ英霊ハ永ク此ノ地ニ眠ラン」昭和七年七月盡日 陸軍大臣荒木貞

夫

年少の身でありながらの彼の活躍ぶりが、当時、当地区から従軍していた松村勝三、平野勝衛等の諸氏から語り継がれた伝承、それを地元の村長松村英記（松村勝三の息子）、学校長の津野田儀一郎等の提唱によって、建立されたものと思われまふ。東野姓については、鹿児島島の遺族会への照会、更に庄内の方に赴き調査の結果塚野姓であること、尚、遺体の一部は未だこの地にあることが、孝之丞の甥（民衛氏九十一才）の伝承を得て判明しました。



ひくさ（千草）の奴踊

千草 長友 久二

奴（やつこ）は、江戸時代の武家の奴僕のことです。主人の行列に撥鬢・鎌髭の姿で槍・長柄・挟箱等を持って供先を勤めた人々のことであると広辞苑に書いてあります。

ひくさの奴踊は、島津軍の琉球攻めに従軍した志々目某が伝えたとの説もあり、また明治末期から大正の始め頃にこの地区に來た村芝居の役者が教えたものであるとの説もあり、その由来はさだかではない。

ここに紹介する古い写真（大正九年撮影、長友久二所蔵）は、庄内小学校の落成祝記念に撮ったもので、その頃から祝事等に活躍していた様です。

この頃の、踊り子は、おごじょ（少女）十数名に、歌い手、三味線、太鼓、拍木からなる構成で、踊りは、琉球おろし、市川團一郎、忠臣蔵五段（山崎街道の場）の三部に分かれていたことが古老の話に残っている。

今は殆どが故人ですが、鼻すじに濃くおしろい化粧をしたひ

くさ美女のあで姿をご覧下さい。

当時の懐かしい踊り子さん達を紹介しておきます。（敬称略）

浦生ハル	利弘の祖母	永峰ハナ	忠義の祖母
長友モリ	不詳	平原オツル	辰夫の祖母
鎌田シヅ	幸雄の母	長山モリ	次義の祖母
宮島シナヨ	透の祖母	有馬ハナ	一郎の祖母
村永セキ	晃の祖母	蒲生アキ	哲男の祖母
長友オイ	久二の祖母	志々目トク	武利の祖母
長友ハル	正二の祖母	村永ヒ	武秋の祖母
藤山ハルツ	勇二の祖母	志々目トク	達夫の祖母

三味線

竹松オサヨ	不詳
赤池フミ	義弘の叔母
平山フミ	優の祖母
白杵アキ	和民の伯母
長友フク	一則の祖母

（○印は現在生存者）

踊り指導

白杵ソデ	アヤ子祖母
矢野ハイ	孝行の祖母
赤池オサヨ	義弘の祖母
長友祐右衛門	久二曾祖父
長友与左衛門	一二の祖父
黒田経盛	格の祖父
広畑経次	清孝の祖父

戦中、戦後、十数年間途絶えていた奴踊もひくさ区民の熱望と有志諸兄の献身的努力によって、ようやく復活の気運が盛り上がった。「あげんじゃった」、「いや、こげんじゃった」と昔の記憶をたどりながら、踊り指導に骨折って頂いた久保オトクさん（故人）鎌田シヅさん（故人）、清水ミツさん。

楽屋の白杵曉さん（故人）、原田敬吾さん、志々目達夫さん



に私、三味線の鎌田チ子さん（故人）長田サチさん、矢野トシエさん、ほんとうにご苦労様でした。

お蔭様で昭和四十一年、当時の区長児玉栄氏の提唱で奴踊の復活を見たことは喜びにたえません。特筆すべきイベントと言えば、昭和四十四年、NHKふる里祭（於市体育館）に奴踊も出演し、大好評を博したことです。司会は有名な宮田輝アナウンサーということで、また全国へのテレビ放映ということで親も子も一生懸命でした。

踊りの初めの部分を紹介すると、二上り調の三味線と太鼓、拍子木の「三つ楽」、「道楽」により、縦二列となって出端となり、踊り子は右手に扇をひろげ、左手を使って体を少し跳躍させ、両手を腰にあて首を左右前後に短く傾けることを繰り返しながら「踊り場」に入り、二列のまま舞台の鏡板の向って横に並んで静止する。間を入れず、歌い手が言う「ヒーヨ」の声でくるりと体をかえて観席を向く、この動作が「精霊」となったことを示すものであろうと言われる。

一、踊りは琉球おろしするとき、初め扇を使い、後、手踊りを二回繰り返す。

二、市川団十郎は両手を腰にし手踊りしながら一回転する動作
三、忠臣蔵五段は両手を腰にし足を出すとき、かかとかから着

き手を上に、前にして首を左右に曲げる動作をして踊る。
終わりに現在（平成四年）のメンバーを紹介します。

会 長	上野 幹雄（区長）	会 計	長 友 忠 雄
楽 屋	長 友 久 二・志々目 達 夫		
踊 指 導	清 水 ミ チ・松 元 ミ イ		
三 味 線	矢 野 ト シ エ・永 田 サ チ		

踊り子

宮 島 ミ ツ	知 世	敏 博	中 村 麻 美 子	幸 義 郎
志々目 知 世	長 友 千 穂	畑 中 あ ゆ み	蒲 生 エ リ カ	俊 春 郎
長 友 菜 瑠 美	村 永 有 美	川 越 文 芳	清 美 男	登 美 男
志々目 加 奈 子	光 重 春	日 高 文 清	厚 孝 男	弘 孝 男
蒲 生 幸 代	登 美 男	原 田 沙 織	義 弘 孝 男	義 孝 男
中 尾 百 里	博 明	志々目 真 由 美	義 孝 男	義 孝 男
志々目 阿 希	久 幸 義	志々目 友 美	利 春 孝 男	利 春 孝 男
鎌 田 麻 美	忠 久 幸	川 越 智 美	義 和 春 孝 男	義 和 春 孝 男
村 永 愛	福 一			



千草奴踊保存会 平成4年9月27日



特 集 あの日、あの時

昭和二十年八月六日

昭和二十年八月十五日

庄内空襲

終戦

忘れえぬ大惨事

東区 久保田 武美

昭和二十年八月六日、それは私が生涯忘れることのできない大惨劇の日です。そしてこの日は奇しくも私の三十才の誕生日でもありました。

私は、学校を卒業しますと早速長崎の三菱造船所に勤めました。そして昭和十二年八月一回目の招集令状で帰郷、都城の連隊に入隊、直ちに北支戦線に派遣され約三年間各地を転戦して除隊、そして会社に復帰、それからまた太平洋戦争が勃発して昭和十六年八月第二回目の招集を受け台湾から南方戦線に従軍しました。そして何回かの死線を突破して幸いにも生き延び昭和十九年一月除隊帰郷しましたが、ホットする間もなく再び長崎の会社に復帰しました。三十才の元気な若者がわが家でのうとうとしている時代ではありませんでした。若者は兵隊か軍需工場で働く時代でした。

そして昭和二十年八月六日、私は何かの用事で偶然にも庄内に帰っていました。丁度昼ごろだったと思います。空襲のサイ

レンが鳴り響きました。私は何回も敵と砲火を交える修羅場を経験していましたが別に気にもしませんでしたがどうも様子がただ事でないので外に出てみますと都城が盛んに空襲を受けていました。

私の家は宮原の高いところにありましたので都城方面がよく見えました。もくもく立ちのぼる煙の量からして相当の被害と察知されました。そのうち横市方向より真っすぐこちらに突っ込んでくる飛行機がありました。庄内上空で何かばらまいたようでした。それは液体のように感じられました。そして二回三回旋回しながら機銃操射を浴びせてきました。ほんの一瞬の出来事でした。やがて静かになりましたがまず黒煙を噴き上げたのは小学校の講堂の様でした。

その頃、庄内は本土決戦に備えた陸軍の糧秣基地になっていました。小学校の講堂にはギッシリ物資が詰まっており運動場にも色々なものがうずたかく積まれていました。また城山付近には横穴があちこち掘られ兵隊もたくさんおりましたのでキックト重要な物資が貯蔵されていたのでしよう。

敵はこれを狙って来たものと思います。火の手は講堂から西区方面にかけて広がっていきました。

私の家内の家は学校下の堀どん（現田崎家）の下の西戻です。

西俣家には二十才になる家内の妹と家内の弟の子である三才になる女の子がいるはずです。私は夢中で走りまわりました。カクン馬場を一気に駆け抜け、一步園の所まで来ますと燃え盛る講堂の火煙が道をふさぎ前に進めません。止む無く講堂を東に大回りして学校下に出て小林どんの庭を踏み切って西俣家にたどり着きました。家の屋根はもう燃え上がっており妹たちも避難したかのようにでした。一安心の私は火の中に飛び込みます米びつを探しましたが見当たりませんでした。今思うと恥ずかしいようですが当時は食うものがなく一粒の米が何より貴重品だったのです。屋根は藁葺きでしたので火の回りが早く床には火の塊がボタボタ落ちて来ますので無我夢中でタンスの引き出しを外に放り出しました。最後に持ち出したものがモロブタでした。このモロブタは記念として今でも私が保存しています。

危険が迫りましたので持ち出しを諦めて外に出たとき兵隊さんが一人やってきました。兵隊さんは自分たちの食料としてここで四、五頭の豚を飼育していましたが見に来たのでした。この兵隊さんの話で庭の隅の防空壕に義妹たちが居ることが分かり慌てて中を覗いてみました所、中には義妹と三才になる初子と隣の三才の子供の三人が折り重なって倒れて居るではありませんか。子供二人は無傷で大丈夫でしたが義妹はうつ伏

せになったまま動きません。びっくりして抱き起こしますと胸の辺りからドットと血が噴き出しました。胸に大きな怪我をしているようです。まだ死んではいませんでした。兵隊さんに加勢をもらって義妹を背中に縛り付け子供を胸に抱いて塚野民衛さん方の庭を突っ切って田中医者どんを目指して走りまわりました。大浦商店の所で私も力尽きて座り込んでいたところ通りかかった四人の兵隊さんが加勢をしてくれました。丁度その頃は講堂や人家の燃え盛る炎や黒煙が周囲に渦巻き熱風が台風の様でした。たくさん兵隊が走り回っていましたがもう手のつけ様はなかったでしょう。親切な兵隊さんに加勢をもらい田中医者どんに着きましたがこれも避難の準備でゴッタガエシテ何どこいではありませんでした。仕方なく北郷馬場の有馬どんの小屋から戸板を借用し義妹をそれに乗せて宮原の自宅まで運んでもらいました。そして兵隊さんの計らいで安永馬場の大川原どんにおられた軍医さんが駆けつけてくれました。応急手当の結果幸いにも命は取り止めたが何日も高熱が続きました。私の家には井戸が無く下の大神どんの井戸水を貰っていましたが家内は夜中に何回も水汲みに走り看病に必死でした。

それにしても大変な事でした。男手は兵隊に取られ義妹と三才児二人の生活の中で家は焼かれて住む家なく動くに動けず何

真黒い煙

今屋 鶴 島 善 市

という不運だったのでしよう。外にもたくさんの犠牲者はあり決して私たちがばかりではありませんでしたがほんとに情けないことでした。私の家もたった六畳一間の小さな家でしたので義妹が動けるようになったところで親戚筋の関之尾の迫田シズカさん宅で療養生活を送りお蔭様で何とか元氣になりました。後で聞いた話ですがこの空襲で負傷したのは実はこの義妹と隣の山内どんの爺さんと二人だけだったようです。

しばらくして空襲で焼けた家の仮小屋の建設が始まりました。それは役場から割り当てがあつて各隣保班で一軒を受けもつ事になりました。私たちの安永隣保班は久保三太さんの家を造りました。各戸から藁や木材を持ち寄つて大体二日位で造り上げたと思います。

山内さんの爺さんは手の甲を弾が打ち抜いていたそうですがその後元氣になられましたが今はもうおられません。義妹は二十年位経つてから福岡の病院で体内に残っていた親指大の大きな銃弾を抽出し今元氣でいます。あのとき血だらけの義妹に抱かれて泣いていた初子も既に五十才、今横浜市で元氣で暮しています。私も既に八十才、記憶も薄くなりました。細かな所は記憶違いがあるかも知れませんが私が死ぬまで忘れることのできないあの悲惨な出来事を思い出すままに書き留めました。

第二回目の召集により、大東亜戦争中北支、中支の大陸を五年近くも、あちらこちら駆け巡り、戦地の悲惨な有様を目の辺りに見て、色々と感じました。

第三回目の召集により、防衛隊に籍を置き、願心寺本堂で起居し、郷土防衛の任務に当たつておりましたが、交替制に成り、私は八月六日の庄内空襲の日は、我が家に帰つておりました。

女手ひとつで子供二人を育て農事に頑張つていた家内の出来ない事を、少しでも手伝つて置きたいと、早朝から一生懸命働いておりました。

突然空襲警報のサイレンが鳴りましたので、又空襲かと子供と家内を防空壕に入れ、私は暫く空を見ておりました。爆撃機の音が次第に大きくなり、庄内の方向に飛来してきましたので、これは大変と私も防空壕の中に入りました。身体を小さくして、防空壕の隙間から見ておりましたら、爆音が急に大きくなり、機銃の音がびゅんびゅんと鳴り、近くに飛んでくる様でした。

暫くして、爆音も機銃の音も聞こえなくなりましたので、私は近くの高い所に登り、木の上から庄内の方を見てみると、小学校の軍神の大木の上あたりが真黒い煙に包まれておりました。

早速行って見たかったけど家の事が心配で、翌日一寸行って見ました。案の定、小学校の講堂と、道路下の農家の家が沢山焼けておりました。辻々にはお年寄りや、子供の人が沢山集まって、大事そうな物を持ちったり、膝元に置いて、何か嘔きながら両手を合わせて涙ながらに何か祈っておられる方も居りました。何の拘りも無い家族まで無残に焼け出すなんて、と悔しくて悔しくてたまりませんでした。本当に戦争は嫌だと心からつくづく思いました。現在もある国では戦争が絶えませんが、日本と同じ目に合うのかと思うと心も休まれません。戦争は一日も早く、世界中から無くなる事を祈ってやみません。

庄内空襲の日

西区 今城 フヂエ

昭和二十年八月六日、庄内小学校と、町区と西区の一部が空

襲を受けました。当時、主人は召集を受けて出征し、主人の両親と妹さん、私と二人の子供(上の子は小学一年生)の六人で留守宅を守っていました。それに軍属さんの夫婦が割り当てられて間借りをしておられました。その奥さんは、私内^{うち}でお産をされていました。また糧秣廠の物資を入れる地下壕を掘るための兵隊さんが、あちこちの家に分宿していて、私内の前の道路(県道霧島線)で、毎朝点呼が行われていました。私内に居た軍属さんは炊事係をされていたようです。大きな釜鍋を握えつけて、大きな豚肉の固まりを持ってきて煮たりしておられました。

その日、私は丁度、後の永山さんとこの法事の手伝いに行っていました。昼食中に都城が空襲を受けているとの事で、後の高土手の上から見えていましたが、もしかしたらこちらにもくるかも知れないと思い私内に帰りました。軍属さんの赤ちゃんのオムツが干してあったので、すぐ小屋に取り込み土間でモンペを着ていましたところ、敵機が五・六機、物凄い音で頭の上を通りこし、西の方へ廻りましたので「これは大変」と、すぐ庭の荷物入れ用の防空壕にとびこみました。でも、大きな音のため壕の中に一人でいるのが怖くなって外へ出ました。丁度その時、西隣の小山田しづさんが、異様な声を出して逃げてこられました。後で判ったのですが、焼夷弾が私内の横の通り道に落ち

たからでした。その時は、私の家にはまだ火はついていませんでした。でも一瞬の後に、しづさん処から煙が立ち上がりました。そして、私内の店のカンナ屑が燃えていました。私は早速

家の中の荷物を運びにかかりました。その頃、雨上がりで防空壕の中に水が出ていて、壕に入れていた荷物を外に出し乾かして家の中に運びこんであります。まとめていた荷物を四・五回持ち出しましたが、ひどく咽喉が渇き、胸が苦しくなりました。お父さんは、私が帰ったとき土間ですれちがいましたが、そのまま奥の方の居住用の防空壕に避難されました。一人であちこちしているうちに、とうとう納戸が燃え上がりました。怖くなって、東隣りの花吉さんの間を通り、現在の東常次さん宅（当時は、沖繩から疎開してきた人達が多勢住んでおられました）の方へ逃げました。その時、一人の兵隊さんが、「ここ（花吉さん宅）は誰もいないのか」と言われました。「多分、外の防空壕でしょう。」と言って、前の通り（県道）に出て、後を振り返って見た時、堂園さんの家の前の部分が燃え上がっていました。立派な大きな家で、「勿体ない。」と思いましたが、誰一人として消火する人もなく、燃えるにまかせざるほかない有様でした。後の話ですが、花吉さんの裏の畑の茶の木の下に、荷物が二個持ち出されてあったとのこと。多分、あの声をか

けた兵隊さんが持ち出して下さったものと思います。花吉さんも、「お蔭で助かった」と大変喜んでおられました。私内の家が大きかったので、花吉さんの家は類焼したのでしょうか。

しばらくして帰ってみたら、すっかり丸焼けでしたが、家族は、みんな無事でした。一年生の子供が、焼け跡を見て、「ランドセルがなくなりました。」と泣き出しました。今でも当時のことを思い出すと、くやしくてなりません。いずれは、何処も焼けると思っていました。焼け出された者がみじめでした。

その後は苦労の連続でした。私の家は、裏通りに沿った小屋が残っていましたので、そこで雨露をしのぎました。住居のなくなった人達には、班の方々や、ワラブキの片屋根の家を作って下さいましたが、後の方が、地べたにくっついた小屋でした。哀れな家で、今でも目に浮かんできます。私内に間借りしていた軍属さんは、荷物も沢山持ってきておられましたが、荷物もそのまま焼け出され、赤ちゃん一人を抱いて逃げられたのでしょうか。その後平田区辺りに居られる噂を聞きましたが、一回も逢う機会もありませんでした。私より、ひとめぐりぐらい若かったでしょうから、何処かで元気に生きておられるだろうと時折思い出したりします。

町役場は、西区の方の防空壕に疎開していました。そこに、

一回だけ、被災者一同が集められて、説明会がありました。今は、その内容もはっきり覚えていませんし、地下壕の役場のあった場所も、はっきり覚えていません。

町民税が一回だけ免除になり、持家に一千円、家財道具に五百円、軍用毛布二枚が支給されました。(貸家については支給されませんでした。)私内は、家に三千円の保険が掛けてありましたが、保険金は、役場から支給された一千円を差し引いた残りを貰いました。私共は母や姉や、近所の人達のお世話になりながらその日暮らしでした。天神馬場の森園清徳さんが、被災者全員に食台を贈って下さいました。大変役立ち助かりました。私内では今でもその恩を忘れないために保存しております。毎年八月六日は、広島原爆の日と重なり、当時のことを思い出しています。物の有難さが心の奥までしみこんだのに、今の物の豊かさにおしまくられていく様ですが、心していきたく念じています。哀れな時に、人様の情を知った私共ですから老先短かい今日、自分なりにみなさんのために出来ることはないかと考えています。

分散授業をしていた時

東区 帖 佐 と き

女学校を卒業して、昭和十五年庄内小学校の教師となりましたが、この頃は戦時中とは言えまだ緊迫した中にも余裕があり、子ども達ものびのびと恵まれた生活でしたが、敗戦の色が濃くなる昭和二十年頃から、重苦しい空気が流れ、教壇からも男の先生は戦場に駆り出され、残るは女教師と老教師ばかりになりました。空襲警報が出ると城山に子ども達と避難し、日頃は勤労奉仕(農家の畑仕事)で勉強は形だけのものでした。

庄内小の空爆の時、私は二十五・六歳で、千草の池田光雄(医院)宅で学童疎開の分散授業をしていました。昼食をとり帰宅し、自宅の防空壕に空襲と同時に避難しましたが、都城が空襲を受けているという声で外に出て見ますと、濛々と黒い煙があがっているのを、東区のちょっと高台にあるわが家から興奮して眺めておりました。そのうち庄内へ飛来し、てんやわんやのさわぎとなりました。「あらあら、講堂が燃える燃える。学校が燃える。どげんすかい、どげんすかい。」みんな口々に叫

びました。まだその時落ちた爆弾の音が耳に残っています。ピ
アノを疎開させておけばよかったのにそう思いました。急いで
学校に行きました。燃えつきた学校の惨状に茫然となり、皆と
黙って顔を見合わせておりました。放心状態とはこの時の様子
を言うのでしょうか。学童疎開をした時から、庄内空爆もある
のではないかと懸念していました。膨大な食糧が収納され、兵
隊さんが駐留していたからです。

八月六日、庄内と広島空爆後の八月十五日、歴史的な終戦の
「玉音放送」がありました。重大放送があるというのでラジオ
の前に集まりましたが、雑音混じりで内容はほとんど聞きとれ
ませんでした。無条件降伏という事だけはわかりました。職
員皆、声もなく、愕然として立ちつくすだけでした。私は「必
ず勝つ」と信じていました。神国日本は、最後は神風によって
救われる。決して国が滅びることはないとの底から信じてい
ましたし、それを子ども達にも教えていました。ある父兄は、
「日本は敗けたから、こいかい日本の字は教えないで、英語に
なっと。」と言いました。私はこれからの日本はどうなるのだ
ろうという不安感がありました。私は冷静な心でかえってた
しなめるように「日本の歴史は忘れてはならない。」と子ども
達に諭しました。戦中、戦後の激動期に青春を過ごした私は、

戦争を通じて「物を大事にする心」「我慢する心」を学びました。
もったいないの言葉がすぐ出てきます。飽食の現代っ子を眺め
て寂しい思いをしているのは、私一人ではないでしょう。然し、
周囲も相手の人もまして私も変わっています。戦争をくぐり
ぬけた人は根性があり、祖国愛に燃えていた様に思います。

戦前と戦後の教育はガラリと変わりました。定年退職して思
うことは、戦争を知らない子ども達に、戦争の悲惨さを伝え、
二度と繰り返してはならないと訴えたい気持ちでいっぱいです。

わが家が焼失した!!

西区 岩 切 サ キ

私は当時満二十才で、庄内の郵便局に勤務していました。男
性は召集で戦地にかり出され、郵便局を女性の力で支えるのは
大変なことでした。たくさん部隊が駐留していましたので、
その分仕事の量がふえたのでした。わが家から郵便局に通勤す
るのにも、まともに行きつくことが出来ない程、空襲はひん繁

となり、途中で必ず警報が入って、よその防空壕に入りながら通いました。アメリカ軍が志布志湾に上陸するだろうという噂も聞くようになり、女性も竹槍で決戦にいどむのだという悲壮な気持ちを皆持っていたと思います。竹槍で戦うなんて今考えるとあほらしい精神論だと考えさせられます。

昼食のため、八月六日、家に帰っていました。その時、空襲警報と同時に都城が空爆され大火災の煙があがりました。都城が焼ける様子を見ておりましたら、艦載機が庄内へ飛来し、私達親子五人（母、私、弟三人）は、城山の梨園におびえながらのぼりつきました。見おろした途端、わが家が燃えているではありませんか。アツという間の出来事でした。敵機が去って城山からおりて来た時は、一面焼野が原で、道路が焼けて歩けませんでした。庄内小の向い合わせでしたので、飛び火かなと思っ
ていましたが、やはり焼夷弾だったのでしよう。隣の東町長さんの家は焼けなかったのですが、機銃掃射の弾こんの傷跡が、今も記念するかの様に残されており、訪れるたびに八月六日の空襲を思い出しております。

焼け出された後が大変でした。着のみのままの姿で焼け出されたのです。その時は、戦争中だから仕方がないと、まだくすぶっているわが家を見ても、アメリカをやっつけるまではあ

たり前だと思っただくらい必勝を信じていました。焼けた当時は、二、三日親戚の家にお世話になり、其の後バラック生活が始まりました。しかし、いつまでもバラックでは過ごせないのがわが家を建てなければなりません。女・子どもでどうして家が建てられるか心配でした。親戚の家から帰ってからの生活はそれはそれはみじめなものでした。バラックを建ててもらっても、敷物一枚もなく、炊事をするのに焼けたはがまでふたはなし。ごはんを食べるにお茶碗、お箸一本もありませんでした。戦災者へ渡されたものはアルマイトのなべ一個だけで本当に情けない思いをしました。平田のおじ（塚野）からお金を借りて、山の木をきり、やっとな家を建てました。

戦争が憎らしくなったのは、敗戦になりわれにかえった時からです。（戦争だから、みんな人なみの苦勞をしなくてはと思っていましたから、）焼けた私の家に宿をかりていられた徳島大学校の教授であられた、曾谷軍医さんから「サキちゃん、娘時代に可哀相ね」と化粧品を送ってください、手塚さんという兵隊さんからは反物が送られてきました。焼け出されてみて始めて人の情けがわかりました。戦災者同志で話し合ったことは、怒りと悲しみと人の情けでした。青春時代の忘れ難い思い出です。幸いに生き延びたことに感謝しなければならぬと思っ

機銃掃射の弾痕

東区 島田 屯みづつ

います。

郵便局の下の楯たてさんの二階に特攻隊の人が六・七人住んでいました。三、四人の方の名前も知っておりましたが、その方達に「きょうも無事でよかったですね。お帰りなさい。」と、声をかけておりました。二十代の方々で、飛行機の爆音で戦友の出撃を知っておられたようで、胸が熱くなりました。いつ、非常召集があるかわからないので、何時でも飛び立てる様に心の準備をしておかなくてはならないと語っておりましたが、その心境の深刻さは想像を絶するものがありました。

この様な悲劇的体験を、二度と味わってはならないと思いません。私共の青春は灰色の時代といいますが、まさにその通りです。戦争体験者も高齢化しました。戦争が風化されようとしています。戦争の悲惨さを伝えて、二度とくり返してはならないと訴えたい思いでいっばいです。

私は庄内が空爆を受けたその時、庄内小の養護教員でした。学校は糧秣が入っていて、軍人さんが学校を管理していました。子ども達は地方に疎開し、先生方はそれぞれの部落に出かけてそこで授業または食糧増産のない手としてかり出されていました。だから学校に残っていたのは、校長先生（畠中栄蔵校長）と私二人です。空襲警報が発令されますと、すぐに奉安殿の鍵をあけて、御真影を城山の防空壕に奉還するというのが私達の職務でありました。

その日、入来薬局の十字路で都城の空爆を見ていました。敵機が見え、はげしい空爆を繰り返しています。塚野さんが、「敵機は今度はこっちにくいだよ!!」の大声にびっくりしました。「学校がねらわれた!!」と思ったほんの僅かな時間、敵機が来襲し空爆を受けたのです。私はいつも御真影のことが忘れられず、恐怖の中にもお守りしなければならぬとの意識で無我夢中で学校に駆けつけましたが、激しい空爆の為、奉還は

出来ませんでした。その時講堂の二階におられた軍人さんが一人戦死なさいました。あの時の恐ろしさは言えません。ふるえて物も言えませんでした。次の空襲は残った庄内の町を空爆するだろうとの噂が広がりました。戦争の暗い思い出です。

戦争が始まった時から、私は敗けるのではないかと思いましたが。世界を相手になんで勝てようかと思っただけで、心の中で思っていることを軽々しく口にすることはありませんでした。そんなことを口外すれば非国民としてひどい目にあうことを知っていました。言論の自由はなかったのです。鉄や石油資源をもっている国アメリカです。支那だけでも余っているのに。憂国の念から日本は危ないのでは？と思っていました。竹槍なんかで向かっていっても勝ち目はない。駐留している兵隊さん方もなにかしら精銳さがなく急造のよせ集め部隊のようで不安がいっぱいでした。でもこちらからしかけた戦争です。「銃後を守れ」の時世下、私の家の山の杉がきらられ、食糧貯蔵の壕の柱になっていきました。総動員で日曜はごう掘りです。終日トロッコに土入れでした。労働に馴れない私は気の重い作業でしたが、骨身惜しまず働きました。今になって考えますと、よくがんばったものだと感心します。

国民から集められた宝石類、金、時計その他いろいろのもの

を供出しましたが、本当に国の為に使われたのでしょうか。今の政治などを見聞きますときもうけた人もあったのではなからうか。そんなことも考えたりします。戦争について語りつることのない体験。怒り、悲しみ、苦しみがありました。

終戦後、私の山の壕に行ってみますと、缶詰の空かんがたくさん山に捨てられていました。戦争は人間をケダモノにするものですね。奪い合って持ち去ったものでしょう。乾パン、缶詰類、牛肉の大和煮など敗戦をいいことにして持ち出したり、秘密の場所に隠匿したりした事実があったようです。自暴自棄か異状心理が敗戦後あったと記憶しています。

私の家の隣の有馬うきさん(現在九十六才)宅は、機銃掃射の弾こんが今も残されています。隣の私の家は何事もなかったのですが、こうして生きながらえていることが不思議のようです。楯さんの所には特攻隊の人が宿を借りておられ、往って帰らない飛行機に乗る為に毎日を過ごしておられました。出陣せずに終戦になりました。確実な死を前にして、どんな思いで過ごされたのでしょうか。飛ばなくてよかったと思います。もしも無条件降伏が遅れていたら命を落とされていたことでしょう。この人達のことを思いますと戦争の悲惨さ、非情さを改めて痛感させられます。戦争体験者が高齢化しました。戦争の

衝撃は悲壯断腸の思いでした。私たちには戦争を語る義務がありません。戦争を許さぬ意志表示が必要です。戦争の本当の姿を語り伝えなければなりません。そして人の命の大切さを語り合いたいものです。

阿鼻叫喚

関之尾 中井 あさ子

私の家は、当時安永旅館を経営しておりました。二十四才頃で、庄内には兵隊さんがたくさん駐留していましたので、軍人さんへの面会客が多く、毎日忙しい日をすごしていました。また将校さんの宿舎にもなっていました。

その中に特攻隊の整備士の方が泊まっておられました。少尉さんでした。その方の言っていた言葉が思い出します。「きょうは、風が吹いて出撃出来なかったからよかったなあー。」とか、「きょうもだめだった。風が吹いて出られなかった。」とか複雑な心境を吐き出されていました。朝二時から三時頃朝早

く旅館を出ていかれておりましたが、戦友愛といえますか、生を共にした男子同志おとこの感情は、女の私には到底わかるはずもなく、ご武運を祈るだけでした。この特攻の整備士さんの心が、今になって死んでほしくない気持ちがわかる様な気がいたしません。

ある日、新婚さんと思われる女の人が宿をとりましたが、翌日その飛行機はとび立っていったと聞きました。そうそう下の庄内公民館には戦果をさけて、沖繩の方々が疎開されていたりましたが、大変御苦労なされていらっしやったのではないでしょうか。

空襲の日の事を思い出す時、あびきょうかんとは、ああいう状態をさすものだと思います。庄内川の方へ「ワァッ」と逃げ出す人の波。一瞬にして生き地獄となりました。炎と爆音におびえながら、私の家の前を庄内全体の人が右往左往して逃げ出す様な状態でした。私と妹は床の間近くにあった米俵二俵を持ち出すのに必死でした。無我夢中でした。やっと二人で外にかつぎ出し、安心しましたが、食べ物だけは確保しなくてはならないその気持ちがそうさせたのでしょうか。さて空爆もやっと落ちついて、米俵を家に運び入れようとしても、持ちあげることが出来ません。よくもこんな力が出たものだと不思議です。

兵隊さんの加勢をもらって、ようやく元の場所に置くことが出来ました。このことは一生忘れられない思い出です。

外に出ますと「ワァッ。」という叫び声が聞こえてきます。ガソリンの臭いが充満し、黒い煙、赤い炎、地獄図絵の様で、この世の終わりかと思いました。祖父、祖母、妹久子（都城の安永旅館）から、その日庄内へ逃げる途中のこわさは、口には言えないといっていました。やっと一日かかって庄内へついたらそうです。何回も艦載機の爆撃で、あっち、こっちの防空壕にやど泊まりしてたどりついたのでそうです。

爆撃の恐ろしさを知った私達は、ちょっとでも田舎の川崎へ一日かかって荷物を運び疎開させましたが、二日目は終戦を迎えまた重い荷物を一日がかりで運搬したにがい経験もありました。終戦後は、アメリカ兵が上陸してくると女の人は危ないから山に逃げなければという流言がありましたけれど、そんな事はありませんでした。然し、私たちは米軍進駐をおそれていました。「鬼畜米英」のイメージは脳裏に強くやきついていました。もうなんにも欲しくない、どうにでもなれという気持ちで、生きる事だけを考えていました。

焼けた庄内小の校舎には、食糧がいっぱいつめこまれていました。何日も何日もくすぶり続けていました。焼けこがれたこ

うりゃん等を拾いに行き、持って帰りましたけれど、食べられませんでした。

幸いにこうして生き延びて居りますが、戦争によって残された暗い思い出はいつまでも消えません。戦争の恐ろしさやその惨禍を想う時、平和の尊さ、ありがたさを深く深く思うこの頃です。

子どもの頃の罹災の思い出

西区 堀 弘子

昭和二十年八月六日、晴、炎天下の、十一時五十分〜五十五分頃、我が家も周囲も、思い出多い当時の国民学校（庄内小学校）も焼失してしまいました。私達昭和一桁生まれは、満州事変、支那事変、大東亜戦争と、生まれた時から戦いの時代に成長致しました。入学当時の歌は「僕は軍人好きよ」の唱歌が、又国語の本は、サイタ サイタ サクラガ サイタとか、ススメ ススメ ヘイタイ ススメを習い、軍国日本を感じさせま

した。今思えば、アー、子供心にも一番えらい人は、軍人に勝る者は無し」と思って来ました。

戦中は質素な生活が、あたり前でした。町の呉服屋さんも、お菓子屋さんも名前だけで、食べ物も衣類も殆どなく、あつても人絹物で、品物が少なかつたものでした。切符制でお店には「勝つまでは、何も欲しがりません。撃ちてし止まん。」などのはり紙が出されていたのを思い出します。生活も、知恵をしぼって、衣類共に廃物利用で、工夫して来ました。男女を問わず、幼な心に我慢の精神がきざみ込まれて来ました。家が焼失しましても、お国の為だからと、惜しくも感じませんでした。子供の世界で考える事ですから、お国の為に役に立ったと英雄感すら覚えました。

「戦災にあう前の私の家では、役場の臨時の女性職員の方々五人が役場の仕事場として使用され、又、東京都出身の板橋弘蔵という特攻隊の副官さんが宿をとっておられました。今思うと、夜中とか、早朝によく出勤されていましたから、若い隊員が出動する時、激励に行っておられたのだなあーと思います。その方が、荷物は置いたまま、「一か月間出張して来ます。」と言って、「又帰って来た時はお願ひします。」と言い残して家を立たれました。

空襲の十日程前に、今度は、島田文具店が軍隊の炊事場となり、その炊事担当の准尉の奥さんが（新婚さんだったと思います）空襲警報の中を、はるばる四国の愛媛県から面会にこられました。久保田島代さんと言われる方で、学校の先生をされていたそうでした。その方が、副官の留守の間だけでも宿をかしてくださいませんかとおがむように頼まれました。私の家は、副官さんがいつ帰ってこられるかわからないとおことわり申しましたが、その時はすぐ出ますとおっしゃるものですから、同情いたしましたし一緒に生活いたしました。そのお礼にと、母の着物で夏服を縫ったり、妹のブラウスを手縫いで作って下さいました。けれども着ることもなく見ただけで全部焼失してしまいました。その久保田さんも罹災者となり、リュックサックの中に一升びんと、枕だけ持って逃げられたそうです。その後、音信不通ですのでどうしておられるかなあーと思っております。その庄内爆撃の日は、広島原爆の日と重なりますので、忘れる事の出来ない日です。その時の副官さんの付け人は、島根県の大田さんと言う方でした。その後、お便りが一回ありましたが、今、今の時代と違って返事を書かなかつたようです。

戦前、戦中は、庄内町は北諸郡八ヶ町村の中の一町でして、郡部一の文教の町でした。私は「文教の町・庄内」という輝か

しい歴史をつくりあげた先祖の方々に敬意を表したいという気持ちでいっぱいです。庄内小の講堂は、北諸県郡一のりっぱな建物でした。グランドピアノもあり、当時戦死された方々の遺骨が帰って来た時、町民全員でお迎えしたり、このりっぱな講堂で、町葬が行われて来ました。そんな思い出いっぱい校舎や講堂、我が家の周囲など、一瞬のうちに灰にされました。でも終戦の日まで、当時子どもでも、大本営発表を信じて、新聞を読むのが楽しみでした。その頃、母達は愛国婦人会で、竹槍のけいこや、バケツリレーでの消火訓練をしてきましたけれど、今考えて見ると、子どもだまして、戦争する物資もなく、大本営発表も嘘だったと思います。

私達は、学徒動員で農家のお仕事のお手伝いをさせてもらってました。八月六日、当日も故伊地知ミキさん宅の田の草取りの加勢に行っておりました。お昼頃、ドカン、ドカン、ドン、ドンと大きな音がして低空飛行機の爆音と銃声が聞こえてきました。子ども心に恐怖を抱いて、帰り道、道路に大きな穴が空いているのでは？道が切断されたのでは？と心配でした。そのうちに西区の久保さん宅のおばさん達が四人ぐらい逃げて来られまして、その中に私の妹もついて来ていました。父は妹が焼死したのでは？と探すのに苦労したそうです。爆音が静まって

から私は子供の足で三キロの道を歩いて帰ってみますと、朝、行って参ります」と言って出た家は跡形もなく丸焼けで全部灰となっていました。書籍棚の跡だけが祖父の書物好きを思い残すように、小高い灰の山が出来て、煙がくすぶっていました。油を散布してから銃弾で撃つたらしく、火力の強さを感じました。ガラスとか、陶器類は、アメのように、いろいろな形に變形していました。母は「何もかも、丸焼けだ。」と言って、ただぼう然としていました。今となっては、終戦が十日早かったらなあと思います。

現在、古物が大切にされる世の中になり、生活も安定して来ますと、惜しい物が瞳を走ります。でもその時、自分の生活が大変でしたけれど、天神馬場の森園清徳さんと言うりっぱな心の持ち主がおられました。八十戸全家庭へ食卓と、まな板を御寄贈していただきました。今でも感謝いたしております。誰でも出来ない事です。

これからは高齢化社会へ進んでまいります。お互いが、心も身も助け合いながら、地域発展のため、又子孫のために生きていきたいと思います。

超低空で飛来

西区 乙守 トミ

当時、四十五歳の私は、午前中は畑で小豆とりをし、昼前帰って昼食の用意をしていますと、私の家におられた兵隊さんが「都城が空襲されているよ。」と南州神社に行かれました。私や子ども達は、すぐ屋敷内に掘った防空壕に入りましたが、主人と一人の娘は、兵隊さんと一緒に南州神社に登りました。娘の話によると、三機編隊でもすごい低空をして都城を空爆していたそうです。その中の一機が方向を変えたので、兵隊さんが「今度は庄内だぞ」と言われ、娘は神社の階段を三、四段一辺にとんで、神社のすぐ下の家の玄関に飛び込み、目と耳を中指と親指でおさえて腹ばいになったそうです。

ダダ、ダ、ダーツという機銃掃射の音に、娘は「やられた!!」と思い、両手はずし、隣の父を見たら「元氣か」という父の声が返ってきたので、「ホッ」としたそうです。その後すぐ庭の柿の木にひっかかるのではないかと思う位の超低空してきて、敵機の飛行士がニヤリと笑っているのが、とても良く見えて

も気持ちが悪かったと言っていました。娘は、毎年八月六日になると、その事を話します。「私達は防空壕の入口の戸を、二人で引いていましたが、爆風の為にものすごい力が要りました。それから私達はこの防空壕を出て、城山の大きな壕に移りました。途中は逃げる人の列が続き、私達は又やられるのではないかと不安でした。「城山の上から、庄内小学校のすばらしい講堂や、二階建ての新校舎が燃えて、煙につつまれているのが見えました。庄内小学校の講堂や、校舎には、大阪の第四師団の兵隊さん方が、たくさん駐留しておられました。又城山の防空壕の中に食糧や飛行機の部品その他軍関係の物資が入っていましたので、空襲されるのではないかしらと思っていました。

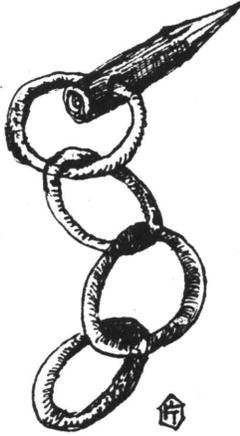
城山から庄内小の焼けるのを見ながら、私の家の隣の池田兼雄さん宅の火事を見て、びっくりして駆けつけました。風呂の水と井戸の水で、バケツリレーをして家族全員で消火にあたりましたが、消すことは出来ませんでした。私の家と池田さんとの境界線には椿の木をずっと植えていましたので、この木のおかげで類焼をまぬがれることが出来ました。有り難いことだったと思っています。

戦災の処理をしていましたら、西俣さんの家の前に、大きなドラム缶が落ちていました。始めて見たので近所の人達は、びっ

くりしていました。伊地知ミキさんは「防空壕から帰って来て見たら「家もすべて焼け、ただ盥たらいの中につけていた洗濯物だけが残っていて、着る物もなかった。」と言われた言葉が、今だに残っています。

東区の人達は、当時、八隣保班だったのですが、自宅から薬と杭を持ち寄り、戦災にあわれた方々の仮小屋作りに奉仕していたきました。終戦をもう少し早くしてもらっていたら、こんなことにはならなかったのと思いました。

二度と私は戦争はしたくないと思っています。現在私は九十歳になり、戦前、戦中、戦後を生きてきました。今あらためて、平和であることの幸福を感じています。今の戦争を知らない若い人達に、この気持ちを知ってもらいたいものです。



私が十八才の時

東区出身 長 嶺 ツ ム

(旧姓 鍋倉)

あの頃は、戦争中のことであり男は戦場に女は銃後の守りにつき、老も若きも戦争に駆り立てられました。青少年は予科練や少年航空隊に憧れており、学校の小使いさんも兵隊へと特別志願していましたので、私と町区の吉村トシ子さんが庄内小学校の小使い(用務員)として勤めることになりました。私は高等科を卒業して庄内青年学校で裁縫などを勉強していました。が、年にして十八才の時でした。

家は東区で学校の近くでしたので昼食には家の方に帰っていましたが、この日の正午から異様な音に驚いて飛び出してみました。西の空に黒々とした煙が見えました。急いで学校へ駆け付けようとしたが、母達に引き止められました。それでも慌てて学校に駆けつけてみますと講堂が焼えており、火の手は西区にも東区にも見られました。取り敢えず職員室の先生方の机の引き出しを持ち出した記憶があります。その頃は、留守役

の先生が二、三人居られるだけで、ほかの先生方は地区の公会堂で分散授業をなさっていましたので、子どもたちに犠牲者は出ませんでした。

学校が兵舎に変わり、講堂は糧秣倉庫になっていたことが空襲にあう基になったと思われます。延岡・宮崎・都城のような大きな街が空襲にあって焼けましたが、庄内のような小さな町が空襲をうけて焼けるということは珍しいことです。焼け跡に高粱が燃えきらないでいつまでも燻っていたのを覚えています。この日の風向きは、今の小学校正門のイチイガシが焼けないで大樹となっているのを見ますと、風は運動場の方から吹いてきたように思います。この頃は宿直の先生がみえるまで小使いは勤めるといのが日課でしたからこの日も長い一日でした。

城山のシラスを刳り貫いた倉庫は、糧秣倉庫となっており、城山の西側には通称「川崎航空」の模擬飛行機を作るところがあつて、私の姉ミエ（戦後まもなく死去）はここで働いていましたが、仕事の内容のことについては何も話してくれませんでした。きっと機密を守るように言われていたのだらうと思いません。終戦になると兵隊はすぐ引き揚げましたので、糧秣倉庫の在庫品の管理は大変だったようです。食べ物が不足していたので醜いできごとや噂が広がっていました。軍馬の拂い下げもあ

りましたが、軍馬にはお尻のところに「エ」の焼印が押しあつたので、アメリカ兵にみつかると大変なことになるといふことで、貫い手がなかなか無かつたようです。

糧秣倉庫の在庫品は、城山から庄内青年学校に移され、教室や運動場に建てられたテントの中に収納されましたが、その仕事の責任者の一人に宮崎市木花出身の長嶺穂積（私の主人）がおり、木花出身の青年有志を募って在庫品の管理と地方への輸送の仕事についていました。木花出身の青年は働き者で、県下各地に派遣されていたようです。高原方面に派遣されていた青年たちがごぞつて庄内に遊びに来ることもあり、男同志、男と女の交流が始まり、自然と土地の人と結婚するようになったようです。当時の思い出を語ろうとしても夫は故人となり独り寂しく過去を思い出しているところです。

忘れ得ぬ人々

西区 菓子野 美和子

“明治は遠くなりけり”と言いますが、明治どころか敗戦

も遠くなりけりで、記憶も薄れつつあります。庄内小（庄内国民学校）の空襲の際は、私は庄内小三年目の勤務でした。昭和十八年師範学校を卒業し、最初の赴任校が庄内でまだ若い新米教師でした。戦争はだんだんと悪化し、小学生も食糧増産の戦士となり、農村への動員にあけておりました。三年目になりますと分散授業となり、学校の机・腰掛けを持ち出し民家とか、青空教室で形ばかりの勉強をしていました。分散授業になったのは学校が食糧倉庫となり、防空壕を掘る兵隊さんの駐留兵舎になったからでした。私は上川崎の南前用水路のそば（花原さん宅の下）杉の林の青空教室で、学年混成授業で十三人程の受け持ちでした。竹槍訓練や、毎日の空襲で本土決戦の日も近いなとひしひし感じる様になり一億玉砕の声も聞こえ出しました。

八月六日は、分散授業をしても月一回でしたが、はつき

りは覚えていませんが学校に行く日が決められていました。私の学級の登校日が庄内小空襲の日であろうとは！私はお昼に子ども達を残して西区のわが家に帰って、食事をとっていました。私の家には蓑原（和田）の飛行場の近くに住んでいた一家族全員が疎開しておりました。敵機の空襲の攻撃目標が大都市より中小都市へと変わり、都城も再三空襲を受けておりましたので、もしかしたら庄内もという予感がありました。

空襲警報と共に家にかぶさってくるような爆音を耳にし表に飛び出して思わず立ちすくみました。都城の街が炎上しているのです。大編隊の様です。ブーン、ブーンと爆音が近づくきます。わが家の防空壕は満杯です。私は家の前の澱粉工場（今は市営住宅）へ走りました。敵機が私に襲いかかってきて、数メートル先を低空し、庄内小へ向けて旋回しました。「危い！」と、とっさに身を伏せた途端、ピュー、ダダダアンという機関銃の音が身近に聞こえました。異様な耳をつんざく衝撃音の連続です。“もう駄目だ”と思ったものの、しばらくしておそるおそるそっと顔をあげました。ああ、私は生きていたと思いましたが。そして慌てて小屋から飛び出しました。幸いに生きのびたのです。出てみますと、もくもくと上がる噴煙に愕然となりました。

『学校だ』学校には受け持ちの子どもがいる！気は落ち着きませんが敵機の去るのを待って学校に向けて走りました。どこをどう走り抜けたかを覚えていませんが、町区の方だったと思いで出しています。随所で吹き上げている火災・町もあらかた焼けおち、悲壮感がただよっていました。アツという間のこの生き地獄。余程の焼夷弾を落としたのでしょうか。後から聞いた話では、焼夷弾火災は、平時の火災と異なり、同時に多発的であるので、消火活動は出来ないのだそうです。

校門にたどりついた時、その惨禍に息をのみました。黒い煙と、まだくすぶる火炎、油くさい熱い風、熱地獄とはこの様な光景を言うのでしょうか。誰もが押し黙ってごった返していました。茫然として立っている私の前に、畠中栄蔵校長先生の姿が目につりました。「子どもは、子ども達は？」と聞きたいのですが、声になりません。校長先生は「子ども達は奉安殿の下に掘ってあった防空壕に避難していて無事でした。」と言われました。その言葉を聞いた時、緊張感がゆるみ、思わず顔を覆いました。何と感謝したらよいかのかわかりませんでした。校長先生は、子どもから離れた私を、厳しく注意されましたが、その事を忘れる事は出来ません。熱風の吹き巻く中で、新米教師の失策を悟されたのでした。今でもその時の厳しいお顔が脳

裏に刻まれています。教師として失格の悲しみの心が身体中を駆け巡りました。そしてそれは深い傷痕となりました。四十年近い教師生活の教訓として、『子どもと共にある教師』は、それから私の座右の銘となりました。それに加えて『子どもと共にのびる教師』と自己を啓発してきました。きびしい校長試験にも挑戦し、管理職十二年責任ある場を勤めさせていただきました。現在ある私の姿は、庄内小の空襲の時の、あの畠中栄蔵校長先生の至誠の賜だと感謝しています。子ども達は恐怖に怯えたでしょうが、校長先生がそばにいていただき、どんなにか心強かったことでしょう。上川崎の子ども達を見つめると涙が出ました。やっと自分をとりもどし、緊張したあとのひどい疲れを覚えましたが、私はくすぶる焼土の中を安全に上川崎の自宅に子ども達を送りとどけたのでした。それから数日して停戦となり、僅か数ヶ月の担任でしたので、子ども達の顔を覚えていませんが、すまなかったという気持ちで一杯です。二十才であつた私も七十才に近い年齢となりました。四十九手前の悲壮断腸の想いを回顧しています。生存されていない畠中栄蔵校長先生は私にとって忘れられない先生でありました。

私にはもうひとつ忘れられない思い出があります。庄内小の講堂は、その頃県下一を誇った建築でした。その講堂には、グ

ランドピアノがでんと置かれておりました。今では、珍しくもないでしょうが、それは貴重なものでした。職員の間では、ピアノを疎開させたらどうだろうかとの声もあったのですが、それは実現されませんでした。音楽の好きな私は、一番りっぱなオルガンを一台私の家に疎開させましたが、終戦後、このオルガンが焼け出された庄内小にどんなにうるおいを持たせてくれたことでしょう。

ある夏の暑い日、兵隊さんがわが家を訪ねていらっしやいました。「先生は楽譜をたくさん持っていらっしやると聞きましたので、その楽譜をお貸しくださいませんか。」との用件でした。「なにをなさるのですか」とたずねますと、「兵隊さんの演芸会がありますので、ピアノを演奏する方がいられるのです。」との事でした。東京出身の軍医将校さんだそうです。私は持っていたすべての楽譜をお貸し致しました。私はその当日、演芸会を見ることは出来ませんでしたけれど、或る日、学校の横の道を通りました時、美しいピアノの音が流れていたことを思い出します。きっと練習をなさっていたのでしょう。その曲は「乙女の祈り」で、しばらく聴き入っておりましたが、戦時中とは思えない心のやすらぎを覚えました。楽譜を返しにこられた兵隊さんのお話を聞きますと、当日の演奏曲も「乙女の祈り」を弾

かれたそうです。すばらしい演奏であったと聞きました。その演奏会がすんでいく日もたたない日に講堂はピアノと一緒に焼失したのでした。あのピアノの最後の演奏曲が「乙女の祈り」だなんてなんとドラマチックでしょう。

年齢のしわを顔に刻み、旧講堂の跡にたたずむ時、若かりし頃の思い出が走馬灯のように駆け巡ります。ロマンチックなあの乙女の祈りのメロデーが懐かしく聞こえてくるのです。この年になってもなお胸が震えるのは何故なのでしょう。ポーランドの人バーハ・ゼスカの作曲で国境を越えた乙女の祈りをなぜ弾かれたのでしょうか？あの頃は、月月火水木金金とか、軍艦マーチ、海行かばなどの曲が毎日のように流されている時でした。演奏された軍医将校さんは、どんな願いをこめてどんな気持ちで乙女の祈りを弾かれたのでしょうか。乙女は皆平和を愛していました。この曲は、新しい世界を求めて、モスクワへ旅立とうとする乙女イリーナの未来にかける願いを作曲したものだと言われています。終戦の夜、星の輝く夜空を眺めながら、もう飛行機はこれからはとんでこない。と思うと解放された嬉しさを覚えたものでした。「乙女の祈り」を演奏された将校さんは、その後、東京に帰られてどの様な人生を歩まれたのでしょうか。私の美しいものへの感傷かも知れません。思い出は、世代

と共に消えていくものですね。戦争には美はないと思います。美に敏感なのは、乙女なのです。

私達は、戦後、男ひとりに女トラック一杯と言われた時代に放り出され、決して幸せな生活ではありませんでした。『乙女の祈り』は私達の小さな幸せの願いであったのです。戦中、戦後の激動期に青春を過ごした私達は、特異な世代即ち冬の時代とも言えましょう。

何を美しいとするのか。魂とするのか、何が正しいのか。何が悪いのか見極める能力が必要です。大東亜戦争は、日本歴史の上で最大の愚行・最大の悲惨事でした。記憶が風化されようとしています。戦争を体験された方々が六十才を越えたいま、私もその証言の一人として追憶しています。語り伝えること。これはいまでなければ遅すぎるのです。



後は、編集部の設問に答えてもらった記事です。

設問一、あなたは、この時刻にどこで、何をしていますか。何才でしたか。

設問二、大被害になる予想、又は前触れがありましたか。

設問三、あなたが眼のあたり見たことを話してください。

設問四、どんなことを考え、どんなことが心配になりましたか。

設問五、その他（後になって聞かれたことで結構です）

宮崎市（当時庄内在住） 畠 中通 夫

一、八月六日午前十一時五十分前後の事と思われる。（正午過ぎてないと確信している）当時十五才、旧制中学四年の私は、腎臓疾患のため都城市にある川崎航空機工場の学徒動員を休んで、自宅（校長公舎）で母といつもより早い昼食を取っていた。空襲警報が発令されたかどうか記憶にないが、異様な物音（グラマンの爆音と後で判明）に二十メートル先の防空壕にかけこんだ記憶がある。壕のなかで母が居るのを確認できる程の慌てようである。

二、庄内に駐屯していた関部隊の多くの兵士の姿がたとえ上空から観察されていたとしても、よもやこの庄内という山間の

辺地が焼夷弾の被害を受けるとは、だれも予想していなかったと思う。

三、約十分か十五分（全く時間の長短は分からないが、短い記憶がある）の防空壕の後、もう敵機は去った様子に外に出たところ、壕と家との間にある高さ約五メートルぐらいの柿の木の上付近の、直径約七センチほどの枝が飛行機の主翼か何かで折られたと思われる無惨な姿が目についた。低空を飛んだという実感と同時に、藁葺きの校長公舎の屋根の数ヶ所より白煙および火炎が上がっているのに気づいた。気付いた瞬間に若し屋根でなく、焼夷弾でもなかったら、個人の力でも消し止められそうに思われる程の弱い勢いだった気がする。

四、当時、思考することには不慣れで、また日本は負けないと言った今思えばおかしな信念を徹底的に吹き込まれていて、家が燃える。教科書も、何もかもなくなるという以外の考えはなかった気がする。ただ南九州の敵の上陸は近いと言った気配は感ぜられた。

五、母は私と姉（お産で壕にいた）に逃げるように言って、気丈に家の中の荷物を運び出せる範囲で運び出したようだが、私達は田圃まで逃げて行った。（不要になっていた父の穴のあいたカンカン帽をなぜかもって）小学校の講堂の燃える黒

煙と火炎が目には焼き付いているが、何時の時点であったか見当がつかない。また壕の中で聞いた機関銃の音は、近所の女性の足をいぬいたことも、後日判明した。

同日の都城の空襲の黒煙も、はっきり目にはしているが何時のことなのか。同時刻なのか、その日の夕から夜にかけての事だったか判然としない。

父は何時帰って来たのかも定かでないが、家の焼けたことは知っていた模様である。「御真影」云々の言葉しか耳に残っていない。

平田 和田 ハツ子

一、家事の手伝いをしていたが、空襲と同時に小さな弟を抱いて防空壕に入った。十八才

二、飛行場周辺が空襲されていたので、町の密集地帯もおそろしく空襲されるのではないかと予想していた。

三、恐しさ一杯で、外を見ることも出来ずに、防空壕の中でぶるぶる震えていた。

四、自分の家も空襲で焼けて……。私の生命はどうなるのか……。又、学校の授業は今後どうなるのか心配した。

西区 小林 フヂ子

一、丁度、昼食時でしたので、ご飯を済ませたばかりでした。二十二才でした。

二、頻繁にB29が飛んで来て何度も空襲警報があり、銀色の翼をキラキラさせながら通り過ぎて行く。でもまさか庄内まで焼けるとは思っても見なかった。

三、何時ものB29ではなく、小型グラマンが大編隊を組んで、庄内の方に向かっていった。都城がもくもくと黒煙が上がり出し、またたく間に低空で庄内めがけてものすごい音で飛来して来たので生きた心地もなかった。どうやって家の後の防空壕にかけ込んだか分からず、「逃げないと煙にまかるっど。」と母が叫んだので、防空壕を飛び出した。外はもうすでにあちこちに火がついており、消し止めるどころではなく、一人は小脇にかかえ、二人の子供と一緒に湯谷の方へ、力の限り走り続けた。

四、こんな田舎の庄内さえ焼けたのに、無知な私はまだ勝つものとはばかり信じておりました。

今屋 吉村 アイ

二、三月十八日の艦載機の襲撃で、ただならぬ事態になったと

思いました。都城の町の爆弾投下等に、恐ろしさを覚えておりましたものの、ただただ勝つ事だけを信じていた様な気がします。

三、国防婦人会でも竹槍のけいことか、バケツリレーなどがあり、いよいよ戦争もはげしくなって、アメリカの艦隊が志布志湾辺りから艦砲射撃などがあって逃げまとう姿を想像しました。どこか山奥の方に逃げなければいけない事態になるのではと、そんな事を考えておりました。

五、学校に保管されていた糧秣しよりの穀類が、何日も何日もくすぶっていたと聞きました。

西区 野海 さえ

一、都会では、学童疎開のさげばれている時で、ご多分にもれず、田舎の学校でも分散授業（各地区に分かれての勉強）が行われていた。下川崎の横山武雄様宅の馬小屋の二階で授業が終わった所。数え年二十才。

二、なんとなく敗戦色の濃い時であり、軍隊・飛行場も近くにあったりして、いつ空襲を受けてもおかしくないところであった。そんなことは、口にだすこともはばかれることで、まさかと不安はあっても、とにかくその日その日を、只、一生懸

命ずごしていたと思う。

町区 水谷 文江

三、機銃掃射の音を聞いて自宅に帰ったときは、小学校の校舎やその周りの家が燃えあがり、自宅の前の道路ごしの家も燃えていた。側溝には艦載機から落されたドラム缶（使ったあとの缶）があり、家の玄関の壁もあちこち燃えたり、機銃掃射の黒い跡がついたりしていた。その時は、皆もう無我夢中で、裏の土手下の防空壕や、城山の防空壕に逃げ込んだりしていた。

四、いろいろなことを考える余裕などなく、これから一体どうなるのだろうと、只、茫然としていた。

平田 栞 山 キ ミ

一、家事の手伝いをしていたが、空襲と同時に防空壕に入った。
二、都城飛行場が空襲をうけたので、庄内付近も飛行場から近いので空襲されるだろうと思っていた。

三、恐しくてならなかった。空襲後火災の状況を見てびっくりした。

四、自分の家 周辺が空襲されることを考え、大変心配だった。

一、私の家には、軍隊の物資を入れる為の防空壕を掘る軍人さん達が十人程泊まっておられました。「何処か安全な処え早く逃げなさい。」と言われるので子供を三人連れて、いま、市の住宅のある裏の山かげに行きかくれました。三十二才でした。
二、大被害になる予想はしていませんでした。前触れもありませんでした。

三、私の家が燃えていると聞かされ、三人の子供と泣きながら帰ってみたら、我が家は無事でしたけれども、近所や学校の近くなど火が上がっていて、生きた心地がしませんでした。
四、親子四人生きて行く事が精一杯で、外の事など考える余地はありませんでした。

五、終戦になってから、米軍が来て何をされるか分からないと聞かされ、不安な日々が続きました。

宮崎市在住 東区出身 坂 元 守 雄

一、当時、都城中学校の一年生で十三才でした。当日は登校日でしたが登校直後、空襲警報が出たということで下校を命じられました。下校の時、都城の空襲を目のあたりにし、その後牧の原の坂にきて、初めて庄内の空襲の現状を知りました。

三、当日は、登校（現在の泉ヶ丘高校）するとすぐ、空襲警報がでたと、いうことで下校を命じられました。学友団の友人たち数人と帰る途中、志比田橋近くで多数の米機（グラマン機）の空襲に合い、山陰の凹地から都城市街の火災・母校（都城中学校）の焼失・都城周辺の各施設が攻撃を受けるのを目のあたりにしました。その後、友人たちと離れ離れになって、敵機から身を隠しながら家路を急ぎました。大根田と今房の間の畑の道で、急降下爆撃機の波状攻撃を受け身動きできないこともありました。（実際には近くの軍事施設への攻撃だったのですが）庄内が空襲を受けていることは敵機の攻撃の様子や煙の上がるのが見えることから分かってましたが、牧の原の坂に来て初めて庄内の町の空襲の状況を知りました。火災は小学校をはじめ、町の中心部から西側へ燃えていて、自分の家の辺りも火の中にあつたので、それから夢中で家に急いだようです。小学校の校庭を通るときは、火災はすでに下火になっていて校舎は跡形もなく、駐留していた軍人や町の人たちが作業をしていたように記憶しています。午前十一時か十一時半頃のことと思います。

四、多くを覚えていませんが、母校（都城中学校）の校舎の窓から火がでて、瞬く間に校舎が燃え上がったときの衝撃は何

よりも大きく、忘れることのできない情景です。それから、庄内の学校や町が燃え、我が家の辺りも火の中にあつたのを目にしてから、家に居る母や祖父、下の弟や妹のことを気にしながら家へ急いだように記憶しています。

西區 藤村 チエ

一、私は勤労働員で旭化成工場で働いていました。当時十五才でした。汽車が不通で延岡から高鍋まで歩いて帰り、又都城から庄内まで歩きました。帰って見ますと自宅は焼失し、家族はよそに住んでおりました。

三、アメリカ軍が終戦後必ず上陸してくるけれど、アメリカ兵は女性に乱暴するだろうという流言に、頭を坊主にして山に逃げなければならぬと思うと、アメリカ兵に捕まる事が本当に恐かった。けれどもそんなことなく非常に静かなものでホッとしました。

五、亡父から聞いた話では、伊知地さんの所の道路が火災の為に熱くて通られず、牛を逃がす為に、東さんの所の木戸を通して、牛と共に城山に逃げたそうです。空襲後、城山から焼けたわが家に帰って見ると、みそだるのみそがブスブスいっていたと聞かされたことを覚えています。又、川辺さんの前の

道路にドラム缶が落ちていたそうです。

西俣あやちゃんがこの空襲で負傷したそうです。

西区 中村 ツルエ

一、小学校の裏に子供をおんぶしていました。教元年二十六歳で、兵隊さんと一緒に城山に避難しました。

二、B29が毎日飛んで来ていたので、予想していました。

三、防空壕の中で艦載機からの銃撃の音を聞きました。外から「早く出なさい」と呼ばれて出て見ると、空一面の煙でどうなるかと思いました。でもまあなんとか無事に家に帰ることが出来ました。

西区 谷口 綾子

一、田んぼの草取りをしていました。高等科一年で勤労奉仕作業に動員され、毎日丸田さんの家に集まって、森田先生の指示で、今日はここの作業とおっしゃった所の家の加勢をすることでした。いつも空襲警報がなりますので、恐ろしかったです。

二、小学校を見たら、真黒の煙が出ていました。防空壕に逃げました。帰りましたら、自分の家は丸焼けになっていました。

子ども心にも大変恐ろしかった。まさか自分の家が焼けるなんて、思ってもいませんでした。

三、私の家は牛をたくさん飼育していて、両親は牛を出すのが精一杯だったそうです。将校さんが宿をかりていられたので、その将校さんの荷物を庭に持ち出したそうです。

五、空襲で焼けたわが家族は、母の妹宅（瀬戸山さん）に身をよせ、当分の間お世話になりました。食糧難の時代でしたから、これからどうなるかしらと心配しました。焼け残りの学校から拾って来た高粱とか芋がゆを食べていましたが、泊られていた将校さんからよくしてもらいました。西区の精米所の所（いまは住宅）が兵隊さんの炊事場でした。腹をすかしていた私は何かもらって食べたことを記憶しています。あの頃はどのようにして食べて生きていくかが、一番のことでした。私の家は、あちこちに牛を預けていたそうですが、アメリカ兵が上陸して来たら、牛を殺すそうだから牛を引きとってくれと言って連れて来たそうです。大変困った両親は、庄内川の川崎の草場の堤防の所につないでいたそうです。みんなアメリカ兵が恐かったのでしょうか。

一、その当時、二十四歳の私は、多分にもれず、召集を受けて旭兵団田中隊第三分隊長として、鹿児島県の吉利村に駐屯して軍務に服していました。たまたま原隊の都城補充部隊に、部下を命令受領と資材購入に派遣していました。その部下が帰隊しての報告の中に、庄内の小学校やお寺が大空襲を受けて惨憺たる大被害を受けた事を知った次第です。

二、その時、私達の部隊は都城原隊より鹿児島駐屯地に移動中鹿児島市内にて、空襲の中を通過したのです。

火炎の中、死者無数。衣類など消火する人として無く、くすぶっている火の中を通過して行ったのです。これは、日本は駄目かなと思ったものです。庄内は軍の資材集積地なので、又防衛隊もいたので、早晩やられると感じていました。

三、終戦になり、家に帰ってから考えた事ですが、バカな戦争をしたものだと思わずに思いました。我々が働いたのは何だったのか。その結果はこうだったのかと、焼けた跡に立ちながら、つくづくと考えさせられました。

四、戦争とは、得るものは一つも無く、大事な生命を個人の選択もなく奪い、学舎やお寺や、総てのものを破壊します。

このような人間性を否定する戦争は、絶対に行われてはな

らないし、許されない事だと思います。

五、笑い話をして聞いて下さい。

アメリカ空軍は、爆弾投下の命令を受け、出発したら、自分の飛行機に爆弾を積んでいるかぎり投下しなくてはならない。帰着した時投下しましたという報告が出来ないので、どこでも投下したという話。故に庄内空襲の帰りに余った爆弾を財部は空襲せずに、その山に投下して帰ったとか。おかげでその山（杉の四十年生）二町歩位の立木が、タマだらけになり、商品にはならず、終戦後、タキギにしたとか？

宮島 宮島 重利

一、私は当時十八歳、小学校を卒業と同時に農業に従事しました。銃後の農業（米づくり）に専念していました。父が高年令ということもあってか、徴用もこず、只ひとすじに農業に励んでいました。

二、当時、庄内には、城山・湯谷と横穴の洞窟を掘って、軍の資材・食糧などを、相当量保管していました。私達も軍の要請により、谷頭の駅から荷馬車で大分運んだものです。その関係もあってか、庄内小学校には兵隊が入っていました。また、願心寺には幾分、年をとった防衛隊が入っていました。

三、その頃、毎日の様にB29の襲来があり、上空を通過して見ました。そのうち双胴体の今まで見たこともない、珍しい飛行機が上空を何回か飛んで行きました。考えてみますと、これが上空からの偵察だった様です。

八月六日は、たまたま我が家にいたのですが、たしか都城の空襲と同じだったとも思います。二機のグラマン戦闘機が谷頭の上空から平田の方向に低空で飛んで行きました。グラマンが自分の上空まで来る時は、堀の中に身をひそめていましたが、自分の上を通り過ぎると、もう安全ですから堀から身をのり出して見ていました。二機のグラマンは平田上空で急に旋回して、庄内の町の方向に飛んで行き、そのあと、まもなく火の手が上がりました。小学校の講堂のは、焼夷弾によるものと思います。北東風にあおられて南西の方向に町中焼けた訳ですね。

四、上空からの偵察機は、ほんとうによく見ているんだなあと思いました。願心寺の方は的がはずれてほんとうによかったなーと思います。私達の先祖の方々が辛苦をかけて建てて下さった尊い文化財の遺産です。今後は私達が大事に守って後世に遺したいと思います。

小学校の講堂は、まだ新しい立派な私共が誇りにしていた

建物で、ほんとに残念でした。

軍隊が入ってなかったら、庄内小学校、願心寺の空襲はなかったんだろうになあと思いました。

都城市在住 永井アキ

一、自宅に居て和裁をしておりました。満二十歳でした。
二、終戦をラジオで知りました。天皇陛下の玉音を聞き、ただ動揺するばかりでした。

三、今後敗戦日本はどうなるんだろうと心が暗くなり、心配するばかりでした。

四、アメリカ兵が上陸して来たら、婦女子はどんな目に合うかしれないと。山に逃げ様等との噂もありました。

平田 福留 ユキエ

二、昭和二十年三月十日、都城地方の空襲は初めてでした。最初は、日本の飛行機の演習とばかり思っていましたので、大きな爆音がしだしてから皆びっくりしました。

三、二十八歳の私はちょうどお昼のご飯を早目にすまして、三人の子を連れて家を出ようとする時、いつもは都城あたりで聞えてくる爆音が、段々大きくなってこちらに向かってくる

ようなので、あわてて裏の防空壕の中に幼い子の手をひっぱって飛び込みました。途端、ヒューッ、ゴーツと山の木の上スレスレにグラマン機が飛んで、頭の上でバリバリとものすごい音がしました。まわりの竹山に機関銃の弾丸が落ちて、もう今にも死ぬかと思いました。外に出て見ますと、庄内の町のあちこちに火の手が上がり、黒い煙が空を覆っていました。敵の飛行機は入れ代わり立ち代わり、学校あたりと思われる所に、つつ込んでいきました。

四、主人はまだ帰ってこないし、幼い子供をかかえて、どうなるだろうと心細さと不安で一杯でした。

西区 猪 俣 八重子

一、学徒動員で、地区猪俣宅の田の草取りに行っていました。丁度、お昼ご飯時でしたので、猪俣宅の縁側にいました。十四歳でした。

二、こんな大被害をうけるとは、子供心に夢にも思っていないませんでした。

三、目の前は真赤な火でした。かよっていた学校が火の海でした。近くの家も焼けて、その夜は恐しくて家にはいる事が出来ず、山に泊まりました。一晚山で過ごし家に帰って見ると、

あちこちブタやニワトリが可愛相に丸焼けになって、ごろごろしているのを見ました。私は泣けて泣けてなりませんでした。今思い出してもぞっとします。

四、今からどうしようと思いました。子供であったので鹿児島県がどこかも分かりませんでした。宮崎にいたらまたこんな目に合うから鹿児島県に逃げようと友達と話しあったりしました。

また学校は焼けてしまったので、どこで勉強するのだろうかとても心配でした。

町区 重 久 正 子

一、私は庄内空襲の時、祖母の家の防空壕（現在宮崎銀行庄内支店）に入って居りました。女学校二年生十四歳でした。

二、まさかこんな田舎まで焼けるとは夢にも思っていないませんでした。

三、空襲警報が出たので防空壕にはいっていたら、ものすごい爆音と共にヒューン、ヒューンと言う音がして生きている心地はしませんでした。ただ事ではないと外に出て見ましたら、あちこちに火が出て隣の杉永さん、堂園さん、大石さんあたりが燃えていました。びっくりして「逃げないと大変」と私

と母は妹二人をおんぶして、庄内川堤防へと逃げて行きまし
た。堤防から平田の浜田さんまで行き、夕方おさまるのを待っ
て帰りました。自分の家は無事残って居りましたが、小学校
も焼けて居りました。

四、小学校には軍隊がいる事もわかっていて空襲を受けたので
しょう。空襲を受けた次の日は、みんな焼けた米を小学校に
拾いに行き、こげくさいごはんをがまんして食べたのを覚え
ています。

五、願心寺もたくさん弾のあとがありますが、焼けずに無事残っ
た事が何よりでした。

この庄内空襲のことについては左記の方々も執筆されてお
ります。

「庄内」一号 心のふるさと

岩佐 フヂ

平和を誓う

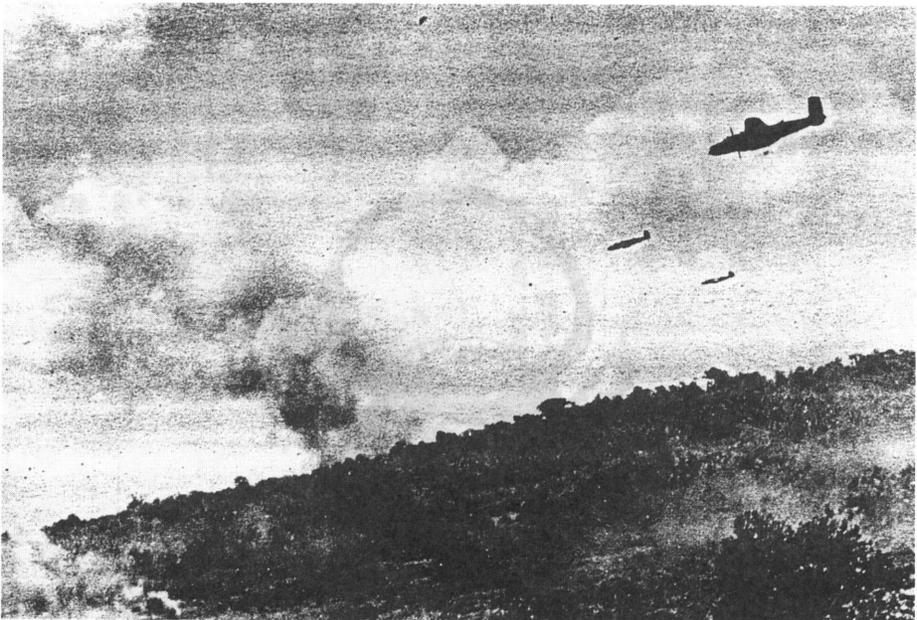
池田 シヅ

とても恐ろしかったこと

立山 トミ

「庄内」三号 庄内小空爆の日

橋口 利光





昭和20年8月6日庄内、空襲被災状況説明略図

被災者の方や親類の方など20余名の人からの伝聞により作成したもので
全部の方に確認したものではありません。誤りなどありましたらご教示下さい。



・コノ2棟ノ校舎ヲ残シテ他ハ焼失シタ。
・学校空襲デ少ナクトモ兵士一人ガ戦死シタ。

○ ← 庄内町役場内ニ輸送隊司令部ガ置カレタ。
司令官ハ椎橋少将デアッタ。

後記
① 庄内小95周年記念誌の中、村永迪夫先生の「庄内小学校戦災略記」を参考にさせていただきました。
② 故森園清徳さんの長女チリ子さんによりますと、氏が戦災者に寄贈されました食台とまな板は72軒分であったということです。今回の調査では、家財だけ焼失を含めて66軒ですから、不完全な調査のままの発表になったことを残念に思っています。
③ 調査にご協力下さいました皆様有難うございました。
調査者 清水省三

八月十五日

南方戦線にて

町区 鶴村 肇

日本軍が戦勝に戦勝を重ねていた頃、昭和十七年四月現役として熊本第二十二部隊陸軍工兵隊として入隊しましたが、戦火の激しいなか、翌十八年十月炊事軍曹の助手として勤務していました。そんな中、次々に戦地へ向う戦友の服装が夏服でしたので、自分も暑い所なら大丈夫と思いい隊長にお願いして、南方へ従軍することになった。静部隊第四十六師団一二三聯隊工兵隊白浜隊に編入され、十一月に門司港を出航し、十二月昭南島（今のシンガポール島）に上陸し、十九年一月十日小スンダ列島の中のスンバ島ワインカップ港に上陸し、臺北地区警備作戦に参加しました。

その頃アメリカ軍の大艦隊は次々に島を占領し、次第に戦況は悪化し、わが隊も遂にこの地を放棄することとなり、マレー半島地区に転進する事になり、スンバ島のワイチロを出て、ス

ンバワ島ロンボック、バリ島、ジャワ島に立寄り、その地区の警備作戦に参加しておりました。二十年八月十五日終戦となりましたが、敗戦を知ったのは二日後の十七日でした。（年齢二十五歳の時であった。）日本が降伏した様だと伝わると、どの兵隊も顔色が悪く、土地の住民はどの家も雨戸を閉めきって、二階の窓を少し開け、顔だけを出して我々をじっと見つめていた。今でも当時のことが頭から離れず時々想い出します。

二十年十月集結収容の為、三日間歩き続けましたので、どの兵隊もくたくたでした。そんな中、遂に武装解除が言い渡され、昭南港を出て、昭南地区のレンパン島に上陸しました。この島は三年前まで中国人がゴムの木の栽培をしていた様ですが、上陸当時は全くの無人島になっていました。この島で道路建設を命ぜられ毎日道路作りに懸命でしたが、私は炊事班長として皆が栄養失調にならない様最善の努力をほらいました。三ヶ月が経った頃、イギリスの携帯食料（栄養価の高い缶詰）の給付があり大変助かりました。その食料で皆が軽くなったと大喜びしてくれました。

二十一年五月日本に帰ることが出来ると言う噂が広まり、手を取り合って喜びました。いよいよ復員の為レンパン島を離れ二十一年六月十四日名古屋港に上陸し十七日故郷の庄内に帰り

つくことが出来ました。

回想「八月十五日」

祝吉町在住 東区出身 宮田安子

昭和二十年八月十五日を、私は、韓国ソウルの軍司令部内で迎えました。朝鮮軍七四四〇部隊（防空通信隊）の軍属として業務についていました。朝鮮には、B 29が偵察の為、毎日の様に侵入して来てはいましたが、実戦は、殆ど無くて終戦になったのでした。色々のデマの故であったのですが、終戦の玉音放送の後に、軍司令部には、戦車の集結があったり、それから私達にも、自決用の葉が手渡されたりしましたが、結局何の事も無く家庭に戻りました。

その後、私達は、米軍の計画輸送による待望の引揚が始まりました。三十八度線以南の引揚であったとは云え、矢張りそれは、惨憺たるものでした。貨車や、無蓋車を乗りついでの引揚でしたので、髪の中は、コークスでがらがら、その間着のみ着

のままの二週間の収容所ぐらしも有ったとあって、体中、虱だらけでした。やっとの思いで仙崎に上陸、夢にみた庄内に向かいました。沿線の柿の木にのこる塾柿の紅が眼に沁みました。日本に着いたという、生々しい実感でありました。そしてやっと、都城に辿り着いたわけですが、すっかり昏れてしまった本駅のコンクリートの上に、持ち帰ったシャツ一枚ひいて、一夜を明かしました。さすがに、十月の冷気が身に沁みましたが、帰り着いたというよろこびの方が大でした。（余り、私たちが汚かったからでしょう。駅前どの旅館も泊めてはくれませんでした）翌朝、谷頭から馬車で、諏訪原の秋永家に着いたので、迎えてくれた秋永の叔父叔母は、言葉もなかったようでした。乞食の様な私達（父と母と私）を判別するのにはしばらく時間がかかった様でした。私には、ソウル出発後夢にまで見た、ふるさと庄内でしたので、喜びの方が先でした。その時の父母の心中を察するには、私はまだ若かった様です。そして迎えてくれた叔父叔母と、悲喜交々の涙を流し合ったというわけでありました。

ともあれ、運命の皮肉でしょうか、此の終戦がなかったら、私はふるさと「庄内」を知らなかったかも知れません。私は、私にしかとふるさとを与えてくれたこの終戦（敗戦でもいい）

にこそ、乾杯しなければならぬのではないかと、実感している次第です。

それからのあけくれば、御多聞にもれず、大変な経験の連続ではありました。狭くなった国土自体が、未曾有の飢饉状態であつた上、何千万人の引揚者を受入れたわけですから、日本は形を変えた超非常時局を迎えたわけでした。その混乱期を、兎にも角にも乗り越える事が出来たのは、国土とその他もろもろの御蔭ではありますが、その中で何と云つても、あけくれ私達家族を支えてくれた今は故人となつた秋永の叔父、叔母、坂元英俊叔父、長峯の叔母、岩佐徳男叔父と叔母、そして父方、母方の親戚の方々の御盡力がなかつたらと思つと、今も背筋の冷える思いがします。フジ叔母は今も健在で、活躍ですがその折の御苦労など、一人の感慨で思い出される事もあろうかと思つと、一度は、とくと伺つておかなければならないと思つていきます。ともあれ、皆様の御蔭で、今日の自分が有るという事を肝に銘じて生涯忘れることは無いであります。

その間、同じ引揚者であつた田崎の叔父達との生活もありましたが、不思議な事に、今は故人となつた従弟たちのその頃の笑顔や、笑い声が折にふれて髣髴とすることがあります。苦しかった事よりも、むしろ楽しかった事の方が、思い出の中では先行

するものようです。

一つ口惜しい事があります。それはふるさとに、母校をもたない事です。

母校ありて　こそふるさと　合歡の花

の感慨は、否めません。但し、勿論それに代る友情と交友を頂いて、今日があることに大いに感謝している事も事実であります。

終戦記念日を間近に迎えて思いますことは、終戦から今日に至る歳月は、正に半世紀に近い長い歳月であり、しかも特異ともいふべき変遷の歳月であつたと思います。

この半世紀の移り変わりを、一語り部として、若い人たちに話しておきたい思いにかられます。何事にも飽食している現在の若者は、済んだことなんかには、興味が無いかの様であります。しかし、過去があつての現在、未来だということをお忘れなく、欲しくないと思ひます。此の半世紀のずっしりした重みを、しっかりと感じてほしいと思ひます。

過去に向かつての報恩が有つたればこそ、現在の幸せがあり、未来へも精一杯羽搏けるといふものであらうと、切に思うのであります。

― 鋒・奈良部隊

(第57軍野戦貨物廠)のこと―

町区 堂 園 幸 子

昭和二十年十月に米軍が志布志湾に進攻すると予測した軍部は、当地区に五ヶ師団を配置することになり、これに対応するために、陸軍糧秣廠を庄内青年学校（現庄内中）に設置することになったということです。昭和十九年春頃、藤實恵夫大尉が先遣隊長として赴任し、昭和十九年六月頃、鋒・奈良部隊の隊長、奈良愛英中佐の率いる本隊が到着、物資の搬入は十九年の末頃から行われ、庄内を中心に、財部や山田など北諸県郡内の町村の洞窟や野積みなど約七〇〇ヶ所に十万人が六ヶ月間、生活できるだけの食糧・被服・医薬品などの物資が集積されていて、九州では最大規模のものだったそうです。後に小林地区に設置されていた被服廠や需品廠も合併されて、第57軍野戦貨物廠と改称されたのが丁度終戦の日の八月十五日でした。

私は昭和十九年七月、十八歳のとき、川崎航空都城工場より糧秣廠に転属になり、筆生（事務官の呼称）として勤務してい

ました。

庄内空襲のときは糧秣廠で事務をとっていましたが、午後二時半頃「堂園筆生の家付近が空襲を受けたらしいから帰ってよい。」と言われて、佐藤さん（現在藤田節子、西区出身）と二人で走って帰りましたら、家は全くの丸焼けで、立っているものは柱一本とてなく。ただ、火のオキだけがくすぶっていて、父も母も茫然として立ちすくんでいるだけでした。でも、戦が激しくなれば、どこの家も焼けてしまうのだと思っていましたし、涙も出ませんでした。

終戦の報は糧秣廠で将校さん達から聞いて知りました。その後、将校さん達の中には、「最後の一兵まで戦う。」と言って、霧島の山中など、それぞれ立籠る場所まで決めて、その場所へ物資を運んだ人もありましたが、時が経つにつれて、意気ごみも薄れ、軍上層からの命令もあり、それ等の物資は元に戻されました。

青年学校での残務整理は十一月頃で終わり、私はその時まで勤めました。その後も、乙房の益留さん方を借りて、残務整理は続けられましたが、いつまで続いたのかわかりません。

私達の町が空襲の目標にされたのは、このような大きな物資集積の拠点があったからだと思えます。



第57軍野戦貨物廠 隊職員一同

8月15日糧秣廠から貨物廠へ改編されたときの記念写真である。



昭和55年11月2日行われた戦後はじめての懇親会 於 関之尾観光ホテル

関之尾観光ホテルのまわりの山には洞窟もたくさんあったので、ここで開催されました。近くに現在も残っている洞窟があります。

後は、編集部の設定問に答えてもらった記事です。

設問一、あなたは、この日、どこにいて、どんな仕事を
していました。何歳でしたか。

設問二、終戦をどんな方法で知りましたか。

その時まわりの様子はどうでしたか。

設問三、終戦を知った時、まずあなたの頭に浮かんだ事
は何だったでしょうか。

設問四、終戦後、庄内に帰るまでの苦労話など聞かせて
下さい。

(庄内在住の方は、庄内の混乱の様子など)

設問五、その他感想など

(後になって聞かれたことでも結構です)

千草 志々目 義 経

一、南京の五台山憲兵学校卒業後、揚州に配属命令を受け、揚
子江を下る軍用船上におりました。二十才でした。

二、揚子江を下る軍用船上で、上官より全隊員に終戦の報告が
ありました。本当だろうか嘘ではないのかという気持が半々
でした。

三、揚州憲兵分隊に着いたら、全員自決せよとの命令が下るだ
ろうと噂しながら、生きた心地はしませんでした。

四、揚州で捕虜になり、支那軍の使役や、ゲリラ討伐に駆り出
されましたが、憲兵という仕事でしたので身分がばれはしな
いかと、いつもびくびくして飯も喉を通らない日が続きまし
た。

翌二十一年四月初め、引揚げの為揚子江を下る時も、支那
軍の激しい銃撃に遭い、とても生きて内地に帰れないと何度
か観念しました。上海で引揚船に乗る時も、兵科は工兵に変
え、偽名を使ってやっと許可がおりました。

五、兵役から捕虜へと、どんなに辛くてもお国の為と思い、銃
後の人々の幸せを祈って頑張りましたが、何の為の戦争だっ
たのか後からは解らなくなりました。

本当に馬鹿な戦争をし、多くの犠牲者を出したものと残念
念でなりません。

乙房 馬 籠 武 男

一、陸軍召集兵として、中国揚子江畔の都市武漢から約四十里
離れた農村に守備兵として駐留し、軍務についていた。三十
五才でした。

二、軍の命令により、戦が終わったので本部に引き上げて来るよ

うにとの事で、終戦になった事を知った。

日本軍に味方し加勢していた中国人達は後難を恐れ、武漢まで行けばどうにかなるといつて逃げて行った。日本を敵視していた人達は勢を得て強くなってきた。やって来たのは八路軍の手先だった。

三、戦争が終って良かったと思った。

早く引きあげて帰らないと、どうなるか解らないので心配だった。急に命が惜しくなった。

四、武装解除されて心細くなったが、村人達は安心するようにと私達の安全を守ってくれた。

いつ帰ることが出来るか見当もつかず、船に乗ることも解らず不安であった。

中国からの引揚げは一番最後になり翌年の七月十五日に日本に着いた。(病院船を利用して)終戦後約一ケ年の歳月が流れていた。

食糧難の時に米や肉類を与えてくれた蒋介石軍は親切で頭が下った。

千草村 永 シ ヅ

一、昭和十八年三月、庄内高等小学校を卒業し、四月満州鞍山病院看護婦養成所に入所して、二十年四月、正看護婦になるまで看護婦として、病院に勤務しておりました。

十七才でした。

二、四十七年前の八月十五日、正午前病院内のけたたましい非常ベルの音、つい昨日の様に私の脳裏をかすめます。

職員、看護婦歩ける傷病者は皆病院前の広場に出ました。雑音で、とぎれとぎれ幽かに聞える終戦の玉音放送でした。

昭和天皇の生の声であることを聞かされ、声もなく只茫然としていました。

三、祖国に残した老いた父母、命の綱とも頼っていた唯一人の兄は、沖繩でどうなっている事だろうと、走馬灯のように、私の頭上を駆け巡りました。そして、満州より内地に果して帰る事が出来るだろうか、不安が一杯でした。

うつろな気持で譬えよえがありませんでした。行き場を失った看護婦達は、八路軍に捕まえられ戦場に駆り出されました。私は幸いにして、Aさん夫婦(宮崎の人)にお世話になる事が出来まして、一年余り丸坊主もならず、難を逃れることが出来ました。

四、二十一年九月半ば、引揚命令が下りまして、数十名で鞍山を後にしましたが、コロ島より乗船するまで、二十日余り、

栄養失調で発熱する病人が多く出て、やっと乗船出来ました。が、海水面に沈む船底におしこめられ、時間もわからず、船酔いに悩まされ、失神寸前でした。何日過ごしたか解りませんが、佐世保の港が見えたから、甲板にあがってもよいとの命令があり、一刻も早く上陸したかったのですが、又陽チブスの患者が出て佐世保港を眺めながら、船上で一ヶ月足止めされました。死もの狂いで帰郷したのは、二十一年の十一月でした。

五、忘れることの出来ない昭和二十年六月、B29の空襲で、近くの昭和製鋳所の溶鋳炉が被爆し、直ちに傷者収容にかり出されました。被爆の大きな大きな穴のまわりには、足の踏場もない程、火傷でただれ砂にまみれた日本人とも、満人とも、見分けのつかない痛々しい姿がそこに在りました。

「痛い、痛い」「アイゴ、アイゴ」(朝鮮語句で悲しみ泣くこと)と泣き叫ぶ傷者を、病院に収容しましたが、命も力も尽き果てて死んで行った、あの無残な情景は、今思い出しても、身の毛のよだつ思いが致します。

真剣に悩み、苦しんだ十七、八才でしたが、今ではもう昔

の事になってしまいました。これは私の世代の共通の思いではないでしょうか。

千草 白 杵 アヤ子

一、学徒動員で名古屋に居りました。当時は大きな工場は殆んど軍需工場になっていましたが、私達は、愛知時計工場で、飛行機から落とす爆弾の信管を作る仕事をしていました。十七才の夏でした。

二、天皇陛下の玉音放送で知りました。丁度昼食の為に寮に帰ろうとしている時に、とても大切な放送が始まるから広場へ集まる様にという事で、皆何だろうとぞろぞろ歩いて広場へ行きました。もう沢山の工員や学徒動員で来ていた学生・生徒達が集まっていて、私達は後ろの方に並びました。

やがて、十二時のサイレンと同時に玉音放送が始まりました。ラジオは、ガーガー言ってあまり鮮明には聞き取れませんでしたけれど、無条件降伏!!という言葉は、はっきり耳に焼きつきました。前の方から始まったすすり泣きの声が、後ろの方へ小波の様に伝わり、皆地面に俯うつぶして泣きました。

三、これで空襲の恐怖にさらされることもなく、何キロも遠くの郊外まで、警報の度に避難しなくても済む様になるとい

安堵感と、懐かしい父母のもとへ戻れるのだという嬉しさ、それに今迄日本は必ず勝つのだという信念が覆がえされた事への虚脱感が交錯していました。

四、終戦後二日目の八月十七日に、名古屋を出発して宮崎への帰途につきました。ぎゅうぎゅう詰めの汽車に乗り、途中広島駅で下車しました。乗り換えの為です。充分時間があると言う事だったので、駅前の町へ出てみました。広島は原爆落下後十日余り過ぎていたのに、まだ町の中に原爆の後遺症がくすぶっている様でした。壊れたコンクリートの建物の壁に、被爆者の方が二、三名取り残されているのを見ました。爆風で引き裂かれた衣装を身につけ青白い顔で低い呻き声をもらしている人、焼けただれた皮膚の皮が剥がれてぶら下がり、その内側から赤い肉が覗いている胸を剥出したまま力なく壁に寄りかかっている人達を見た時、胸がつぶれる思いでした。再び汽車に乗り、窓外に見た光景も又忘れることは出来ません。川のほとりや、川の中に丸々と膨れあがって死んでいる夥しい数の馬や牛、水を求めて集まった哀れな家畜達の苦悶の姿にも、原爆の恐ろしさを見た思いでした。

汽車は九州へ着き、いよいよ宮崎へ近づいてホッとする間もなく、車内のあちこちで、宮崎市内にはもう若い女は一人

も居ないそうだと、進駐軍から身を守る為に、霧島の麓に疎開したそうとか、髪を切って男装をしているそうとか言う声があがり、一時騒然となりました。私もハサミがあれば髪を切るのにと真剣に考えたものでした。それで皆がした様に手拭で髪の毛が見えない様に、しっかり頭を包みこみました。焼夷弾で二回焼け出され、着る物も無くなり、支給されたカーキ色の軍服のような服を着て、浴場も焼失して川の中で時々体を洗う位のことと汚れ放題、日焼けした真黒い顔、どこから見てもとても女には見えない格好になりました。

しかし、宮崎駅に降りたら、若い女の人も大勢いて、町は穏やかで車中で言われていた様な、不隠な感じはありませんでした。私達は列を作り学校に向けて歩きました。でも懐かしい学校は空襲で焼けてしまって、外の石塀と奉安殿の壁が残っているだけでした。私達は流れ出る涙を拭くのも忘れ、只茫然と門前に立ちつくしていました。

宮崎に居ても校舎も寮もなくはどうにもならないから呼び出しがあるまで各自自宅で待機しておく様にと言うことで、各々郷里に向かいました。私も高城や都城の友達と一緒に、日豊線に乗りこみました。しかし、車内はすごい混雑で友達とは直ぐはぐれて、押され押されて通路の真ん中に立って

ました。所が山之口駅（青井岳だったかも？）で、復員兵の人達が大勢乗りこんで来て、ただでさえやっと立っていたのに、片方の足を引っぱられ、人と人との足の間に挟まってしまいました。抜き出す事は出来ず、挟んでいる人に頼んでもその人達も身動き出来ない状態で、そのまま片方は床に片方は横にあげた儘、都城駅まで行きました。その間の時間の長かったこと……

駅に着いて、人に押されながらホームまでは降りましたが、足がしびれて暫くは歩けませんでした。足のふくらはぎや太股をもんだり、膝を曲げたり伸ばしたり、暫く足の運動をしてから、吉都線に乗りかえました。吉都線も満員でしたが、今度はちゃんと立てたので谷頭駅では、無事降り立つ事が出来ました。

家に帰り着いたのが昼過ぎ、昼食を済ませた母が畑仕事に行く為に外に出た所に帰り着いたのです。懐かしさと疲労と空腹と嬉しさで、母の側へ走り寄り「ただいま」と言ったのに、母は私の顔と身なりを見て「誰さあじゃっけ」と言うのです。私はもどかしくて「アヤ子じゃっど」と言い乍ら母に抱きつきました。「アヤ子か、まこちアヤ子か？」と、母もやっと私だと解ってくれ、二人で再会を喜び合ったことが、

昨日の事のように思い出されます。

町区 山元 昭平

一、四国高松飛行場で、四式戦闘機（キ八四）の機付長として、遊撃態勢の任務にっていました。陸軍特別幹部候補生として、明野飛行隊に所属しており、当時十九歳でした。

二、十五日の正午、重大放送（玉音）があるとの話がどこからともなく伝わり、集まりましたが場所は、或る大きな家であった様に思います。周囲は飛行兵等三、四十名位が居り、何となくざわめいて落ち着きがありませんでした。

三、パイロットも、整備兵も、身心ともに極限状態にあったと思います。その時、雑音とトギレトギレに流れる天皇の声を耳にしましたが、左程興奮は覚えませんでした。むしろ、何となく自失茫然として、耳をそばだてて居ました。死ぬ気で来た人間が目標を失った時、その瞬間は目の前に霞がかかった様で、しばらく呆然とした雰囲気、周囲が無風状態になりました。真夏のせいかも知れなかったが、皆若い兵士で、パイロットも吾々も無口になっていて、二十分～三十分経過してから、異様に目が光り出し、複雑な感情のみが胸の裡を走り出した気が致しました。理性は無かった様に思います。

四、明野飛行隊（原隊）へ帰り、上司より原隊復帰の命令があると思うから、心の準備をして、いささかも無謀な行動は慎む様にと訓辞され、少量の食糧と衣服を貰って、松坂を経て、名古屋電鉄の無蓋車にゆられて帰途につきました。

途中、広島に来た時ホームにズラリと並んで、両手、片手を差し出して無言でジーツと食糧（カンパン）を懇願する目を向けられた時、初めて戦争に負けた実感が胸をよぎりました。そして、下関、門司に近づいた時、飛行兵は、アメリカ兵の検閲で男根を切除するとの飛語が流れて、恐怖にさらされました。又九州に入って、台風の影響で橋が流されていて、徒歩で峠を上り下りして、宮崎へ辿り着きホッとした思い出があります。

宮島 今村 勇

一、神奈川県渚之辺陸軍整備学校練習隊で、技術兵として應召された新兵さんに、戦車、自動車整備の訓練の助手をしていました。應召兵の教育も二十年の初め頃より、三ヶ月で整備訓練を終り、何一つ完全な仕事は出来ない儘、部隊へ配属されて行き、ただ日本の勝利を信じて、命令に従い、戦場へ向かったに違いないと思います。その中には、戦場へ着く事も

なく、敵の攻撃を受けて、荒波の中自分の死を覚悟して、お父さん、お母さん、妻子の無事を祈り別れを告げて、海の藻屑と消えられた方々も多かったと思います。

私は当時二十三歳でした。

二、丁度、その日は対空監視の任務の日であり、高架水槽の上で、敵機の監視をしていました。何時も敵の飛行機が横浜方面より、我が上空へと飛来してくるようになり、その日は同じ方向より飛んできて、全然攻撃をしないので不思議でなりませんでした。交替の兵も来ないまま、中隊へ帰って来いとの命令があり、不思議な想いで何も解らず不安でなりませんでした。中隊へ帰り、戦争の終わった事を知りましたが、陛下の敗戦の詔勅がラジオで放送され、初めて戦争が終り、日本は負けたのかと思う反面、信じられず、情ない思いで二、三日が過ぎました。兵士達は皆右往左往しておりました。

三、建国以来、負けた経験のない日本の私達は、敗戦後どうなるのか、その心配が一番先に頭に浮かびました。支那事変等に出征された先輩達から色々な話を聞きました。負けた戦の後、人道的には考えられない兵士達のけしからぬ振る舞い等があるとか、勝利国の兵士達が進駐して、どんなひどい目に合うのだろうかとか、女子共、復員兵はどうなるのだろうか

か等々、そんな事が走馬灯のように脳裏を駆けめぐりました。日本軍の進撃の行動とは違い、終戦後の進駐軍アメリカ兵の行動は、日を追うにつれ紳士的であることが時間と共に解ってきました。

四、横浜より復員列車が小倉まで仕立られたが、貨物車ですし詰でした。小倉駅で下車をして、日豊線の普通列車の都城行きに乗り替えましたが延岡近くまで来ると、アメリカ軍により鉄橋が破壊されており、折返し運転であることを知らされ、列車は駅でない場所で停車し、降ろされました。夜でしたので、あたりは暗く初めての土地で、全く見当が付きませんでした。近くに小さな灯が見えたので、其の灯を目当てに歩き着いてみると、台風の為家は倒れていましたが、茅葺の屋根の合掌だけが立っていて、一部を切り開いて、その中で老夫婦の方が種油の行灯あんどんの光で、土間に薪をほそぼそと焚いておられました。復員兵であることを告げて、中へ這入らせて貰いましたが、主人の話でその付近一帯は、大型台風により大被害を受けたとの事を聞き、終戦の悲しみが増して感じさせられる気持でした。湿った巻煙草が焚火に乾されていましたので、私は隊で支給された巻煙草を十箱位分けてやりました。その後、戦争の話などをして、そこで夜明けまで待たして貰

い、翌朝次の折返し場所まで行って乗車し、ようやく谷頭駅に着く事ができました。

五、誠に悲しい戦争体験でした。敗戦国民が、どんなにみじめで、悲惨なものかを思い知らされました。

二度とこの様な戦争は起こしてならないと思います。

東区 亀 沢 テ ッ

一、主人が鹿児島純心高等女学校に勤務しておりましたが、男子の先生方が少なかったので、多忙な毎日を過ごしていました。当時学校は、鹿児島市内の鴨池の山の上の学校から、谷山の海岸にある小松原の学校に移転していて（現在のラサール高校）学校の中の職員宿舎に住んでいました。

当時二十三歳でした。

二、主人は学徒動員で、上級生を連れて小倉の兵器工場に一月行き、無事生徒達と帰ってきましたが、その翌日からは、当局からの命令で、小松原の海岸で、海軍特攻隊の製塩奉仕作業に従事し、生徒達と宿泊を共にしながら、日夜、空襲をもとめせず頑張っていました。八月十四日、主人は公用で徒歩で焼野ヶ原の市内を通り、加治木まで出張して留守でした。丁度その頃、主人の弟（東大出身近衛薬剤中尉）が、学

校に主人のことを心配して宿舎に来ていました。義弟の連絡で、全生徒、職員の家族は学校に集合するようにとのことで、初めて戦争に負けたことを知らされ、涙にむせび乍ら、玉音放送を聞きました。それが終ると同時に、婦女子は全員避難するようにとの当局からの達しがありました。

三、八月十五日の玉音放送を聞いた時、一億玉砕のことを常日頃聞かされていたので、宮崎県の庄内に住んでいた年老いた母や、たった一人の妹のことが頭に浮かびました。主人とも別れた（出張中）儘だったので心配でした。

終戦近くまで、庄内の我が家は特攻隊将校さん三人の宿泊所になっていましたが、終戦間際に三名出撃され、二名の方が未帰還だったそうです。

四、玉音放送を聞いた後、婦女子は全員直ちに避難せよとの達しがあり、取るものも取りあえず、生徒を迎えに来た父母に引き渡し、県外の二名の生徒を連れて、校長先生方の家族と熊本へ、学校のシスター長崎へと、一緒に谷山から鹿児島駅まで、手荷物を持って焼野々原の中を走るようにして行きました。鹿児島駅も一トン爆弾で吹き飛んでおり、汽車に乗る人達で大混乱でした。やっと三人列車に乗り、立った儘、都城駅まで辿り着いた時、庄内の学校付近は空襲で焼けたと聞

かされ、庄内の家も焼けたのではないかと、歩いて家に帰り着くまで心配でなりませんでした。

五、我が家の隣まで焼けていましたが、石垣、柱、床の間、屋根には、無数の弾痕があり、よく母や妹は助かったものだと思います。

千草 赤池 実年

一、福岡県糸島郡小富士航空隊で、海軍整備兵として、兵役に従事しておりました。十八歳でした。

二、軍の報道により終戦を知らされました。内地でしたから、その時は別に、特に変わったことは無かった様な記憶がします。

三、もうこれで日本も終りかと思いました。我が身も如何なることになるかと言われるままに、終戦一週間で郷里に帰されました。

四、帰りは貨物車でしたが、兵隊で混雑し、想像を絶するものでした。人と人との頭の上に乗る、身動きもとれず、死ぬ程の思いでした。駅に着いても終戦後真っ先の復員兵でしたので、本当に恥ずかしい思いをしました。

一、鹿屋海軍航空隊に所属していましたが、宿舎は高隈山の麓の郷ノ原村で、飛行機の整備員として働いていました。

当時十八才でした。

二、宿舎に全員集合して、重大放送を聞きました。内容はよく解りませんでしたが、終戦の知らせでした。誰も口もきかず只黙っていました。暫くして泣く者、笑う者がいて騒然としました。

三、米軍が垂水港に上陸するというデマがとんで、全員が此処からどう脱出するか、頭の中がパニック状態にあった。

四、米軍はなかなか来なかった。二、三日は残って糧秣で、おハギ等の御馳走があった。解散になって、帰還の許可が出たが、鹿屋駅は人また人で、列車は天上まで人の群れでとても乗れる状態でなかった。運良く同隊の燃料補給車が、小林方面に帰るといので小林まで同乗させて貰ったお蔭で、最終列車に間に合い、谷頭駅まで着くことが出来ました。谷頭からは歩いて庄内まで帰りました。

五、当時は、十七、八才の者が飛行機の整備をして、二十才前後のパイロットも、それを信頼して飛び発ちました。

今は申訳ない気もしますが、そんな若い人が整備した飛行

機に乗れるでしょうか。今考えます時十七、八才の者が整備した自動車に私共は不安で乗る気もしません。

身心共に飛行機に精魂を打ち込んで、いたからこそ、隼、0戦の様な優秀な飛行機が、戦果を上げることが出来たのだと思います。

今屋 鶴村 栄

一、鳥取県米子飛行場で、飛行機の整備をしておりました。二十二才でした。

二、飛行機の整備中に戦友から、日本が負けたことを聞かされて知りました。まわりに四、五人戦友が居たが皆茫然としていました。

三、これから先、日本はどうなるだろうか。この儘無事に故郷へ帰れるだろうか、米国軍から奴隷のようにこき使われるのではないかと、不安と恐怖が入り混って複雑な心境でした。

四、八月十七日頃だったと思います。米子海岸に米軍が上陸するとの事で、私達は他所の部隊から銃を借り迎え撃つべく待ち構えていましたが（整備中隊には銃がなかった）何事もなく二十日解散となりました。結局はデマでした。

二十一日昼頃、米子駅から汽車に乗りましたが、満員の為

仕方無く戦友と四人で機関車の石炭の積んである所に乗りました。トンネル通過の度に、煙と火の粉で今にも服に火がつきそうで心配でした。顔は四人とも真黒になり、途中鉄橋が所どころ破壊されており、下車をして何軒も歩いたりして、二十三日昼頃やっと我が家に辿り着きました。

五、新田原で米子隊と広島隊の二中隊に分れましたが、米子隊では三人が飛弾により戦死し、広島の一部隊は原子爆弾で幾人かが被爆しました。

昭和五十五年から年に一回戦友会を行い旧交を温め、当時の事を想い出していますが、戦争の悲惨さ、平和の尊さをつづく感じる今日此の頃です。

千草 長 友 ハツ子

一、県青少年農兵隊の看護婦として勤務中でした。隊員は百五十名で三小隊からなり、一小隊は安久温泉、一小隊は志和池のお寺、一小隊は山田に分散しており、看護婦は私一人で大変働き甲斐のある仕事で頑張っておりました。十七才でした。

二、十五日は安久に居りましたが、志和池へ行くべく朝早く安久を発ち、歩いて志和池のお寺に着いたのが丁度十二時五分

前でした。所がお坊さんが出てこられ私に向かって「日本は負けました。十二時からラジオで天皇陛下のお言葉があるから聞いて下さい。」と言われましたが、ラジオが近くに無く陛下のお言葉を聞くことは出来ませんでした。お寺には兵隊さん達が沢山いましたが、みんな口々に畜生畜生と叫びながら星の肩章をはずし、地面に叩きつけていました。

三、必ず勝つと信じていた私は敗戦をどうしても信じられませんでした。勝利を信じ命を賭けて飛びたった特攻勇士の死は一体何だったのだろうかと空しい気持ちで一杯でした。

四、その日のうちに三小隊共山田に集結し、隊員は解散されました。私達幹部は十六日に解散されましたので、郷里である山田に苦勞することもなく帰ることが出来ました。

五、山田に集結した時、山田にも朝鮮人の兵隊さんが沢山居て終戦を知った途端、「日本負けた、負けた、朝鮮万歳、万歳」と大声で叫びながら、自動車に乗り谷頭駅に向けて去って行った姿を目前にして、敗戦国のむなしさに淋しい思いをした事を思い出します。

乙房 中 島 善 治

一、県立長崎中学校三年生の学徒動員の指導員として、長崎市

三菱造船所で軍需工場の造船の部品加工の仕事に当たっていました。年齢十九才でした。

二、会社の幹部が玉音放送があったことを知られてくれた。

八月九日、長崎の市街は原子爆弾の投下により、大騒ぎになっていた。死傷者は溢れ、自分の事が精一杯で、早くこの地を抜け出し郷里に帰ることしか考えていなかった。

他の人達も我先にと次々帰って行った。

三、一刻も早く郷里に帰りたい。どうしたら帰ることが出来るか心配で、汽車の切符を手に入れるのが最大の悩みの種類であった。

四、長崎から鳥栖までは汽車で。鳥栖から八代までは歩くことの方が多かった。鹿児島市の人と二人で帰り途中で別れたが、腹は減り、足は痛く辛い思いをした。人吉では大人達が大豆の炒ったのを食べていたので貰って食べた。空腹が満たり、こんな美味しいものはなかった。

今屋 鶴 島 善 市

一、終戦は防衛隊本部に知らせがあり伝達で早目に知りました。

二、戦争は必ず日本が勝つものと信じておりました。内地まで被害を蒙るとは夢にも思いませんでした。

三、米軍の兵器が日本軍の何倍も威力があったのに驚いた。又科学兵器が多かったこともあり、太刀打ち出来ないと思いましたが。

四、兵役にあった者は、いつかは殺されると思い、戦々恐々としていた。又年若い女の人達は何処か山奥に逃げてゆきたいと話をしていた事を思い出します。

町区 南 崎 喜 美

一、国防婦人会の幹事として勝ち抜くため、幼い子供は家族にたのみ、慰問や祈願祭の物資をもらい集めに、かけ廻っていました。

二、終戦を知ったのは、婦人会幹部がみんなで貰い集めた野菜を大きなたんで洗っていた時でした。

三、敗戦を知った時、自らの事よりも子供たちの将来が非常に心配になりました。

四、戦争中の国防婦人会を解散するための大会を行うと同時に、戦後の民主団体の発足に、町民全体に呼びかけて、婦人大会を開催しました。大変盛大に行われました。

五、戦争中あづけていた家財道具を、関之尾、上川崎、下川崎に受けとりに行ったのも大変な事でした。

戦争中別宅を軍隊が借りておられました。将校八名、運転

手二名、炊事当番二名でした。終戦前、庄内空爆八月六日・

一番若い将校が戦死されたのは、本当に気の毒でした。姫路より家族が見えて葬式をしました。

平田 福 留 利 行

一、自宅から通勤で今の都北町にあった都城東飛行場建設工事の大林組（野口事務所）に勤務し、毎日現場調査に廻っていました。二十八才でした。

二、終戦のラジオ放送は自宅にラジオが無かったので、盆休み明けの十六日会社に行って同僚から聞き始めて知りました。

三、米軍が日本に進駐して来ると言う事で、家族の安全が一番先だと想いましたが、どうしてよいか解らず困りました。

毎日仕事も手につかず、茫然とするのみでした。

四、城山、湯谷、母智丘などに日本軍の物資貯蔵の為の横穴が沢山あって、食糧、衣類等が入っていましたが、夜になると皆盗りに行き、気のきいた人達はその品物で商売を始めていました。

乙房 馬 籠 アヤ子

一、市内の国民学校の教員をしておりましたが、終戦の日は都市北原町の自宅に居りました。十八才でした。

二、前田町、平江町あたりは、米軍機の空襲で広く焼けていました。私は家族四人で床の間のラジオから雑音混じりに天皇陛下の玉音放送を聞きました。今は亡き父が敗戦になったことを残念がり、声を出して号泣したことを印象深く思い出します。

長男はミンダナオ島の戦線で戦死し、公報を手にしたばかりで、次男は学徒出陣の海軍少尉として、何処に居るか不明でした。

三、国民学校はどうなっているのか、どんな明日が待っているのか、天皇はどうなるのか。等々不安が広がるばかりで、米兵が憎かった。

四、終戦後二年を経て結婚し、主人の郷里に落付くことが出来ました。この間児童と共に楽しい学校生活を送ることが出来たのがせめてもの救いでありました。だけど毎日食べなければならぬ食料品の買い出しには本当に苦勞を致しました。

一、お盆に子供を連れて実家に里帰りをしていました。二十二才でした。

二、ラジオで聞いたと言って、人づてで知りました。まわりの人達も半信半疑でした。

三、日が経つにつれ、敗戦ということに唯呆然となり、全身の力が抜けてゆく様で、その時の気持は言い表わす事は出来ません。

四、これからは、アメリカ兵が上陸して来て、どうなるのだろうと言う不安が募るばかりでした。若い女の人は山に逃げないと危ないとか、一人残らず殺されるとか、色々なデマが伝わって仕事など手が付かない状態でした。

今屋 田村 ミツエ

一、夫を戦場に送り、二人の幼い子供を抱えて農作業に又は、奉仕作業にと苦しい毎日でしたけど、銃後を守る女の使命だと想って一生懸命頑張っておりました。二十七才でした。昭和二十年本土空襲が始まり大都会や軍需工場は勿論、都城まで空襲を受けるようになり、八月六日遂に庄内も空襲を受けてしまいました。小学校や付近の民家など一瞬のうち

に焼けてしまい無惨な姿と化してしまいました。それから働く気力を失い、仕事も手につかず子供達の世話といろいろのニュースを聞くだけでした。

二、ラジオで天皇陛下から国民に対し、悲痛な思いで終戦のお言葉を述べられる声聞きました。戦争は絶対に勝つものと信じていただけに、どうしても私共にはよく理解出来ませんでした。後でラジオや新聞等で広島や長崎の原爆投下の事を知り天皇陛下の御心情が解って来ました。

三、無条件降伏で、これからはアメリカ人が来てどんな仕打ちをするかわからないと言う色々なデマが飛び、恐怖と不安は募るばかりでした。

庄内に来ていた兵隊さん達は、殆ど民家に配属されており、主に関西や近畿地方の人達でした。私の家の近くに本部があり、私の家にも軍曹と伍長の二人が泊っておりました。戦時中に軍曹の方の奥様が防空頭巾をかぶり、モンペをはいて京都から面会に来られたこともありました。

終戦になった事が伝わると、兵隊さんの中に、自棄になって立っている竹を切ったり、暴れたりする人がいました。

本部では、書類を焼いたり引揚げの準備をして、早く帰らないと関門トンネルを通れなくなるとか噂が流れ、早々に帰っ

て行ってしまいました。

四、空襲を受けた小学校の講堂に糧秣が一杯詰まっていたので、焼け焦げたお米の山がいつまでも燻ぶっていました。

焼け出された民家の片づけや、仮家を作る手伝いに行きましたが、改めて空襲の恐ろしさを知りました。

五、村から出征して行った人達も、内地にいる人は続々帰って来ました。しかし暫くは食糧不足で、不自由な生活をしなければなりませんでした。私の夫は南方戦線に行った事だけは分っていたものの、軍事情報は一切秘密でしたので何もわかりませんでした。ところがインドネシアのジャワ島にいたところで、昭和二十二年二月ひょっこり部落でも一番最後に帰って来ました。本当に嬉しゅうございました。

戦後四十七年の歳月が流れましたが、今でも忘れられない悲しみと絶望の日々でした。今日の平和の大切さを、子々孫々にわたり話し伝え、二度と再び戦争など無いことを祈る思いが一杯です。

今屋 山 元 ハ ギ

一、都城市野々美谷町に、お盆の墓参りに行っていました。

三十三歳でした。

二、野々美谷町で近所のおじさんから、終戦の話を聞き急いで帰りました。

主人は三回目の召集で留守でしたので、子供達も泣き乍ら私の帰るのを待っており、本当に辛い思いをしました。

三、終戦前は連日の空襲で、防空壕に入っており、仕事も出来ず恐ろしい日が続きました。そして終戦を知った時、もうアメリカ兵に殺されると心配していました。そんな時、花盛林先生のお父さんが人民を助ける為に終戦になったのだから、心配するなおっしやいましたので、安心する事が出来ました。

四、終戦直前の激しい空襲で、庄内小学校の講堂が全焼、西の方の民家七、八軒が全焼したと記憶しています。私達の部落から奉仕に子供を背負って何日も出向いてゆきました。

五、田や畑を耕作していましたが、お米は殆ど供出して不自由な生活が続きました。家では麦の中に少々のお米を入れて雑炊を作り食べました。今考えますと夢のように想います。

主人は第一回目の召集が中支に、二回目の召集が満州里に、三回目は西部第一八部隊に派遣されていましたが、運よく昭和二十年九月二十六日無事復員帰郷致しました。

一、自宅で農作業を営んでおりましたが、この日は田んぼに草取りに行っていました。三十歳でした。

父母義妹、子供三人は家に居りました。

夫は召集されて満州に行っていました。

二、日本が戦争に負けたげなと言う人々の声、天皇陛下も降参されたげなと言う小声、日本はこれまで一度も戦争に負けた事のない神の国だったのにねと言う声があちこちで囁かれ、アメリカ兵が何時日本に進駐してくるのかと不安と恐怖の毎日でした。

三、ああ、これからの日本はどうなるだろう？ アメリカ兵が押し寄せて来て、若い女子供を迫害しないだろうかと思ひ、夜もよく眠れません。子供の事、夫の事など考え山の奥にでも逃げてゆきたい心境でした。兎に角アメリカ兵の事ばかりが脳裏から離れませんでした。

四、アメリカ兵が来てなぐり殺しにするげなと言うデマが飛び交ひ、どうしてよいか解らず、毎日が恐ろしゅうございました。

夫は召集で満州に行っていました。終戦後、宮崎郡の佐土原に帰っておりました。

五、夜半B29が飛来してくる毎に空襲警報が鳴り、何処の家でも電気に黒い布を被せ、外に灯りが漏れない様にして、じっと見守っていました。ある日アメリカの艦載機が二十機位飛来してきて爆弾を投下しました。爆弾が落ちる度に地響かして生きた心地はしませんでした。私達は空襲警報のサイレンが鳴ると同時に防空頭巾を被り、走って防空壕に這入り小さくなっていました。それがそれは恐ろしゅうございました。未だにあの時の事は頭の中に強くのこっております。



宮崎「庄内会」紹介

編集部

今回は、最も隣接した私共の同志の集いを紹介します。

宮崎「庄内会」は、昭和五十二年二月二十日結成され、初代会長に村井孝氏（東区出身）が推挙されました。

結成大会時の村井会長の御挨拶を紹介します。

前略、昔から故郷は、いつまでも永遠に私達里子に無限の安らぎと、生きる歓びを与えてくれると云います。

古今を問わず、故郷を恋うる詩にはアタマかシッポに大低は「故郷は有難きかな」と云う句で始まり又結んであるようです。

中略、さて、本日ここにお集まりの方々は、皆んな前世からの宿縁により、庄内という町に生を享けられお育ちになり、何等かの「ゆかり」を持っておられる方々許りであります。

そして、同じ古里を共にしている同志の集いであります。

「何と素晴らしい仲間たちの集いではありませんか。晴れ着を脱ぎ捨てて普段着で何の気兼ねもなく、心を許し合って語れる今日の宴でございます。後略

宮崎「庄内会」会則

(名称)

第一条 この会の名称は、庄内会と称する。

(目的)

第二条 この会は、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

(事務所)

第三条 この会の事務所は、事務局長宅とする。

(会の組織)

第四条 この会は、旧庄内町出身者で、宮崎市内及びその周辺に居住

する者をもって組織する。

(役員)

第五条 この会の運営のため次の役員を置く。

会長 一名、副会長 一名、事務局長 一名、世話人 若干名

(役員職務)

第六条 会長は、この会を代表し副会長は会長を補佐する。事務局長

は、会長の命により事務を掌る。世話人は役員との連絡を図

り、総会開催に際しては、その準備に当たるものとする。

(役員選出)

第七条 会長は、総会においてこれを定め、その他の役員は会長が委

嘱する。

(会 合)

第八条 この会の会合は次のとおりとする。

総会 毎年一回

役員会 必要に応じ開く

(会 計)

第九条 この会の経費は、会費及び寄付金をもってこれにあてる。

昭和五十二年二月二十日

*現役員(平成四年度)

会 長 村井 孝

副会長 肥後 兼行

事務局長 牧ノ瀬正雄

世話人 堂園 明

福永 一夫

坂元 国良

紫藤 俊治

今村 文雄

会員数 二〇六名



平成4年度 なごやかな会風景



平成4年度 出 会 者 一 同

読者よりの便り

神奈川県茅ヶ崎市 萬代 久男

会誌「庄内」は号を重ねるごとに内容充実され、また、皆様の関心も深まりつつあることが窺われ、ご同慶の至りと存じ上げます。

坂元徳郎さんの「庄内史探訪」のなかで、お軍神の記念碑については特に印象深く、碑の廻りを友達と手をつないで遊び回った往時が、懐かしく想い出されます。そして、日露戦争従軍者名碑の中に父の名前が判読不明のもの多数あることを知り、時代の流れにうたた感無量を覚えますが、どうぞ早いうちに願ひ寺の過去帳などで調べて頂いて、明確にして下さるようお願い申し上げます。そして、その後の第一次世界大戦から大東亜戦争に至るまでの戦没者について、何等かの形で顕彰事業が企画されることを念願する次第です。殊に大東亜戦争は敗戦となり、連合軍による一方的な極東軍事裁判判決によって「日本は侵略者」の烙印を押されたまま今日に至って居りますが、少なくとも私は青春を大東亜戦争に捧げて、今なお悔いない人生であると思っております。私は侵略戦争に駆け立てられたのではなく、

白人支配に喘ぐアジア諸民族の解放と日本の伝統文化に反する共産主義から守るために駆せ参じたのであり、そのことを今でも誇りとしております。恐らく同世代の多くの人がそうであろうと思えます。そして、戦没された多くの英霊は同じ信念を以て国に殉ぜられたのであります。これらの英霊の礎の上に今日の日本があることを忘れてはならないし、私たちはそれを若い世代の人たちに語り継ぐべき責任があるのであります。

大東亜戦争が始まってから五十年が過ぎ、そして共産国ソ連が崩壊した今日に於て、日本が果すべき国際的使命は弥が上にも重なりつつあります。日本がよくその使命を果たすには、一日も早く所謂東京裁判史観から脱却して、日本古来の伝統文化に立脚した確固した信念を以て処していかなければならないと思えます。

宮崎市 吉野 忠行

勢力的に前進されます「庄内の昔を語る会」に対しまして敬意を表し今後の充実発展を、お祈り致します。

特に「研究」欄における各氏の論述と実態把握は注目される貴重な労作で、庄内史の中心をなす記録と思ひまして、部外者にも大変参考史料となります。

又、「子や孫に語り伝える話」も、最も主要な生きた資料で小さなことでも、庄内史の一翼をになう貴重なものとなり、これらの積み重ねを期待したいと思います。

宮崎市 山口 保明

順調なご発行にまず敬服いたします。いろいろと御苦労のこと、御芳状により伺いました。

内容も史跡のご調査、伝承の研究、あるいは現在の活動状況、あるいは文芸に至るまで多彩「庄内の昔を語る会」のメンバーがどの切り口からも参加できるという、一つの文化誌にて、今後の有益な資料になります。私は、やはり歴史・民俗に心ひかれますが、もともとは文学が専攻ですので、短歌や俳句も載せられていて心が和みます。一地域の文化誌として、大変に興味ある歩みを存じています。いずれ拜眉の機会を得て、皆様に庄内の昔を語っていただくことを楽しみにいたしております。

小林市細野（町区出身） 渡 邊 盛 吾

南州神社の資料御恵送頂き有難く感謝申し上げます。子供の頃の臃げな記憶や六月灯が脳裏に浮かんで参ります。機会ありましたら、従軍者名、役後の処置など知り度いことが山々です。

御激励の有難いお手紙、ほんとうに感謝します。今後とも読後の忌憚のない御意見や御批判をお待ちしています。

編集部



編集後記

本年四月、第一回編集委員会の席上、何か特集を組んでみたらとの意見が出て、昭和二十年八月六日、庄内空襲と八月十五日、終戦のあの日、あの時を企画してみました。

寄稿の心配があったので、設問形式にしてみましたところ予想外の回答が寄せられ、整理に当った菓子野、黒木両委員、うれしい悲鳴を上げた様子でした。

また、庄内空襲被災地図作成については、記憶のさだかでない個所が多く、八方手を尽して取材した清水委員のご足労も大変だったと思います。

取材に応じて頂いた会員、その他ご協力下さった有志の方々にこの様な立派な特集が出来上がったことを感謝、お礼申し上げます。

なお、相久廟移転、金石城発掘調査は、庄内町の歴史に残る一大行事であり、町民の心に銘記すべき調査状況、記録など寄稿下さいました市文化財調査担当職員の横山哲英氏他関係者一同に対し、心から敬意を表します。

併せて、特別寄稿頂きました瀬戸山計佐儀氏、宮崎「庄内会」

を紹介下さいました村井孝氏に対し、厚くお礼申し上げます。
編集委員一同、今後ともこの会誌の発展と充実のために研究、努力を重ねる所存ですので、会員各位のなお一層の御支援と御協力をお願いする次第です。

平成四年十月吉日

編集部

編集長	白杵 徳光	坂元 徳郎
副編集長	木幡 敏正	片ノ坂 登
	馬籠 良孝	黒木 聖
	清水 省三	菓子野美和子
	山元 昭平	

庄内 第四号

平成四年十一月一日 印刷

平成四年十一月三日 刊行

刊行
編集
庄内の昔を語る会

都城市庄内町庄内地区公民館
電話(〇九八六)三七一〇八八番

印刷
有限公司 文昌堂

都城市東町十八街区一号
電話(〇九八六)二二一一二二番

